

東京財団研究報告書

2005-14

ーベトナム独立戦争参加日本人の
事跡に基づく日越のあり方に関する研究ー

井川一久 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員教授

東京財団研究推進部は、社会、経済、政治、国際関係等の分野における国や社会の根本に係る諸課題について問題の本質に迫り、その解決のための方策を提示するために研究プロジェクトを実施しています。

「東京財団研究報告書」は、そうした研究活動の成果をとりまとめ周知・広報（ディセミネート）することにより、広く国民や政策担当者に問いかけ、政策論議を喚起して、日本の政策研究の深化・発展に寄与するために発表するものです。

本報告書は、「ベトナム独立戦争参加日本人の事跡に基づく日越のあり方に関する研究」（2004年6月～2005年3月）の研究成果をまとめたものです。ただし、報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。報告書に対するご意見・ご質問は、執筆者までお寄せください。

2005年10月

東京財団 研究推進部

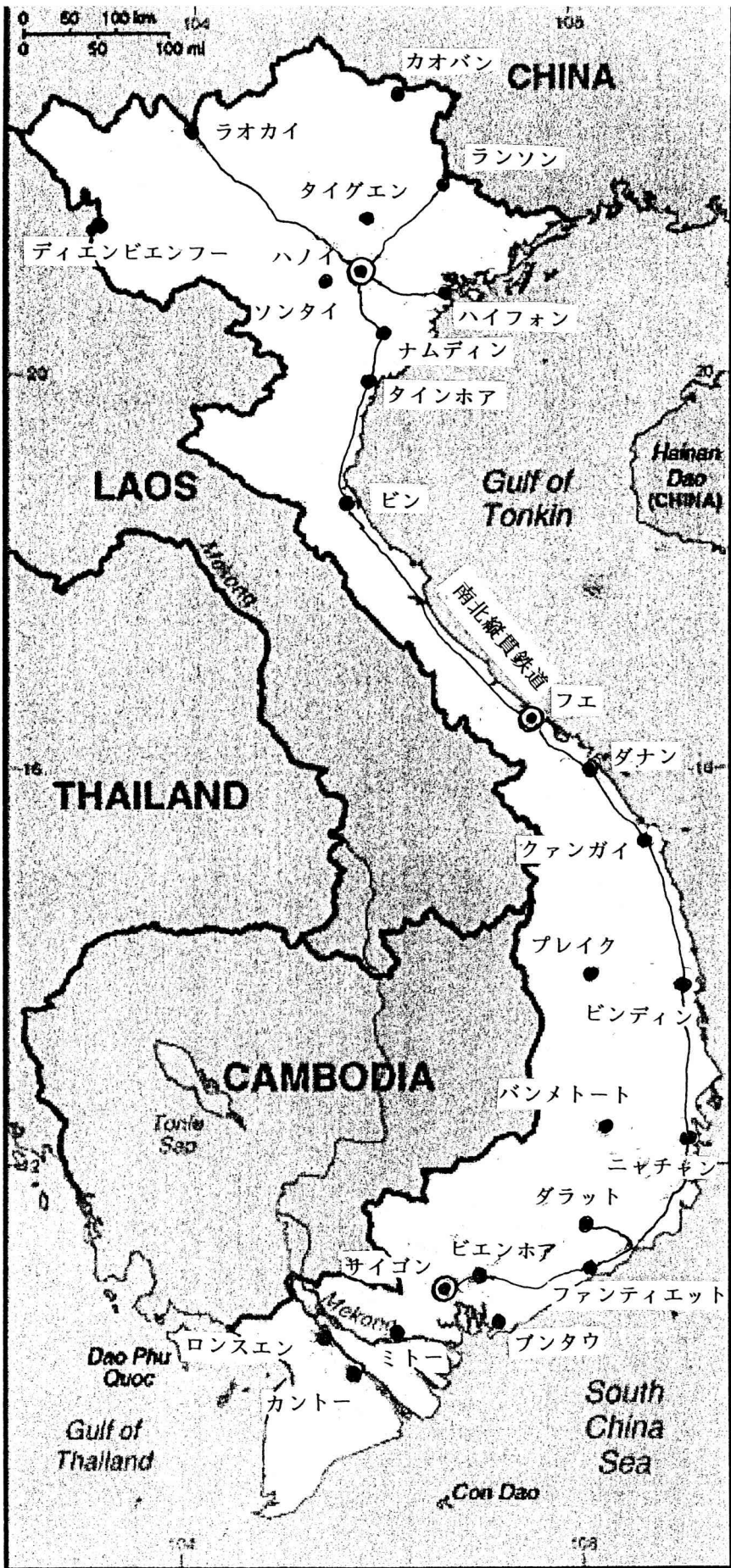
—ベトナム独立戦争参加日本人の事跡に基づく日越のあり方に関する研究—

研 究 体 制

■研究代表者 井川 一久 大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター客員教授

■共同研究者 加藤 則夫 NHK国際放送局チーフ・ディレクター

白石 昌也 早稲田大学大学院アジア太平洋研究センター教授



調査の方法と経緯

第2次大戦後に東部アジア各地に残留した日本人、とりわけ現地諸民族の独立戦争に参加した日本人に関する研究は、当の日本ではインドネシア独立戦争のケースを除いてはほとんど行われていない。本研究のテーマである「ベトナム独立戦争参加日本人」についていえば、その数がインドネシア独立戦争参加者よりも多く、またその役割が遥かに大きな歴史的意味を帯びていたと考えられるにもかかわらず、2005年まで系統的・組織的な調査研究は一度も行われず、わずかに井川、吉沢南(ベトナム現代史研究者、故人)、立川京一(防衛研究所戦史部研究員)ら数人による生存者からの聞き取り調査や欧米史料または旧日本軍公式史料による研究が行われた程度である。彼らの活動舞台となったベトナムと、フランスを含む欧米諸国における本テーマの調査研究は、少なくとも民間研究者および民間研究機関の場合、日本のそれに比べてさらに貧弱である。

その原因としては、主として次のような事情が挙げられよう。

① ベトナム現代史に関する研究者の関心が、史上最大の局地国際戦争であったベトナム戦争(第2次インドシナ戦争)や、その後のインドシナの紛乱(第3次インドシナ戦争、カンボジアのポル・ポット政権による自国民大量虐殺、インドシナ難民問題など)、あるいは1980年代末期からのベトナム政治・経済の推移(いわゆるドイモイ=刷新=と日越協力関係の進展)に偏り、ベトナム戦争に先行する対仏独立戦争への関心は極めて稀薄であった。

② 国際的な歴史研究と歴史的事実の調査には極めて不都合な世界状況(冷戦)ゆえに、いわゆる共産圏に属していたベトナムの現代史に対する外国人一般の関心が乏しく、日本の歴史研究者やジャーナリストもその例外ではなかった(ベトナムを研究する者自身が極めて少なかった)。

③ ベトナム独立戦争はそれ自体では完結せず、その直後からベトナムの南北分断、さらに惨烈かつ複雑を極めた第2次インドシナ戦争(いわゆるベトナム戦争)と、その後遺症としての第3次インドシナ戦争(ベトナム・カンボジア戦争、中越戦争、カンボジア武力紛争)が後続したため、ベトナム国内ですら独立戦争への外国人の参加はごく断片的にしか記録されず、それら文献史料も多くは散逸、また少なからぬ関係者が戦乱に倒れ、あるいは離散し、1980年代まで調査は物理的に不可能に近い状態であった。

④ ベトナム独立戦争を主導した同国の共産党(1950年までインドシナ共産党、51～75年は

ベトナム労働党、75年5月からベトナム共産党)には、独立戦争における勝利がもたらベトナム国民の主体的努力の成果であるとの見解に立って、外国人の貢献を積極的には認めようとしない傾向があった。また日越両国は1980年代まで敵対的ともいべき陰悪な関係にあり、独立戦争参加日本人の功績に触れることは事実上一種のタブーとされていた。ベトナムには、彼らが現地に残した家族(ベトナム人妻と混血の子女)が、ときたま会合することはもとより、その家族関係を第三者に公的に語ることにすら憚られる空気があった。それゆえ、日本人研究者やジャーナリストによる現地調査は困難を極めた。独立戦争に生き残って帰国した日本人も、ベトナム共産党のそれと同じ理由から、また帰国後「共産圏への奉仕者」として祖国で冷遇されたことから、自己の貢献については概して極度に寡黙であった。

* 例えば岩井古四郎氏(後述)や藤田勇氏(同)がベトナムでの体験を語り始めたのは死の直前であった。

⑤ 独立戦争の初期にはベトナム全土が混乱していた。独立戦争の主役であったベトナム民主共和国(DRV)の統治機構は、同政府が戦局の主導権を握った後半期(1950～54年)においても100%有効には機能せず、DRV指導部のあった北部ですら平野部は半ば混戦状態にあった。それゆえDRV軍事当局には日本人の活動を末端に至るまで正確に把握・記録することは到底不可能で、DRVの大小軍事・行政単位や、これを支えた統一戦線組織「ベトナム独立同盟」(ベトミン)傘下の一般軍民にも、自己と直接関係のない日本人の行動を逐一知ることはできなかった。そのため極めて不正確な噂が乱れ飛び、その一部は今なお真実とされている。同じことは、自己の功績を誇大化したり、政治的視点から事実を歪めたりしがちな一部の独立戦争参加日本人の回想記についてもいえるであろう。

⑥ ベトナムがこのような歴史的事実を正しく発掘できるような安定的発展期を迎えたのは、全方位友好外交と市場経済化を二本柱とするベトナム共産党のドイモイ路線が軌道に乗った1990年代であるが、独立戦争に参加した日本人の多くは、すでに鬼籍に入るか、もしくは高齢(75歳以上)で、もはや自己の体験と見聞を正確に語る状態になかった。彼らを知るベトナム人も同じ状況にあった。

ドイモイの進展につれてベトナムが国際社会に復帰し、日越関係もかつてなく緊密化して、防衛大学校に十数人のベトナム人学生が在籍するまでになった現在、少なくともこの問題に関する現地のタブーは大幅に解けた——または解けつつある——といってよかろう。このタブーが解け始めたのは1990年代初頭のドイモイ発動期で、少数のベトナム人研究者や井川が個

人的に調査を開始したのもそのころである。現在の調査研究環境は、その 90 年代初頭に比べてもはるかに良好で、そのことはベトナム国防省戦史研究所が我々の調査に好意的関心を示し始めたことから容易に察することができよう。しかし前記③と⑤と⑥の問題は今も継続し、⑥に至っては一層深刻化している。独立戦争体験者は日越双方で毎年死没し、日本に現存する者はもはや約40人を数えるのみ、しかもその一部は記憶も定かならぬ老衰状態にある。

それゆえ、ベトナム独立戦争参加日本人の事跡調査は、今や時間との競争となる。これこそ我々が東京財団の支援を得て共同研究を志した主な理由である。とはいえ、この種の調査研究は、ベトナムにおける調査研究の常道を踏まざるをえない。

井川は 2004 年 9 月にハノイを訪れ、旧知のベトナム歴史学界長老ファン・ファイ・レ氏(ハノイ国家大学校教授)の推薦により、ハノイ国家大学校人文科学大学ベトナム学・開発科学研究所(IVIDES、所長グエン・クワン・ゴック教授)と、① IVIDES は井川班に関係者と関係機関の紹介、インタビュー斡旋、記録・遺品収集、関係当局の許可取付その他あらゆる便宜を供与する、② 双方の得た情報一切を交換する、③ 井川班は IVIDES による支援活動の経費の一半を負担し、調査結果はすべて日越両国語で記録する、という協力協定を結んだ(ベトナムでの調査活動は一般にこのような公的機関との協定を必要とする)。この訪問に際し、井川はハノイとホーチミン市で少なからぬ歴史研究者や元ベトナム幹部と接触したが、その結果わかったのは、ベトナムの歴史研究機関・研究者一般が独立戦争参加日本人の事跡について系統的かつ包括的な知識を持たず、第 2 次大戦終結時の仏印派遣日本軍の配置についてすら確たる情報の持ち合わせがなく、この問題の調査は数人の研究者の私的な努力に委ねられてきたという事実である。ある程度まとまった記録を持つのは、恐らく共産党中央委員会と国防省の史料編纂・保管機関のみであろう。

このような事情に鑑み、我々は当面次のような調査方法を採用することを決めた。

① ベトナムで活字化された元 DRV 政府・軍関係者の回想記、歴史研究雑誌、新聞記事などのうち、独立戦争参加日本人の事跡に触れたものを収集し点検する。

② IVIDES の協力を得て、長期にわたって日本人と関係のあった人々(政府・軍関係者、元ベトナム活動家、現地妻子など)を幅広く探り出し、彼らを対象に聞き取り調査を行う。

③ 井川、加藤、白石それぞれの個人的人脈を辿って、この問題に関し何らかの調査研究を行っている人々から情報を獲得する。

④ 当面、クワンガイ陸軍中学(後述)の日本人群像に調査努力を集中する。

⑤ なるべく早い時期に、共産党中央委員会、国防省、ベトナム旧軍人会(日本の郷友会に相当)、ベトナム赤十字社の記録にアクセスする。

⑥ 日本国内では、これまで行ってきた現存する元独立戦争参加者とその周辺人物とのインタビューを加速し、併せて個人的回想記や旧軍諸部隊の記録など関連文献の収集・点検を行う。

我々は同年 11 月と 2005 年 1 月にベトナムにそれぞれ 1~3 週間ずつ滞在、上記の方針に従って集中的な作業を試みた。その結果、クエンガイ陸軍中学の日本人群像については一応満足できる成果が得られたほか、独立戦争参加日本人の全体像も概略明らかにすることができたと考える。

なお、11 月の訪越に際しては、井川が IVIDES の研究者やクエンガイ陸軍中学卒業者に我々の知見をまとめて説明したが、この会合には国防省戦史研究所のスタッフ数人が出席、この調査に参加したいとの意向を表明し、05 年 1 月の訪越では井川が外国人研究者としては初めて同研究所に招かれ、上席スタッフ(いずれも現役の人民軍将官・佐官)と意見を交換した。近い将来の同研究所の協力が期待できよう。

離隊・残留と独立戦争参加の経緯

1. 第 2 次大戦直後のインドシナ情勢と残留日本人

第 2 次大戦中に日本軍の展開していた東南アジア諸地域のうち、仏領インドシナ(現在のベトナム、カンボジア、ラオス)は、蘭領インドネシアと並んで地上戦の行われなかった数少ない地域の一つである。日本軍は対米英戦争(いわゆる大東亜戦争または太平洋戦争)開幕直前の 1940~41 年、ナチス・ドイツに敗れてその同盟国となったフランス(ビシー政権)との協定のもとに同地域に進駐(仏印進駐)、これに対する米国の制裁措置(対日全面禁輸)が日本政府に対米英戦争を決意させたことは改めて語るまでもない。

その仏印派遣軍は大戦末期の 1945 年 3 月、米英軍の上陸作戦に備えて「明号作戦」を発動、フランスのインドシナ統治機構(行政機関と仏印軍)を一気に解体し、ベトナム、カンボジア、ラオスの 3 国を名目的に独立させ、3 国を日本の実質的軍政下に置いた。だが日本は同年 8 月

15日に連合諸国に降伏し、仏印派遣軍は一切の軍事・行政活動を停止して、北緯16度線の南ではイギリス軍、北では中華民国軍による武装解除を待つことになった。その結果、インドシナ全土に「権力空白」の状態が生じた。

1930年代から陰に陽に活動していたベトナムの独立運動各派は、この状態に乗じてフランスの軍事・行政施設をすべて占拠した(いわゆる八月革命)。その主役としてベトナム民衆の圧倒的支持を得ていたのは、インドシナ共産党(のちのベトナム労働党、今のベトナム共産党)を中核とするベトナム独立同盟(ベトミン)であった。共産党とベトミンの最高指導者ホー・チ・ミンは、9月2日にハノイでベトナム民主共和国(DRV)の独立を宣言した。DRVはベトナム現代史上初めての「ベトナム人の政府」であって、そこには仏印時代の安南国王(仏領化以前の名称で呼ぶならグエン朝最後の大越帝国皇帝)バオ・ダイや、日本軍が「明号作戦」直後に擁立したチャン・チョン・キム内閣の閣僚級要人、またベトミンとは一線を画するベトナム国民党(中国国民党と親縁関係にあった政党)の指導者も直接間接に加わっていた。当時のインドシナ共産党は、内外世論への配慮から共産主義イデオロギーの色を極力薄め、ナショナリズムの色彩を強く打ち出していたのである。

しかしフランスは、一方でベトナム独立をめぐるDRVとの交渉に応じながら、他方では軍隊をベトナム南部(旧コーチシナ直轄植民地)に派遣してインドシナ再征服に乗り出した。英軍と中華民国軍がベトナムに到着し始めたのは9月上旬であるが、英軍とともに再来した仏軍は同月下旬には早くもサイゴンを制圧、英軍の支援を得て支配地域を着々と拡大し始めた。DRV政府はやむなく和戦両様の構えをとり、各地で英仏軍に抵抗を試みた。その主役はベトミンであったが、彼らは現代戦の戦略・戦術知識はもとより初歩的な戦闘技術や個人用火器すらほとんど持たず、それゆえ「明号作戦」で高度の戦闘能力を証明してみせた日本軍の将兵とその武器に期待するところ極めて大きなものがあつた。武装解除を待つ日本軍の将兵が続々と無許可離隊(所属部隊脱走)を企てるようになったのはそのころである。

終戦時の仏印派遣軍の総兵力は約9万、ベトナムに限っていえば8万余である。ほかに数千人の民間人がいた。

駐留日本軍の大半は陸軍で、主力部隊は南方総軍司令部(サイゴン駐屯ののち中部高原のダラットに移駐、東南アジア全域を統括)、第38軍(信兵团、ハノイに司令部、仏印派遣軍統括部隊)、第21師団(討兵团、同、北部管轄)、第34独立混成旅団(育兵团、フエに司令部、中部管轄)、第2師団(勇兵团、サイゴンに司令部、南部管轄)であった。海軍も若干の部隊(第10方面艦隊など)を駐屯させていた。

北緯 16 度線以北の諸部隊はハイフォンから、以南の諸部隊はブンタウから、それぞれ武装解除と収容所生活ののち 1946 年 4～8 月に民間人大多数とともに日本へ引き揚げたが、終戦から引き揚げまでの 8～12 カ月間に、それらの部隊のほぼ全部から少なからぬ将兵と軍属が脱走した。ビルマ戦線から「明号作戦」のためにカンボジアへ移動した陸軍第 55 師団(壮兵団)と、中国南部からベトナム経由でタイ方面へ移動中であった第 22 師団(壮兵団)や第 37 師団(冬兵団)の諸部隊も、多かれ少なかれこの現象を免れなかった。中国の海南島からベトナム北部の海岸地帯へ食糧の買い出しに来た海軍部隊の軍人・軍属が、その場でベトミンに半ば強制的に誘われて離隊した例もある。

日本の公式記録からこれら離隊者の総数を知ることは極度にむずかしい。終戦直後のベトナムは全土が混乱状態にあったため、そもそも公式記録そのものが余り信用できない。しかも人々の移動が激しかったので、周辺諸国からベトナムに流入した者、ベトナムから周辺諸国へ移った者、一度離隊したのち諸部隊の搜索・帰隊勧告(これは南部で英仏軍の要求により特に頻繁に行われた)に応じた者(帰隊者)などは、いかなる文献にも正確には記述されていない。帰隊者の報告した死者(仏軍との戦闘によるものが主)が離隊者に算入されていないというような事情もある。ベトナムに残留した民間人の数となると、当時の日本外務省の領事事務の中断状態から考えても軍人以上に確認しがたいといえよう。立川京一は主に英仏の資料から、1946 年末にインドシナに残留していた日本人(圧倒的多数は軍人・軍属)の総数を約 700 人と推定、また元日越友好協会事務局長岡和明は約 800 人と推定している。

公私さまざまな国内資料による井川の推定数は、岡のそれとほぼ同じ約 800 人である。その一つの根拠として、日本の旧厚生省が作成した昭和 30 年(1955 年)7 月現在の「仏印未帰還者名簿」を挙げよう。これによると、総数は 599 名(ベトナム 583 名、カンボジア 14 名、ラオス 2 名)、うち軍人は 509 名、軍属は 52 名、民間人は 14 名、職業不明 13 名である。これには独立戦争終結(1954 年)の直後に北緯 17 度線以北のベトナムから帰国した 71 名中 69 名と、以南に在住していることの明らかであった約 40 名が含まれず、また帰国者の回想記または談話から推定できる現地死亡者と行方不明の離隊者(約 100 名)も漏れているから、これらを合算すると約 800 人となる。

この約 800 人のうち、独立戦争参加者(1～6 カ月という短期間に戦線を離脱した者——軍人の場合は帰隊者——を除く)は、井川の概算によれば約 600 人である。その少なくとも半数はベトナムの山野に望郷の思いを残して戦病死したと推測される。推測されるなどと曖昧な言い方しかできないのは、ベトナムの対仏独立戦争自体が第 2 次大戦後の植民地独立戦争の中で

最も激烈なものであったうえ、その終結後にさらに激烈な第 2 次インドシナ戦争(対米戦争)が始まり、その渦中に翻弄された現地残留日本人個々の運命を探ることなどは到底不可能となったからである。

DRV の独立戦争に参加した外国人——大多数は日本人——は、一般に「新ベトナム人」(nguai Viet Nam moi)と呼ばれていた。この呼称は DRV 主席ホー・チ・ミンの発案によるといわれているが、我々はそのことを証明する公式文書をまだ入手していない。

彼らの墓はベトナム各地にあり、一部は愛国戦士を顕彰する「烈士墓地」に葬られている。井川の極めて不完全な現地調査によれば、メコン・デルタのベンチェ省モーカイ県の県営烈士墓地だけでも 4 名である。しかし、いずれもベトナム名なので、本名を知るすべはない。こういったことも独立戦争参加日本人の追跡調査をむずかしくしている。

例えば、ホーチミン市西北部のホクモン県アンフードン村の水田には、村の守り神として大切にされている二つの大きな墓碑がある。それらは 1946 年 2 月の仏軍来襲に際し、全く戦闘経験のない村のゲリラ集団を逃がすために単独で白兵戦を試みて殺された日本兵 2 名(うち一人は「ハンチョー(班長)」と自称していたから下士官と思われる)の墓であるが、碑面にはグエン・バン・ミン、グエン・バン・トゥアットというベトナム名しか刻まれていない。村の古老にいくらたずねても彼らの本名、出身地、旧所属部隊などは不明である。

離隊者は軍人、軍属ともに陸軍に集中している。また離隊軍人の数を階級別に見れば、下士官が最も多く、次いで兵卒、士官の順となる。例えば、前記「仏印未帰還者名簿」によれば、離隊軍人であることが明確な者 507 名のうち、下士官は 247 名、兵卒は 223 名、士官は 34 名、階級不明者は 3 名である。また兵卒は、おおむね上等兵か一等兵で、二等兵はわずか 2 名である。この構成比は、我々の推計によれば、独立戦争参加者の場合もほとんど変わらない。

一時的にせよベトナムに加わったことの明白な士官は、井川の調査では約 50 名、うち佐官(すべて少佐)は 4 名である。

下士官と古参の兵卒が大多数を占めた原因としては、彼らが日本敗戦以前からベトナム民衆と日常的に接する機会を最も多く持ち、情感を多分に含む人間関係(例えば恋愛関係)を築いていたこと、長期にわたり軍隊内部で苦労を重ねたために敗戦の衝撃が最も大きく、しかも高等教育を受けた士官とは違って、その衝撃を論理的に処理するのが不得手であったこと、苛酷な体験ゆえに生活力旺盛で、いかなる状況にも耐える自信の持ち主が多かったこと、暴力の現場に立つことが珍しくなかったために、戦犯に問われるかもしれないという恐怖感も下級兵卒より格段に強かったことなどが挙げられよう。

2. 離隊・残留と独立戦争参加の理由

まず部隊脱走・インドシナ残留の背景として、① 仏印進駐から敗戦まで、日本軍将兵および日本民間人がベトナム人と概して友好的な関係を保ち、諸部隊の「兵補」（通訳などの補助的軍事要員）を含む各層のベトナム人と私的に交流する機会が少なくなかったこと、② 日本敗戦から武装解除の任に当たる英軍および中華民国軍の到着まで約1カ月の「猶予期間」があり、その間、日本軍諸部隊の規律の緩みから敗戦以前に増してベトナム人男女との交流が頻繁であったこと、③ 北緯16度線以北では中華民国軍の日本軍管理が極めてルーズで、收容所の出入りやベトナム人との接触も容易、また16度線以南では英軍による行動規制が厳重であったものの、英軍監督のもとにベトミン討伐に駆り出されることが多く、その間に旧知の男女を含むベトナム人の「独立への情熱」に触れる機会が少なくなかったことを指摘しておこう。

独立戦争参加者の回想記や、我々の試みた聞き取り調査によれば、離隊・残留の心理的経緯はほぼ次のようなものである。

インドシナは前記の通り日本軍が大兵力を擁しながら米英軍との地上戦を全く経験しなかった地域である。「聖戦」と「必勝」を信じて同地域に駐留していた日本軍将兵の多くは、突然の日本降伏にショックを受けて茫然自失、この事態に「納得できない」という感情を抱いた。それは在留民間人多数の感情でもあった。この一般的な心理的動揺に、敗戦後の自己の運命にかかわる種々の思考や情念が重なった。主なものを列挙すれば以下の通りである。

(1) 米軍占領下の日本の将来を悲観し、帰国しても奴隷的境遇に陥るのではないかと、ベトナムで暮らす方がましではないかとの疑問を抱いた。

(2) 捕虜として米英軍や中華民国軍に虐待されるのを恐れた。

(3) 連合諸国に戦犯として処罰されるのが怖かった。これは士官、下士官と憲兵に顕著な意識であった。

(4) 日本に酷似した文化(例えば大乘仏教と神道)を持つベトナムの風土と人間に共感を抱き、この国のために為すところなく帰国する気にはなれなかった。

(5) 現地に愛人がいた。または特定のベトナム女性に対する憧れがあった。

(6) 個人として徹底抗戦の意志を貫こうとした(少数ながら陸軍中野学校出身者の場合は残置諜者として任務を全うしようとした)。

これらの心理要素は、多かれ少なかれ複合していた。そういう心理状態にあった日本人が、極度に不利な条件下であえて独立戦争に決起したベトナム人の姿を眼のあたりにしたとき、彼らの一部が帰国を拒んで長期残留を企てたのは当然の成り行きであった。

しかし離隊・残留が直ちに独立戦争参加に結びついたわけではない。離隊前からベトナム独立への奉仕を志していた軍人(例えば後述の井川省少佐や石井卓雄少佐)もいるが、ベトナム社会をろくに知らず、DRV 独立宣言以後の情勢や独立闘争諸組織の実態にも疎かった離隊・残留者の大多数は、現地でいかに生きるべきかに思い迷っていた。彼らの多くを独立戦争参加に踏み切らせたのは、独立闘争諸組織、特にその最大最強の組織であったベトミンとの日常的ないし偶発的な接触、あるいはベトミン側からの積極的な勧誘(時には脅迫的要求)である。

発足したばかりの DRV 政府とベトミンは、フランス軍の再侵略行動を目前にして、何よりも武装勢力の育成を急ぎ、そのために不可欠の人材と武器の供給源として、日本軍将兵の協力を何よりも期待していた。彼らの勧誘活動は、ベトナム全土で頻繁に行われた。ベトナム人兵補が敗戦直後から日本軍兵営内部でベトミンへの参加を誘った、妙齢のベトナム女性が毎晩のように日本軍将兵収容所に現れて勧誘した、好条件(二階級特進、高給、結婚斡旋など)で参加を求めるベトミンのピラがサイゴン市内にまで張り出されていた、海南島から食糧調達に来たところベトミンの小部隊につかまって参加を強制された等々、元ベトナム駐留日本軍将兵の証言や諸部隊戦友会の記録に含まれる実例は枚挙にいとまがない。

インドシナ共産党とベトミンは日本敗戦まで「日本ファシスト軍」をフランスと並ぶ敵と認定し、日本軍の小単位を時折ゲリラ的に攻撃した(日本軍の側も主に北部でベトミン討伐を試みた)。そのベトミンが全国的な規模で日本軍将兵に独立戦争への協力ないし参加と武器提供を求める運動を展開したからには、その背後に何らかの機関決定があったに違いないが、それが特定人物(例えば最高指導者ホー・チ・ミン)の発案によるものであったか否かを調べるのは恐らく無意味である。我々は、大多数のベトナム人と日本軍将兵の関係が必ずしも敵対的ではなかったこと、ベトミン以外の独立運動体(ベトナム国民党など)も同様の勧誘活動を行ったことなどから、敗戦日本軍に人材と武器を求めようとするのは、当時のベトナム人一般の極めて自然な着想であったと考える。サイゴンなどには民衆レベルの自然発生的な勧誘の動きもあったようである。

国民党などベトミン以外の独立運動諸組織に参加した日本人は、おおむね短期間で離脱し、ベトミンに合流するか、もしくは中立的存在として自活する道を選んだ。一部はベトミンとの抗争

で死亡したとみられる。日本敗戦直後の混乱期には、極めて少数ながら独自にベトナム人の反仏武装組織を育成しようとした旧日本軍人もいた。のちにベトミン軍の中級幹部となった駒屋俊夫(後記)は、彼自身も所属していたその種の旧日本軍人 7 名のグループが「何らかの誤解により」ベトミンの小部隊に捕えられ、首領の北風某大尉ら全員が処刑される寸前、彼だけが辛うじて逃れたことを伝えている。

第 2 次大戦中に日本の外務省と大東亜省がサイゴンに設立した南洋学院の生徒で、敗戦直前に陸軍に召集され、46 年に復員した亀山哲三(福島県出身)は、英軍に強いられたベトミン討伐行の途中、サイゴン北方で地元青年の手引きにより、高度の教養と覚悟のありそうな若手ベトミン幹部と会見、「民族独立の大義」を説くその幹部の参加要請を辛うじて断ったことを感動的に回想している。当時の日本軍将兵多数の証言によれば、ベトミン討伐を強要された南部の日本軍諸部隊は、当のベトミンにひそかに攻撃地点を通報したり、行動中に発見したベトミン・ゲリラに身を隠すよう忠告したり、戦車の機銃の狙いを故意に外したりして、ベトナム人殺傷を極力避けた。これは独立戦争参加者の続出した当時の在越日本軍将兵の心理を端的に示す事実である。彼らは総じて——部隊指揮官まで含めて——ベトナム人に同情的で、ベトナムの独立を阻止しようとする英仏両国の姿勢に反感を抱いていたのである。

独立戦争参加の直接の動機は多様であったが、より深い心理的要因として、濃淡さまざまながらベトナム独立闘争そのものへの共感があったことは確かである。

そのことを示唆しているのは、1990年代初頭までベトナムに生き残っていた唯一のベトミン参加日本人松嶋春義元陸軍一等兵(熊本県出身、第22師団所属、97年に日本で死去)の行動と思念である。彼はミトー市付近に駐留していた所属部隊を同僚兵士約 10 名とともに敗戦直後に離脱し、ベトミンの民兵を訓練しながらメコン・デルタを転戦するうちに、ティエンザン省での仏軍との戦闘で瀕死の重傷を負い、現地ベトミン組織に助けられて大小の水路の入り組む比較的安全な村に隠れ住み、看護を引き受けてくれた現地女性と結婚して農民生活に移った。その間、一緒に戦った元日本兵7名のうち4名は戦病死し、2名は仏軍またはベトナム国政府(フランスがバオ・ダイを名目的元首としてサイゴンに擁立した傀儡政権)の公安機関に捕殺され、1名はタイ経由で帰国しようとして行方不明になった。

そういう危険を冒して、なぜベトミンの戦列に加わったのかという井川の質問に、彼は「あれは大東亜戦争の続きだった。ベトナム人を見殺しにして、おめおめと帰国できるかと思った」と答えた。彼は「大東亜戦争がアジア諸民族解放の戦いであった」と最晩年まで信じていた。

いささか乱暴に分類すれば、ベトミンに参加した日本人は、ほぼ次のような類型に分けられよ

う。

① 成り行き・義理人情型: 離隊・残留したものの、どこで何をなすべきかの判断がつかず、漠とした気分でベトナムの勧誘に応じ、そのゲリラ闘争や民兵訓練に協力するうちに、現場のベトナム民衆やベトナム兵士と親交を結んだり、結婚して家族ができたりしてベトナム社会の一員となり、理屈抜きでベトナム独立に奉仕しようと決めた人々。これは下士官・兵卒の場合に顕著であった。その一部(極めて少数)は 1940 年代末に DRV が社会革命の方針を鮮明に打ち出し始めたことに失望して戦列を離れようとした。1 名だけであるが、独立戦争後に米国の擁立したサイゴン反共政権の公安機関に職を求めた者もいる。

② 状況追従・諦念型: 上官がベトナム参加を決意したとか、愛人がベトナムを支持していたとか、特定のベトナム幹部に敬愛の念を抱いたとかの理由でベトナムに加わり、DRV 軍事組織に然るべきポストを得て任務を果たすうちに、それを運命と観じて独立戦争に奉仕し続け、それなりにベトナム社会に同化していった人々。

③ 過程的理念構築型: 上記①および②と似たような経緯でベトナムに参加し、そこで与えられた任務を効果的に果たす過程で、ベトナム上・中級幹部との接触や公的機関における各種の「学習」(ホクタップ)を通じて、独立戦争やベトナム社会の改革について自分なりに納得できる理念を身に着けた人々である。概して DRV 指導部の路線に最後まで忠実であった。自発的に、または勧誘されて、ベトナム共産党員となった者も少なくない。

④ 自覚的参加型: 日本敗戦直後(しばしばそれ以前)からベトナム独立に奉仕したいとの意志ないし情熱を持ち、自発的にベトナムに加わった人々。彼らを突き動かした心理要因は必ずしも一様ではないが、論理的基礎の強弱や目的意識の濃淡はともあれ、共通項として「日本人の責務としてのアジア諸民族解放」の理念とベトナム人への強烈な共感(愛といってもよい)が指摘できよう。後述の井川・石井両少佐がその典型である。それぞれ独自の理念を抱いていただけに、その一部——特に早い時期に戦死した人々——が、1945 年ごろから社会革命のイデオロギー(共産主義)を鮮明にし始めた DRV の姿勢にどれだけ同調できたかは、今後検討するに値する問題であるかもしれない。

独立戦争参加者すべてを以上の 4 類型に画然と分けることはできない。境界はかなり曖昧である。また人間の心理と行動は綺麗事では済まない。ベトナム参加者の中には、後述するように精神の平衡を失って自殺した者もいるし、軍規違反や対敵通謀の容疑で処刑されたいらしい者も

いる。しかし、我々の調査によれば、彼らの大多数がその行動を「正義の選択」と思っていたこと、また戦いの過程で第二の同胞愛とすら呼べるようなベトナム人への共感を深めたことは確かである。

独立戦争に最後まで参加し、多くの武功により DRV 政府から戦士第二級徽章を授与された小森由男(ベトナム名グエン・ギー、栃木県出身、旧陸軍第22師団第86歩兵連隊上等兵、ベトナム人の妻とともに帰国)は 1994 年、電話による井川のインタビュー要請を言下に拒絶した。「ベトナムのことは話したくない。ベトナムがあんなことをするとは夢にも思わなかった」と彼は言った。「あんなこと」とは、そのころ大々的なマスコミ報道によって日本人大多数が真実と信じさせられていた 1978～79 年の「ベトナムのカンボジア侵略」である。井川が強引に彼の自宅を訪問、ポル・ポット政権(赤色クメール政権)の対越先制攻撃から始まったベトナム・カンボジア戦争の経緯や、カンボジアにおけるベトナム軍将兵の自己犠牲的行動を井川自身の現地取材にもとづいて詳しく話したところ、彼はしばらく沈黙したのち妻とともに破顔一笑、「それなら納得できる。やっぱり俺のベトナムだ」といった。彼にとって、ベトナムは第二の祖国ともいふべき最愛の国なのであった。

この例でわかるように、ベトミン参加日本人の親越意識には、しばしばベトナム女性が介在していた(後述)。DRV 政府もそのことを知っていたようで、彼らの忠誠を確保すべく、軍事・行政諸機関のベトナム人幹部を通じて、日本における妻子の有無にかかわらずベトナム女性との結婚を奨めた。

典型例としてのクエンガイ陸軍中学群像

1. 自覚的・主体的な独立戦争参加——井川省少佐の場合

自覚的(主体的)かつ計画的にベトミンに加わった日本軍人の姿を最も明瞭な形で示しているのは、大越帝国(グエン朝)時代の旧都フエに司令部を置いていた陸軍第34独立混成旅団(インドシナ中部管轄)の参謀井川省少佐(茨城県出身)とその周辺人物である。井川少佐は 2.26 事件の連座者 6 名(1 名死刑、5 名不名誉除隊・国外追放)を出した陸士第 47 期の卒業生で、伝統的にドイツに倣う傾向の強かった陸士では唯一フランス語を必修外国語とする騎兵科に属していた。

同期の人々によれば、彼は教養の幅の広い人物で、社交ダンスの巧者でもあった。昭和初期の陸士には、当時の日本知識層の、いささか混沌とした思想状況を反映して、欧米の恋愛小説ばかりか 2.26 事件の精神的指導者北一輝の『日本改造法案大綱』やマルクス主義文献を密かに読んだり、カフェーに足繁く出入りしたりする者がいて、陸軍当局の監視対象になっていた。これらのことは、後年の井川少佐の行動について何らかの示唆を与えるものかもしれない。

1945 年春に満洲からフエに着任した井川少佐は、まもなく地元のベトミン組織とひそかに相互不可侵の協定を結んだ。そのためか、同旅団の管轄するベトナム中部では北部・南部とは違って、46 年の部隊復員まで日本軍人とベトナム人の間の紛争が皆無に近かったという。

45 年 6 月ごろ、仏印時代の流刑先マダガスカルから米軍機でベトナムへ運ばれ、フエ付近の山地にパラシュートで降下した中部のベトミン指導者の一人グエン・バン・ゴック(のち中部の DRV 公安責任者)が、乞食を装って第 34 旅団司令部の営門に現れた。同旅団の情報将校であった中原光信少尉(後述)によると、井川少佐はその「乞食」を追い帰そうとした警備兵を制止し、ゴックを自室に招き入れて密談した。井川少佐は、その後も敗戦後の日本軍とベトミンの関係などについてゴックと密談を重ねた。密談の場所は、地元ベトミン機関の提供した秘密のアジトで、そこには同じくベトミンの斡旋したベトナム人姉妹が世話役として住み込んでいた。この種の交渉には、腹心の中原光信少尉(情報担当)がしばしば同席した。

フエの旧王宮には第 34 旅団が「明号作戦」で仏印軍から押収した大小の武器数千点と弾薬が保管されていた。日本敗戦の直後、井川少佐は中原を旧王宮に派遣して保管部隊を司令部に呼び戻し、保管所を無人化するという間接的な方法で、それらをベトミンに提供した。中部における八月革命の無血裡の成功とベトミン武装勢力の急成長は、この武器・弾薬の威迫力によるところが極めて大きい。

中華民国軍による武装解除ののち、井川少佐はベトミンや中華民国軍との不慮の衝突を避けるため、ダナン西方の高原保養地バナーに第 34 旅団の自主キャンプを設営し、旅団主力部隊の将兵を自活させる措置(農業経営など)を講じた。彼自身は少数の部下とともにフエの司令部にとどまり、やがて DRV 中央から南部抗戦委員会主席兼第 5 戦区長として派遣されてきたグエン・ソン将軍と親交を結んだ。

グエン・ソンは中国の黄埔軍官学校で学んだのち、紅軍の「大長征」に同行して毛沢東らと延安に滞在した唯一のベトナム人革命家で、ホー・チ・ミン主席の信頼厚く、DRV 軍事部門ではボー・グエン・ザップ総司令官やホアン・バン・タイ参謀総長に次ぐ地位にあった。豪放磊落な性格で知られ、ホー主席以外の人物の指示には従わないようなところがあった。井川少佐の

ベトナム名レ・チ・ゴーはグエン・ソンが与えたものである。

井川少佐はフエの旅団司令部でグエン・ソンの訪問を受けたところからベトミン参加を決意し、中原ら部下の士官数名に暗に同調を求めているという。

第34旅団は46年2月ごろバナーの自主キャンプを出て、列車で復員乗船地ハイフォンへ北上した。井川少佐はそれを駅頭で見送ったのち、旅団嘱託(仏語通訳)の大西貞男に同行を命じて、ベトミンの用意した車でフエ南方の集落へ急行、そこに2週間ほど滞在して『歩兵操典』など日本軍の教本をベトミンのために仏訳するとともに、ベトミンの対仏戦略・戦術や兵員訓練に関する指針を執筆、それらの草稿を携えてグエン・ソンの待つビンディン市(ビンディン省都)の第5戦区司令部に入った。大西はベトナム残留の意志を持たなかったが、井川少佐の要求でビンディン市まで同行し、46年5月ごろクエンガイ市に移り、同市でベトミンに協力していた日本人グループの世話役として独立戦争終結まで暮らすことになる。

中原は井川少佐より一足早く、第34旅団の北上直前にバナーの自主キャンプに移り、そこを46年1月ごろに脱走、マラリアの発作に苦しみながらフエからベトミン差し回しの車でダナン(クエンナム省都)へ行き、ダナン市庁に設けられていたベトミンの臨時行政機関で休養したのち、ビンディン市で井川と合流した。バナーから脱走した日、彼の意図を察した下士官約十人がヤキトリ・パーティーに中原を招き、離隊してベトミンに参加するつもりなら同行させてほしいと懇願したが、独立戦争が長期かつ困難に満ちたものになると予感していた中原は、彼らの将来を慮って拒絶した。これは離隊者に下士官が異様に多かったという事実と符合する挿話である。第34旅団からは、のちに少なからぬ下士官が脱走してベトミンに参加している。

ビンディン市の第5戦区司令部(のち北隣のクエンガイ省都クエンガイへ移動)には、すでに十数人の元日本軍人が集まり、ゲリラ訓練などを行っていた。中原によると、井川少佐は中・小隊長級のベトミン軍幹部に軍事教育を施す一方、ベトミン軍の採るべき戦術についてグエン・ソンと日常的に意見を交わしていた。仏軍とベトミン軍の戦力差を考慮し、遊撃・奇襲戦術を重視するようグエン・ソンに進言していたともいう。

中原も軍事訓練などに専念していたが、4月上旬ごろ海岸線を北上中の仏軍を阻止するための戦術指導に南方のトイホア市に派遣され、その任務を終えて第5戦区司令部に帰ってみると、井川少佐が同じく防戦指導のため、みずから新品のジープ(米軍からひそかに供与されたものと思われる)を運転し、数十人のベトミン兵を率いて中部高原の要衝ブレイクへ出発しようとしていた。中原は同行許可を求めたが、井川少佐は許さなかった。

井川少佐の一行は、ブレイクに通ずる国道(山道)の中間地点で仏軍の待ち伏せ攻撃に遭っ

た。一行の中にいた少年兵ファン・タイン(のち人民軍少将)によると、井川少佐は人為的な倒木が道を塞いでいるのを見てジープを止め、ピストルを構えて下車し、後続のトラックに乗っていたベトミン兵全員に退避を命じた。その瞬間、前方から仏軍の機銃弾が殺到、井川少佐は兵士数人とともに戦死した(享年 33)。戦死者の一人はファン・タインの兄であった。ファン・タインは後日、後述のクエンガイ陸軍中学で中原の生徒となる。

立川京一の紹介しているフランスの軍関係資料によると、井川少佐の死体からはベトミンの採るべき戦術に関するメモが発見された。そのメモにはフランス軍部隊の最弱点部分をドリル的に攻撃して相手を混乱状態に陥れる「特攻班」の育成計画が記されていたという。偶然かもしれないが、これは対仏抗戦全般を通じて DRV 正規軍の得意芸となった攻撃戦術と相通ずる着想である。

井川少佐は果敢であると同時に、美術や音楽を愛する極めて知的な軍人であった、と中原は追想している。彼が DRV 指導部の機構や路線にどれだけ通じていたかは不明であるが、その行動からは彼が独自の理念とナショナリズム認識にもとづいて、周到に準備したうえでベトミンに加わったことが十二分に窺える。これは後述の石井卓雄少佐についてもいえることであろう。

余談めくが、井川少佐は死後に勲五等瑞宝章を受け、戦死者として靖国神社に祀られている。日本は第 2 次大戦以後、一度も戦争を行っていないから、これは「戦後の戦死者」ということになろうか。その戦死の日付が、実際の戦死の日より 2 カ月も遅い昭和 21 年 6 月 20 日となっているのは不思議である(後述の石井少佐も生死未確認のまま靖国に祀られている)。

彼のフエのアジトで働いていたベトナム人姉妹のうち、姉の通称ハイダン(海棠)は 1994 年にサイゴンで病死したが、我々の入手した彼女の親族宛書簡によると、彼は姉妹にベトミンの金星紅旗(現在のベトナム国旗)、和服、腕時計と若干の宝石を遺してフエを去った。アジトでは時折、姉妹に日本語を教えていたという。姉妹はのちにサイゴンに移った。姉のハイダンは死ぬまで、その妹も 96 年に井川一久と会うまで、彼が戦死したことを知らなかった。

井川一久が朝日新聞ハノイ支局長を勤めていた 1990 年代初頭、彼の事跡を伝える長文の記事がハノイの新聞に載った。それは特定の独立戦争参加日本人を称えるベトナム最初のメディア報道であったが、内容には事実誤認が多く、彼の階級も「将軍」となっていた。これは日系「新ベトナム人」の事跡がベトナムでいかに知られていなかったかということの証左といつてよい。

2. ベトナム初の士官学校と日本人のみの教官陣

中部最大の港湾都市ダナン(クアンナム省都)の南に位置するクアンガイ省は、1930年代から民族解放・革命運動の最も活発であった地域の一つである。1946年6月1日、省都クアンガイにグエン・ソン将軍を校長とし、第5戦区上級軍事幹部ドアン・クエ(1990年代のベトナム国防相)を事務長とする陸軍中学が設立された。それは北部のソントイに設立されたチャン・クォック・トアン武備学校と並ぶベトナム初の本格的士官学校であった。

両校は近代戦の知識と技術を持つ中・上級幹部の不在に苦しんでいた正規軍(衛国軍、47年から人民軍)の参謀本部(ホアン・バン・タイ参謀総長)が、戦争の長期化を予想し、それまでの短期教育(1カ月程度)では不十分と考えて設立を計画したものとされる。参謀本部の上記計画を伝えられたグエン・ソンが、井川少佐の遺志に沿った前記中原少尉の進言を容れて、中部にも本格的な士官学校を設置するようタイ参謀総長に要請したものという説もあるが、我々はこれを確認する公式文献を入手していない。

我々がこの学校に関係した日本人の事跡に調査の力点を置いたのは、それがベトナム独立戦争に巨大な成果をもたらしただけでなく、彼らとその周辺人物群が前項で述べたような独立戦争参加日本人の諸類型を極めて明瞭に示しているからである。

この学校は南北縦貫鉄道のクアンガイ駅から第5戦区司令部の置かれていた旧クアンガイ城に通ずる道路沿いの砂糖黍畑の中にあり、学校本部、教室、医務室、教官・生徒宿舍、食堂などの建物約10棟は、すべて竹を組んで粘土を塗った壁に茅葺きの屋根という粗末なものであった。教官4名と副教官4名は、竹の寝台二つ、同じく竹の机一つという宿舍4棟に各1名ずつ寝起きしていた。医務室は医務官(1名)の宿舍兼用であった。同校の跡は今もベトナム軍の教育・訓練施設であるが、建物はすべて現代化されている。

生徒約400人は、①中学校卒業(少数民族は小学校卒業)、②身体強健、③愛国心旺盛・志操堅固、という基準で全国各地の部隊または共産党支部の推薦を受け、入学試験に合格した10代後半～20代前半の男子であった。実戦経験のある者は大隊指揮官の推薦があれば中卒でなくても受験できた(これはごく少数)。受験者は約500人。試験科目は数学、国語、政治の三つ。合格者の半数は中部出身、また半数は南部と北部の出身であった。

仏領期のベトナムには中等教育施設が極めて乏しかったから、生徒の大半が中卒者であったこの学校は、当時としては最良の資質を持つ青少年を集めていたといえる。当然のことに中流以上の比較的富裕な家庭の子弟が多かったが、これは共産党の主導する当時の

DRV 指導部が社会革命を将来の課題とし、当面は階層を問わず独立戦争に全国民を結集する方針であったことを示唆している。

生徒は約 100 名ずつ四つの「大隊」に分かれ、全員が校内に起居していた。各大隊に教官 1 名、助教官 1 名、通訳 1～2 名が配属された。教官は教練(実技指導を伴う講義)を担当、副教官は指導内容の実演(戦闘における動作など)や戦場生活に必要な雑知識の伝授を担当した。

教官・助教官全員と医務官は日本人、通訳はベトナム人であった。また教官は旧日本陸軍将校、助教官は下士官であった。

第 1 大隊:教官＝谷本喜久男(ベトナム名ドン・フン、旧陸軍少尉)、副教官＝青山浩(チン・クアン、旧陸軍軍曹)、通訳＝チュン・フォン(通称「二郎」)

第 2 大隊:教官＝中原光信(グエン・ミン・ゴック、少尉)、副教官＝大西某(通称クアン、フルネーム不詳)、通訳＝チー

第 3 大隊:教官＝猪狩和正(ファン・ライ、中尉)、副教官＝沼田某(ベトナム名不詳、階級不詳、旧第2師団第29連隊所属)、通訳＝チャン・ミン・ダム

第 4 大隊:教官＝加茂徳治(ファン・フエ、中尉)、副教官＝峰岸貞意(チャン・クオック・ロン、兵長、第29連隊所属、福島県出身)、通訳＝通称タオ

医務官:ベトナム名レ・チュン(本名・階級・元所属部隊・出身地不詳、旧日本陸軍の軍医または衛生下士官か)

*通訳にはマウ(通称「一郎」)というベトナム人もいた。医務官レ・チュンは第 38 軍司令部に所属していた喜世藤雄伍長(宮城県出身)であった可能性がある。また青山浩は第 21 師団第 83 連隊に所属していた青山正義軍曹(福井県出身)かもしれない。

副教官と医務官の氏名や旧日本軍における階級が概して曖昧なのは、ベトミンに加わった日本人が顔見知りの同国人にすら本名や経歴を告げず、しばしば偽名を使うのが普通であったからである。旧日本軍では部隊離脱は重罪であったから、彼らは後日の処罰を恐れていたのかもしれない。また彼らは、所属部隊を脱走したからには、過去を、さらには日本人としてのアイデンティティーを捨てたも同然で、もはや本名や経歴を他人に語ることに何の意味もないと思っていたようである。元憲兵などの場合は、戦犯として裁かれることへの恐れもあったであろう。いずれにせよ、これは我々の調査の大きな障害であった。

3. 教官たちの経歴と横顔

上記教官陣のうち、谷本(鳥取県出身)と中原(愛媛県出身)は井川少佐の直屬部下であった。法政大学剣道部主将であった中原は、1944年に繰り上げ卒業で陸軍に入隊、熊本の予備士官学校を経てフエに着任した。井川少佐の影響を受けて離隊当初からベトナム参加を計画していたことは既述の通りである。一人息子で、郷里の両親のことが気がかりではあったが、のちに愛媛新聞会長になった同郷・同僚の将校の諫止を振り切って離隊し、一直線にグエン・ソンの司令部をめざした。

谷本は陸軍中野学校二股分校出身の諜報担当将校で、日本敗戦の直後、同じ中野学校出身者たちが私的に組織した「安部隊」に加わり、残置諜者としてのインドシナ残留を計画、いったん離隊を企てて断念し、帰国するつもりで第34旅団渉外部の任に就いていたが、中部高原の保養地ダラットの日本軍警備隊員数人がベトナム軍の攻撃を受けて捕虜になったという事件を処理するための交渉で知り合った優秀なベトナム幹部レ・ズンに敬愛の念を抱き、独立戦争参加を決意したという。レ・ズンは独立戦争後ほどなく DRV の要人になったといわれているが、54年に帰国して郷里で小学校長を勤めた谷本が、このことについて明確に語らないまま1990年代後半に交通事故死したため真相はわからない。彼も剣道の名手であった。

猪狩(福島県出身)と加茂(同)は、いずれも学徒出身(猪狩は日本歯科医専)で、日本敗戦時にサイゴンに司令部を置いていた陸軍第2師団(勇兵団)の第29歩兵連隊第3大隊第9中隊に所属していた。前者は中隊長、後者は同中隊の第2小隊長であった。同師団は1944～45年に中国雲南省からビルマ戦線を経て「明号作戦」のためカンボジアへ、さらにラオスへ転進したのちベトナム南部に駐留、第9中隊はサイゴン東北海岸のファンティエットに派遣され、そこで敗戦の日を迎えた。駐屯地周辺には八月革命の熱気が漂い、同中隊は嫌でもベトナムと接触せざるをえなくなった。敗戦2カ月後の10月初旬、猪狩は部下の下士官・兵5名とともに離隊、これに続いて加茂と高野義雄准尉(福島県出身)もそれぞれ単独で離隊した。

加茂によれば、彼らの離隊は確たる目的あつてのものではなかった。戦火に荒れ果てた祖国に帰り、米軍の支配下に苦しんでいるはずの同胞の姿を見るのは堪えられないという気持と、戦友たちの血でひとたび「解放された」東南アジア、とりわけ独立闘争の火の燃え上がっているベトナムの地に骨を埋めてもよいという漠然たる気分だけがあつた、と彼は回想している。

猪狩の場合、「明号作戦」中に負傷させたフランス兵の処遇が原因で戦犯に問われるかもしれないとの情報を彼の離隊の一因とする説があるが、彼は帰国(1959年)の数年後に死去した

ので真偽はわからない。しかし、彼もほぼ加茂と同じ心理状態にあったことは確かである。行動を共にした直属部下数人に、何らかの目標(大義名分)と生活基盤を与えなければという焦燥感もあったらしい。

猪狩と加茂は、日本人に親愛感を抱く現地民衆に守られ、多くの離隊者と出会いながらファンティエット周辺をそれぞれ転々とし、かつて彼らの部隊にいた元ベトナム人兵補らの手引きでベトミンの地方幹部と頻繁に接触、次第に独立戦争に協力する意志を強めていった。加茂の偶会した元日本軍人のうち、すでにベトミン末端軍事単位の顧問となっていたのは、陸軍第5飛行師団(高兵団)第81戦隊にいた山崎善作軍曹(静岡県出身)や、第38軍(信兵団)鉄道第7連隊にいた五十嵐秀雄軍曹(秋田県出身)である。加茂は3年後の1948年、DRV中央根拠地(北部)のトゥエンクアンで、人民軍の連隊幹部になっていた山崎と再会した。五十嵐はクアンガイ市まで彼と同行、陸軍中学とは別のところで軍事訓練や戦闘指導の任務に就き、48年ごろ後述の石井少佐とともに南下して消息を断った。

仏軍が南部の諸都市を次々に制圧して北上し始めた46年1月、加茂は衛国軍幹部の頼みでカムラン湾岸の村へ行き、五十嵐、畠山某ら旧第9連隊出身者と3名の海軍離隊者に地元のベトナム人青壮年約30人を加えた遊撃隊(ゲリラ部隊)を組織した。ベトナム人が隊長であったが、訓練と戦闘指導は加茂ら日本人「顧問」が担当、旧日本軍の軽機関銃1挺と小銃(旧日本軍の三八式単発銃など)約10挺しか持たなかったにもかかわらず、村に侵入した仏軍1個小隊を奇襲して、ほぼ全員を倒した。加茂はこの戦闘でベトミン参加を最終的に決意した。仏軍兵士約10人を殺したからには、実際問題としても戦線離脱・原隊復帰はもはや不可能で、それは仏軍による処罰(恐らく死刑)を意味していた。仏軍は加茂と五十嵐を巨額の懸賞金つきで捜索し始めていた。

仏軍の標的となったのは彼らだけではなかった。仏軍は第1次インドシナ戦争の前半期を通じて旧日本軍人をベトミンの戦力のかなめと見て、その捕殺ないし帰順(投降)工作に熱心であった。フランスの史料に残留日本人4,000~1万人以上というような誇大な数字があるのは、一つには仏軍が旧日本軍人を最大の脅威と考えていたからであろう。ベトミン側も仏軍の対日本人帰順工作に警戒を怠らなかつた(ベトミン参加日本人とその近縁者の手記または談話には、ごく少数ながら戦線離脱または対敵通謀の意図ありとみなされたらしい日本人の処刑事件を伝えるものがある)。このことは近代戦の知識、技術、体験を持つ旧日本軍人がベトミンにとっていかに貴重であったかを逆に物語っている。

ともあれ加茂をリーダーとする日本人遊撃隊顧問グループは、この奇襲が成功したあと、ベト

ミン中部組織幹部の要請により、彼らを「オン・ニャット」(日本さん)と呼ぶ住民の歓迎の声の中を、トイホア省など各地で民兵・ゲリラの訓練を行いながら北上し、同年4月下旬に第5戦区司令部に出頭した。数日後、猪狩が部下2名とともに似たような経験を重ねて到着、やがてグエン・ソンによって谷本、中原、加茂とともに設立予定の陸軍中学教官に任命された。助教官の選任は教官それぞれに委ねられていた。猪狩と加茂は躊躇なく旧部下を選んだ。

ベトナム史上初の士官学校の教官・副教官と医務官のすべてに元日本軍人を任用したことは、当時のDRV軍事指導部が上・中級幹部の養成を急務中の急務としながらも、そのための本格的な教育・訓練要員をほとんど持たず、少なくともベトナム中部においては日本人の存在に全面的に頼らざるをえなかったことを示している。

グエン・ソンは教官選任に際し、井川少佐の戦死後にクエンガイ市にきた第34旅団の斎藤定憲兵少佐の助言を得たとの説がフランスにあるという(前記立川の記述)。しかしグエン・ソンは、それ以前からフエとビンディンで中原と面識があったし、谷本、猪狩、加茂の3名についてもかなりの情報を得ていたようである。

正規軍、地方軍、民兵・ゲリラの3種兵力からなるベトナム軍の機構はまだ未完成で、全国的な指揮命令系統は確立に程遠い状態にあった。しかし「一夜に噂千里」といわれるほどにクチコミの発達した国柄ゆえ、同一軍区内での情報収集・伝達はさして困難ではなく、その点では仏軍をはるかに上回っていた。DRVが強大な近代装備を持つ仏軍に対抗できた(のちに米軍にすら対抗できた)のは、一つにはそのためである。グエン・ソンは、谷本、中原、猪狩、加茂のそれぞれについて独自の情報を持ち、それにもとづいて独自に4名を教官に採用したと思われる。

4. 厳しく、優しく、率先垂範

グエン・ソンは教官4名にただ一つ「生徒を殴らないこと」を要求した。教官たちに希望事項をたずねられた生徒たちも、これを特に要望したという。旧日本軍の悪弊たる問答無用の「殴打」は、すでにベトナム社会に知れ渡っていた。4名は最後までグエン・ソンのこの禁令を守った、というより私的暴力とはもともと縁がなかった。彼らが知的・倫理的資質に富むインテリ軍人であったことは、我々が彼らとの再三のインタビューや卒業者を対象とする聞き取り調査で得た確かな印象である。

教練日は週に6日で、日課は次のようなものであった。

午前5時半起床。中庭で体操したのち、学校から2〜7キロメートル離れた4カ所の演習場（ブット山麓、アン山麓、ソンチャ川の河川敷、仏軍が建設し日本軍が拡張したクアンガイ飛行場、クアンガイ市運動場）まで行進歌を全員で高唱しながらの分列駆け足行進。朝食のあと午前7時半から午後1時半まで講義つきの実技訓練。昼食と数時間の昼休み（シエスタ）のあと再び講義つきの実技指導。

午後の教練はしばしば夕食を挟んで深夜に及ぶという猛烈なものであった。シエスタが長かったのは、クアンガイ地方が熱帯で極めて蒸し暑く、気温は時に摂氏40度にも及んだからであるが、シエスタ抜きの教練も珍しくなかった。正規の教練のほか、個々の教官が夜間に生徒を数人ずつ宿舎に呼び寄せて、副教官とともに特訓を施すことも多かった。午前の野外演習には、10キロメートルも離れた岩山ラハタッチェンが使われることもあり、これが肉体的には最も苦しい演習であった。

ベトナム人による政治と歴史の講義も随時行われたが、その充当時間は教練の10分の1程度であった。グエン・ソン校長も時折、中庭に全生徒を集めて講義した。

教練は行進、号令の掛け方、基本姿勢（気をつけ、休め、解け）、基本動作（匍匐、匍匐前進、横転、横進）から始まった。「匍匐前進、特に茨と岩だらけの荒地や湿地でのそれが一番苦しく、怪我の絶え間がなかったが、先生自身が何度もやってみせるので文句はいえなかった」と卒業者の多くはいう。これらはしばしば深夜にも反復して行われ、「伏せ！」などの集団連呼の大声が周辺住民を驚かせた。

この基礎訓練に続いて銃の操作、銃剣術、手榴弾投擲、散開、立哨、警備巡回などの個人的技術の訓練があり、さらに前線指揮官に必須とされる昼間・夜間戦闘、白兵戦、奇襲、偵察、陣地構築（塹壕づくりなど）、通信、兵站確保その他、分隊・小隊レベルの軍事技術と指揮方法の指導が行われた。開校後の4カ月はこれらの実技指導と指揮官としての心構えの伝授に当てられ、続く1カ月は戦闘指揮の演習に当てられた。最後の1カ月には、実戦を想定した最も激しい訓練に加えて、奇襲や夜間行動の演習が頻繁に行われた。各「大隊」の生徒全員が教官・助教官に率いられて、クアンガイ省とその周辺での戦闘に参加することもあった。このときは少数ながら死傷者も出たが、だから実戦参加をやめようなどという声は校内のどこからも出なかった。民族の死活を賭けた総力戦（全国抗戦）が間近に迫っていたのである。

教練用の兵器は極度に不足していた。小銃も足りず、同じ長さの竹や木銃を代用品として使った。生徒たちは短い竹棒を常時ポケットに入れ、それをしょっちゅう握ることで実銃の握り方

を覚えた。

生徒の朝食は粥と塩だけ、昼食と夕食は米飯(しばしば赤米)とザオムン(水草の一種)、ビードー(カボチャ)、あるいは芋の煮付であった。教官・助教官と医務官の昼食と夕食には、これらに少量の魚肉、鶏肉または豚肉のつくことがあったが、極端な粗食であったことに変わりはない。クエンガイを名産地とする砂糖だけは豊富に支給された(一人一カ月 500 グラム)。

教官・助教官と医務官は日本軍時代のカーキ色の軍服か学校支給の青い制服を着用、教官はときどき将校用の長靴を穿いていた。生徒は青い木綿服に各人各様のサンダルであった。第2大隊の生徒は胸に名札をつけていた。生徒全員が痩せこけ、真っ黒く日焼けしていたが、愛国の熱情に瞳を輝かせた知的な若者たちの姿は、地元の若い女性たちの憧れの的であったという。

カリキュラムは旧日本軍の『歩兵操典』に沿って組み立てられていたが、ベトナム語に疎い教官たちは、訓練用軍事用語の翻訳に苦勞し、通訳たちの協力を得て、訓練期間も半ばを過ぎるころに漸く4名共通の訳語が完成した。その一部は今なおベトナム人民軍で使われている。

中原は「あれほど充実した日々はなかった」と回想している。生徒たちの若々しい情熱を全身で吸収し、余事一切を忘れて、四六時中、軍事教育に専念することができたからである。彼らは「率先垂範」と「師弟一体」をモットーとしていた。訓練項目は必ず自身で実演し、それを副教官に繰り返させた。卒業者たちによると、彼らの教育態度は、生徒たちの行動(例えば炎天下の分列駆け足行進)に気の緩みや理解不足が感じられたような場合、食事時間を逸しても同じ行動を自分と一緒に反復させるほどに厳格であったが、いかなる場合にも決して怒らず、相手が納得するまで優しく説明するのが常であった。生徒たちは彼らを畏敬し、好んで彼らの真似をした。シャツのボタンをはずしておくというような少々崩れた服装までを、である。その「ニヤット・コン」(日本人の弟子)スタイルを生徒たちは誇りにしていた。

後年、卒業者の大半が人民軍将校団の中核部分を形成し、対米戦争で連隊・師団長級の前線指揮官や作戦参謀として米軍を苦しめたことは、彼ら日本人教官陣の指導がいかに優れていたかを雄弁に物語っている。

例えば、我々のインタビューしたチャン・ディン・マイ(同窓会幹事)は、ディエンビエンフーの決戦まで多くの戦闘に参加したのち、第531砲兵連隊司令部を経て、1970年に人民軍参謀本部地質総局の疎開・防空・民兵局長に就任、北ベトナム全土の防空責任者となった。またレ・スアン・キエンは、独立戦争期に中部高原や南部での戦闘に従事、対米戦争ではラオス南部で戦ったのち人民軍戦車部隊の総指揮官となり、1975年のサイゴン攻略戦で都心(旧南ベトナム

大統領官邸前)への一番乗りを果たした。このとき大統領官邸を占拠して、サイゴン政権最後の
大統領ズオン・バン・ミンと最初に会見した歩兵部隊指揮官ホー・デー(のち中将)や、1964年
に南部のビンザーでサイゴン政権軍を撃破し、米軍参戦前の戦局の流れを一気に変えた連隊
長も、この学校の卒業生である。将官になった者は十名に余る。

数名は軍務を経て大使級外交官となった。その一人グエン・カック・フインは第4戦区の大隊
幹部などを務めたのち外務省に移り、豊富な軍事知識を生かして米国とのパリ和平交渉で活躍
した。異色の卒業生は独立戦争後に作家となったタイ・ブーで、彼は1996年に開校50周年を
記念する小冊子を出版した。同年6月1日、卒業生百数十名はクエンガイ市に谷本、中原、加
茂の3名やグエン・ソン将軍の遺児を招いて記念式典を挙行、学校跡に記念碑を建立した。同
席した井川は、数十年ぶりの恩師たちとの再会に涙を流す彼らの姿に驚いた。教官たちへの
彼らの敬愛の念は、年老いてのちも変わっていなかった。

* グエン・ソンは1995年に死去した。中越両国が対決状態にあった1970年代末～80
年代には、中国革命に参加した彼について公的に語ることは半ばタブーであった
が、1991年の両国関係正常化ののち再評価が行われ、近年は彼と親交のあった
人々の回顧録などが少なからず出版されている。中原も彼に関するエッセイ集に手
記を寄せた。

教官・副教官8名の性格は一樣ではなく、歴史認識や状況判断の姿勢にも違いがあったが、
どの人物にとってもこの学校は最良の自己燃焼の場であった。そこで、いわば一切が公的
であるような生活と、指導者としての役割意識を通じて、彼らは独立戦争への献身を人生の目
標とすら考えるに至ったといえる。彼らが独立戦争終結まで——または死ぬまで——
ベトナムの戦列にとどまって活動したのはそのためであろう。

その点では医務官レ・チュンも例外ではなかった。彼は40歳前後の温厚な人物で、医薬品
の不足に苦しみながらも不平を語らず、誰にでも懇切丁寧に治療を施すことで学校内外の日
越両国人に敬愛され、すでにベトナム社会に溶け込んでいるような気配があったという。

この学校は、設立当初は1期1年ないし1年半の授業を予定していたが、北部が仏軍の大規
模侵攻で主戦場となる気配が濃厚になったため、教育期間を急遽短縮して開校半年後の46
年11月に第1期の全課程を終了した。教官の中原、猪狩、加茂と助教の青山はグエン・ソン
とともに列車で北上、谷本も翌年11月ごろ北に移り、いずれもすでにDRVのベトバック(越北)
根拠地に集まっていた多くの日本人とともに、軍事幹部養成や戦闘指導に尽力することになっ

た。

* 加茂は 1946 年 8 月、過労のためか演習場からの帰校時に胃潰瘍で吐血してクエンガイ市立病院に一時入院した。その間、「佐藤けんりょう」という元日本軍人(将校?)が代役を勤めたが、この人物の経歴は今のところ不詳。これを加えると、教官・副教官は延べ 9 名となる。

第 1 期の卒業者は約 100 名ずつ 4 グループに分けられた。第一グループはグエン・ソンに率いられて北部へ移動した。第 2 グループはフエ、ダナンなど中部各地、第 3 グループはサイゴン周辺を中心とする南部各省へ派遣され、それぞれ各種軍事単位に配属されて戦闘や新兵訓練に従事することになった(第 2 グループの一部は第 1 グループに同行し、ハティン、ビン、タインホアなど中部北半各地で下車した)。第 4 グループはクエンガイ市にとどまり、引き続き日越両国軍人から一段上級(中級指揮官向け)の軍事教育を受けながら、みずから下級軍事幹部の養成に当たったり小隊長級の指揮官として実戦に参加したりした。第 1 グループの一部(約 20 名)はチャン・クオック・トアン武備学校卒業者の一部と合流し、新たな士官養成施設開設の準備のためにグエン・ソンのもとで再教育を受けたが、その後の軍事教育機関の変遷はベトナムの軍事史研究者が当惑するほどにめまぐるしいので省略する。

青山以外の副教官と事務官レ・チュンはクエンガイ市に残留し、陸軍中学で新入り生徒の訓練を行う一方、陸軍中学に続いて設置されていたクエンガイ軍政学校などでも中隊長級軍事幹部の教育に携わったが、1950 年代初頭に仏軍が同市に來襲したため周辺各地へ移動し、兵員訓練、戦闘指導その他の軍務を継続した。ベトミン参加の事実を隠し、いわば潜伏要員として同市に出入りすることもあった。

レ・チュンはクエンガイ省(一説ではフエ北方のクエンチ省)の山中へ逃れて医療活動を続け、現地住民に慕われていたが、1953 年ごろ病死した。彼の墓は現地住民によって今なお大切に守られているという。

青山は北部で人民軍野戦部隊の副中隊長となって各地を転戦、仏軍に対する DRV の反攻(機動)作戦が行われ始めた 1952 年 4 月、ハノイ東方のハイズオン省ビザン県ビードー村で戦闘指揮中に砲弾の直撃を受けて戦死した。同村の烈士墓地にある彼の墓碑(無銘)は、1996 年、谷本、中原、加茂の 3 名と、クエンガイ陸軍中学で中原の生徒であったファン・タインによって発見された(井川もこれに同行)。

5. 中部南半の司令センター兼対南部工作基地クアンガイと日本人

ベトナム中部南半における DRV 勢力の最大拠点であったクアンガイ省には、既述の陸軍中学教官・副教官と医務官のほかにも日本敗戦直後から多くの日本人(おおむね軍人・軍属)が集まっていた。我々の推計では約 60 人(一時は 100 人以上)で、うち 40~50 人は省都クアンガイとその近郊に住んでいた。ベトナム独立戦争中、これほど多くの日本人が集まっていた都市はほかにない。

1946 年にビンディンからクアンガイに移ったグエン・ソン将軍の第 5 戦区司令部には、これら日本人に戦闘指導や軍事訓練の任務を与える事務所(日本人の間での通称は「日本人室」)が設けられていた。その実務を担当していたのは、先に触れた旧第 34 旅団嘱託(仏語通訳)の大西貞男である。彼は必ずしも DRV の徹底抗戦方針に同調していなかったが、いかなる日本人にも親切で、ホアンというベトナム人主任とともに生活上の世話も焼き、一種の便利屋として生きることに徹していたようである。彼は独立戦争終結までクアンガイ市に住み、同年、北緯 17 度線以北からの第 1 次帰国日本人グループに加わって帰国した。

ここで 1947~49 年の戦局の推移に少々触れておきたい。

46 年 12 月、ホー・チ・ミン主席は仏軍主力のハイフォン上陸に即応して「全国抗戦」を宣言、独立戦争は北部を主舞台として本格化した。仏軍はほどなく首都ハノイに続いて平野部(紅河デルタなど)の大半を制圧し、DRV 中央指導部のベトバック(越北)根拠地に対し大規模な包囲覆滅作戦を繰り返した。だが、これで中部の戦火が下火になったわけではない。ベトバック根拠地を攻めめぐねた仏軍は、これを徹底的に孤立させようとし、すでに制圧し終えた南部の都市部に続いて中部の都市部に次々に進出した。これに対し、中部と南部のベトミン諸部隊も守勢に甘んじてはいなかった。彼らは農村部支配地域の防衛に努める一方、ベトバック根拠地に迫る仏軍の後方を脅かし、兵力分散を強いるため、農村部各地に点々と陣取る仏軍小部隊を狙って頻繁に遊撃戦を試みた。それは文字通り全国抗戦であった。

クアンガイ市は、この時期、中部南半部における DRV 武装勢力の最大拠点となっていた。同市に集まった日本人戦士が、この地域で最も多かったのはそのためである。彼らは第 5 戦区司令部の統率下に身を置き、その指示で各地へ兵員訓練を兼ねた戦闘指導や民兵・ゲリラ育成に赴いていた。生き残って帰国した人々の証言や回想記によると、彼らの行動は北はクアンチ省、南はカインホア・ラムドン・ダクラック各省まで、日本の東北地方全域に匹敵する広い範囲に及んでいて、しかも 1 カ所に数日間しか滞在しないほどに迅速であった。仏軍側からは神出

鬼役に見えたに違いない。これは当時のベトミンの末端諸部隊と民兵・ゲリラ集団が、少なくともこの地域において、いかに彼らの戦闘指導と訓練を必要としていたかを示唆している。

一つの典型として、青木茂(旧陸軍第 45 教育飛行連隊曹長、山口県出身)のケースを紹介しておく。

彼は軍用機でシンガポールから台湾へ行く途中、エンジン故障でカンボジアに不時着、そこで敗戦を知り、ベトナムの海岸から船で帰国しようとして、同乗の仲間7人と中部高原へ越境、プレイクで DRV 上級軍人カオ・バン・カイン(のちの第5戦区長)にベトナム参加を求められ、高原各地で仏軍と戦いながらクアンガイ市に到着、第5戦区司令部の指示で兵員訓練・戦闘指導要員となり、少なからぬ元日本軍人とともにダナン、ホイアン、トイホアなど中部海岸各地を転戦した。一時、第5戦区情報部で兵要地誌を担当、仏軍の大拠点であったダクラック省都バンメートとその周辺地域を調査し、詳細な報告書と軍事地図を提出した。旧クアンガイ城内に防空陣地を築き、仏軍機を機関銃で撃墜したこともある。

その間、仲間の日本人4名とともに、クアンガイ省内のある村で、そのころ中部の党・政府最高指導者であったファン・バン・ドン(後年の首相)の講話を聴き、5名全員が「ファン」のつくベトナム名を貰った(青木はファン・バット)。過労のため一次退役してファン・バン・ドン夫人の故郷モードック県の温泉地で休養したが、仏軍のクアンガイ制圧作戦が始まったので戦場に復帰した。51 年ごろ最終的に退役。独立戦争終結後はベトナム人の妻とともにクアンガイ省内でしばらく自活、のちにサイゴンに移って日本企業に勤め、ベトナム戦争(対米戦争)中もサイゴンにいた。1975 年 4 月のサイゴン親米政権の崩壊は人民軍によるバンメート攻略から始まったが、これを聞いた青木は一瞬、対仏戦争期に彼の作成したバンメート調査報告書が役立ったのではないかと思ったという。

* 独立戦争期に末端の日本人戦士と最も頻繁に接した DRV 指導者はクアンガイ省出身のファン・バン・ドンであるかもしれない。青木の僚友であった安藤昇三(旧第 21 師団防疫給水部衛生兵)らによると、彼はクアンガイ陸軍中学の副教官であった前記峰岸の結婚式にも出席、また 51 年ごろ実兄の屋敷に省内にいた日本人戦士数十人を集めて、「もう皆さんがいなくてもやっていけるから、今後は自由に生きてほしい」と語った。事実上の退役勧告であったが、退役するかしないかは本人の選択に委ねられていた。人民軍の通称「ホーヒック大隊」顧問として活躍した富永朋蔵(旧第 21 師団下士官)によると、この地方での退役慰労金は 1 万 5 千ピアストル(当時の実質レートで 100 ドル程度)で、ほかに米 60 キロが与えられた。

ベトナム北部と南部を結ぶ海岸回廊の midpoint に位置するクアンガイ市は、南部のベトミン組織に対する連絡・工作基地の一つでもあった。その南部の政治・軍事勢力図は、しかし北部や中部のように見分けやすいものではなかった。仏印時代にコーチシナ直轄植民地であった南部は、ドンキン(東京)保護領であった北部およびアンナム(安南)保護王国であった中部とは違って、フランスの行政・軍事機構が最もよく整備されていた地域である。仏軍は日本敗戦直後の混乱期に英軍の支援を得て逸早く都市部を制圧し、やがてサイゴンに元安南国王バオ・ダイを中心とする傀儡政権(1948年にベトナム臨時中央政府、49年にベトナム国政府)を擁立、そのためベトミンの組織網は各地で分断され、武装勢力の広域連携活動は極めて困難であった。また南部にはベトナム国民党、カオダイ教団(日本の大本教団に似た混合宗教団体)、ホアハオ教団(仏教系新興宗教団体)その他、独立をめざしながらもベトミンと対立する諸集団が乱立、さらに左翼勢力内部でも共産党とトロツキスト・グループ(1930年代のコーチシナで相当な政治的影響力を誇った第3インターナショナル勢力)のライバル関係が尾を引いているといった具合で、かなり錯綜した状況が続いていた。

その中で、クアンガイ市にいた旧日本軍少佐2名がそれぞれ南下して消息を断った。ベトミンに参加した佐官級日本軍人は極めて少数(前記井川少佐を加えて4名)であるし、また両少佐の謎めいた足跡は当時のベトナム南部情勢について何ごとかを示唆しているように思われるので、この二人についてやや詳しく説明しておきたい。

(1) 石井卓雄少佐

1945年7月、米英軍のインドシナ侵攻に備えてビルマ戦線からカンボジアへ移動、ベトナム南部に駐屯第38軍の傘下に編入された陸軍第55師団(壮兵团)の参謀部付将校。陸士第55期。広島県出身。当時、最年少の佐官であった。プノンペンで敗戦を知った彼は、同年10月中旬頃(一説では12月17日)、同じ師団の兼利俊英少佐(陸士54期、第144連隊第2大隊長)ら数人の将校や下士官・兵とともに軍用トラックで陸路ベトナム南部(メコン・デルタ)に潜入、ソクチャン市でDRV南部抗戦委員会に迎えられ、ロンスエン市にその地方の日本軍離隊者を集めてメコン・デルタ最大の都市カントーの仏軍部隊を襲撃(日本人2名戦死)、その後、ベトミン・ゲリラの訓練と戦術指導に努めた。

石井らはベトナム独立戦争に参加する決意を師団司令部に告げ、その了解のもとに送別会まで開いてもらって離隊した。明らかに前記の「自覚的参加型」である。また彼らはベトナム潜入直後、メコン・デルタで離隊した召集兵を帰隊させるための説得活動も行ったという。敗戦後に

他国の独立戦争に加わるのは死を覚悟した職業軍人の任務であって、家族に責任を負う一般召集兵は早々に帰国すべきであるとの、いかにも陸士出身者らしい確信が窺える。

46年5月、石井は兼利ら同行将校と別れてクァンガイ市に移った。グエン・ソン将軍が陸軍中学に続いて同市南郊に設立したクァンガイ軍政学校の教官に就任、ある程度の実戦経験を持つベトナム中級幹部(中隊・小隊指揮官級で、元日本軍兵補が少なくなかった)を対象に軍事指導を行い、しばしば南方のトイホアやニンホアで民兵・ゲリラ訓練も行った。クァンガイ省内で分隊長級の戦士(日本式に言えば下士官)を養成する学校の責任者になったこともあるらしい。軍政学校での彼の助教官は旧第2師団第29連隊の高野義雄准尉(独立戦争終結までクァンガイ市などで活動)であった。

彼は当時、日本人に対しては「花谷」と名乗っていた。ベトナム名はチャン・チ・ズン。寡黙だが明るくて温厚な人物であったという。

立川京一の紹介している仏軍側の記録によると、彼は46年7月に中部高原のプレイクでベトナム軍の攻撃作戦を指導、同年8月にはトイホアに設立された軍政学校の校長になり、48年ごろ南部におけるベトナム軍の筆頭顧問になったという。しかし、これらはDRV側の公私記録や個人談話には全く登場せず、プレイク云々以外は日本人の役割を誇大視した仏軍の誤解が多分に混入していると思われる。47年の後半(一説では48年)、彼は仏軍の後方攪乱を狙ったDRV南部抗戦委員会の指示で南下する人民軍1個中隊(通称「バ・ズン大隊」)に顧問として同行した。クァンガイ陸軍中学の生徒だったチャン・ツー・キン(対米戦争期に人民軍連隊長、のちホーチミン市郵政局長)は、この部隊をニャチャン近傍の山中まで案内した。当時ベトナムの訓練・戦闘要員としてクァンガイ市などで活動していた石田松雄(元第2師団第29連隊下士官、福島県出身)の回想記によると、この部隊には日本人十数名が加わっていた。

その後の同中隊と石井の運命については確かな情報がない。

ベトナム協会専務理事西川捨三郎の紹介している石井の元部下グエン・バン・タインの談話(1969年)によると、石井は50年5月20日、メコン・デルタで仏軍と交戦中に戦死した。日本人を最も危険視していた仏軍の罠に落ちて捕殺されたとか、南部で転戦中にベトナムと対立してビエンホア付近で処刑されたとかの根拠不明の噂もある。直情径行の典型的な日本軍人であったともいわれる石井の言動が、1945年ごろから革命路線を鮮明に打ち出し始めたベトナムとの関係に齟齬を来したとしても必ずしも不思議ではないが、第5戦区司令部で相当に信頼されていたからには、ベトナムの戦列を離れるようなことは余り考えられず、戦死した可能性が最も大きい。青木茂は、石井が大山准尉と名乗る部下(旧第2師団第29連隊の大山正夫曹長か)

とともに仏軍の地雷に触れて死んだという、かなり信憑性の高い情報を伝えている。いずれにせよ、彼がもしも彼がベトナム青少年と民族解放の熱情を共有するクアンガイ陸軍中学教官のようなポストに就いていたなら、その運命は大幅に違っていたと思われる。

グエン・バン・タインは、独立戦争初期に石井の部下として戦った元日本軍人市川洋吉とともに石井を顕彰する石碑(善通寺市の陸上自衛隊第2混成団本部に現存)をつくったが、ベトナム戦争終結以後は消息不明である。

(2) 齋藤定憲兵少佐

旧第 34 独立混成旅団所属。陸士 51 期。埼玉県出身。井川少佐に続いてフエで離隊し、46 年に石井少佐とともにクアンガイ軍政学校の教官になった。ときどき陸軍中学でも教えていたという。交友範囲は同中学の教官や石井らに比べて狭く、彼の活動を伝える情報は極めて少ない。彼は 49 年か 50 年に数人の日本人とともに南下したまま消息を断った。

1970 年代初頭、齋藤の郷里に住む某僧侶(今は故人)が、齋藤の遺骨と称するものを遺家族に届けた。カムラン付近の墓地で発掘したという。しかし、それは砂にまじった「遺骨様のもの」にすぎず、仮に誰かの遺骨であるとしても齋藤のもとは特定できる証言や状況証拠はない。井川の現地調査によると、49 年ごろベトナム人を装って1号国道を車で南下中の日本人グループが、カムランの仏軍検問所で捕えられ、ほどなく処刑されたという曖昧な話が地元伝わっている。その日本人グループが齋藤の一行であったか否かは不明である。

人民軍第 95 連隊の軍事顧問としてクアンガイ省で活動していた前記安藤昇三によると、齋藤は「カオダイ教団にいる林大佐(どういう人物か不明)と話し合いに行く」と語っていた。この「話し合い」は、相反する二つの意味に解釈できる。一つは林大佐を通じてカオダイ教団をベトミンに協力させるための説得工作、もう一つは齋藤自身がベトミンの戦列を離れてカオダイ教団に移るための交渉である。齋藤は第5戦区司令部の了解ないし指示を得て出発したともいわれているので、後者の真偽は疑わしい。前記の富永朋蔵は、齋藤が南部に到着したのち、カオダイ教団またはビンズエン教団(仏軍に協力していたといわれる謀略的新興宗教団体)に殺されたとの情報を伝えている。

中部でベトミンの実戦部隊に加わっていた旧日本軍人は、ほぼ例外なく同じ部隊または近隣諸部隊にいた複数の日本人が戦病死したと語っている(これは北部の場合も同じ)。また中部では、日本人約 10 名が強盗事件や紙幣偽造事件にかかわって処刑されたり一時的に拘禁さ

れたりしたが、これは DRV の行政・軍事機構が北部ほどには整備されず、従って日本人に対する統制力もやや弱かったためであろう。

前記加茂によれば、1946年7月、沖縄出身の某中尉(実名不詳)が旧クエンガイ城内の病院で治療中にピストル自殺を遂げた。また青木によると、同じく沖縄出身の照屋政一(グエン・バン・チュン)は、クエンガイ省で戦ったのち独立戦争終結の54年に北へ移り、59年にハイフォン港から日本の貨物船で帰国する途中、たまたま台風を避けて臨時寄港した那覇を出港してほどなく自殺した。いずれも現代沖縄の悲劇を象徴するかのような事件である。沖縄が第2次大戦末期の地上戦で壊滅状態に陥ったことはベトナムにも伝えられていた。戦火に倒れたかもしれぬ肉親の面影などが彼らの胸を締めつけていたであろうことは想像に難くない。照屋は沖縄が日本独立後も米軍の支配下に置かれたことまでは知らなかったようである。彼は那覇港に林立する星条旗を見て、非常なショックを受けた様子であったという。

ベトナム独立戦争における日本人の主な役割

1. 多様な貢献

発足直後の DRV は、迫り来る仏軍との対決を前にして、極度の人的・物的資材の不足に苦しんでいた。この弱点を少しでも補うことは、新国家の死活にかかわる緊急中の緊急課題であった。とりわけ DRV が必要としていたのは、近代戦の知識・技術と体験を持つ軍事教育(兵員訓練および軍事幹部養成)と戦闘指導の要員、そして近代的な武器と弾薬である。この必要をとりあえず満たしうる存在は、大兵力を擁しながら対米英戦争に敗れたインドシナ駐留日本軍の将兵以外になかった。

それゆえ、ベトナムに対する日本人の協力は、まずはこの分野から始まった。この役割は、DRV の軍事機構がひとまず整備され、仏軍の攻勢に耐えることができるようになった戦争中期(1947～52年)にも続き、同時に軍事地図作成や通信のような特殊技術部門や医療、防疫、医薬品製造、武器・弾薬製造などの後方支援部門に拡大された。一部の日本人は軍中枢機関でも働いていた。戦闘指導要員は一般に「顧問」とされ、公式には指揮命令権を持たなかったが、しばしば指揮官同様の役割を果たし、あるいは一般兵士の先頭に立って戦場を駆け回った。経済・財政、文化など非軍事部門で働く日本人(民間人を含む)もいた。それらを以下に、総論的に

略説する。

2. 軍事部門

(イ) 軍事教育

ベトナムに加わった旧日本軍人は、各地に自然発生的に生まれた民兵・ゲリラの訓練に当たるのが最初の、また最も一般的な奉仕形態であった。民兵・ゲリラの動きが活発であった地域には、必ずといってよいほど旧日本軍人の姿が見られた。加茂について既述したように、日本人がみずから民兵・ゲリラを組織して戦闘を開始するケースも少なくなかった。日本人が最も多く——特に仏軍が逸早く展開した南部で——戦死したのも、このような民兵・ゲリラ組織の形成段階においてである。

正規軍の上級・中級指揮官(士官)を養成する任務と、小隊レベルの指揮官(下士官)および地方軍諸部隊の指揮官を養成する任務がこれに続いた。上・中級幹部の教育機関は DRV 中枢指導部の決定にもとづいて設置され、下級幹部および地方軍幹部の教育機関は軍区司令部の管掌のもとに設置・運営されるのが常であった。

前者は①1946年5月に北部のソントイに設立されたチャン・クオック・トアン武備学校、②46年6月に同じく北部のタイグエンに設立されたバクソン軍政学校、③同年6月に開校したクエンガイ陸軍中学(既述)である。①と③は日本の旧士官学校、②は陸軍大学校に相当する。

DRV 国防省の設立したチャン・クオック・トアン武備学校は、それまでの短期教育機関を発展させたもので、そこにも日本人教官がいたという情報があるが、我々はまだ確認していない。共産党中央の設立したバクソン軍政学校の教官は矢澤鶴次(グエン・バン・タイン)、青山幸治(タイン・ソン)ら旧日本陸軍将校3名で、歩兵、工兵、重火器の3コースのそれぞれを担当していた。クエンガイ陸軍中学の教官がすべて日本人であったのに対し、武備学校の教官は大半が中華民国軍と仏印軍にいたベトナム人将校で、両校は問わずも中仏日3カ国の軍事技術競合の場となった。

46年末に武備学校に合流したクエンガイ陸軍中学卒業者は「日本人教官が断然上だった」という。武備学校卒業者は後方勤務に回ることが多かったのに対し、陸軍中学の生徒は卒業後ただちに小隊長級の指揮官として実戦に投入されたところからみて、これは単なる自慢ではなさそうである。

46年12月の全国抗戦開始に伴って、3校はトゥエンクアンの武備学校1校に統合されたが、

校長のグエン・ソンが北部と中部の境界に位置する第4戦区の司令官となったためゲアン省都ビンへ移動した。教官は加茂ら日本人2名と旧仏印軍将校1名(ベトナム人)であった。翌年5月、ベトバック根拠地のバクカンに設けられた分校には、旧軍政学校の日本人教官2名が配置された。

48年4月、武備学校はベトバック根拠地のドンヒーに移って「チャン・クオック・トアン陸軍中学」と改称した。教官は以前のバクソン軍政学校や中・仏の幹部学校で学んだベトナム人と日本人5名(中原、猪狩、加茂、青山幸治、アイ・ビエツト)であった(アイ・ビエツトは本名不明)。

やがて戦争激化につれて、多くの戦区、連隊、大隊にも中・下級幹部養成施設(学校)が相次いで設置されるようになった。それらの教官の一部はかつてクアンガイ陸軍中学などで日本人に学んだベトナム人青年であったが、旧日本軍将兵もこの種の施設で教えていた。実戦を伴う教育だけに、これら中・下級幹部教育における日本人教官の役割は極めて大きかった。

DRV 国防省には、こういった軍事教育を統括する軍訓局(旧日本軍の教育統監部に相当)が設けられた。局員になった日本人は当初に6名、のちには延べ9名(加茂、青山幸治、アイ・ビエツトなど)である。クアンガイ陸軍中学の教官4名はすべて一度は局員を勤めた(加茂は独立戦争終結まで)。彼らは高級軍事顧問として、しばしば正規軍による大型の作戦にも関係していた。

軍中央の人事は急速な戦局変化に即応して行われていたため、日本人のポストは頻繁に変わった。一人が同時に複数のポストに就いたり、ほかの機関の仕事を手伝ったりすることも珍しくなかった。これはあらゆるレベルの軍政・軍令機関と実働部隊に見られた現象である。

* 青山幸治(旧日本陸軍第21師団第62連隊中尉、長野県出身)は51年に軍訓局員に就任、52年12月に自殺。恋人のベトナム人女性が仏軍将校に心移したことに悩んでいたといわれる。アイ・ビエツトも同じころ姿を消した。恋人の誘いで仏軍支配地域へ逃亡、または逃亡しようとして処刑されたとの情報があるが、真相は不明。

(ロ) 実戦指導

日本人は民兵・ゲリラから連隊まで、あらゆるレベルの軍事単位による戦闘にかかわっていた。彼らがいなければ、初期の抗戦は不可能——少なくとも極度に困難——であったに違いない。戦争が陣地戦段階から機動戦段階に移るころには、日本人が正規軍の中隊・大隊長レベルの前線指揮官に任命されることも稀ではなくなった。橘信義(チャン・ドック・チュン)、前記矢澤鶴

次、同青山浩、岩井古四郎(グエン・バン・サウまたはサウ・ニャット)などである。

橘(徳島県出身、旧陸軍軍曹)は第 66 連隊の戦闘中隊長としてラオスを含む広い範囲を転戦し続けた。この中隊の勇猛さと、いかにも旧陸軍中野学校出身者らしい彼の状況判断の的確さは、今も人民軍古参幹部の間で語り草になっている。

岩井はグエン王家につながるダン・バン・ビエツ第 174 連隊長のもとで偵察中隊長を勤め、仏軍の DRV 根拠地制圧作戦を阻止した 48 年の 4 号道路戦役で極めて重要な役を演じたほか、しばしば効果的な助言を行ってビエツを助けた。ビエツによると、彼の連隊にはホン・フォン(本名不詳)という有能な歩兵中隊長もいたが、彼は 52 年にハイフォン付近のパービーで戦闘指揮中、仏軍の直撃弾を受けて戦死した。戦死の場所とベトナム名は違うが、時期と状況からみて、この人物はクアンガイ陸軍中学の副教官であった青山浩かもしれない。また吉沢南は、砲兵大隊長になった旧日本軍憲兵のことを伝えている(我々は未確認)。

独立戦争参加日本人に関する数少ないベトナム人研究者の一人グエン・バン・コアン博士の資料によると、日本敗戦直後にフェで旧 34 独立混成旅団(前記井川少佐の部隊)にいた日本軍人 2 名がベトミンに参加した。一人は立花功、もう一人はグエン・チ・フンというベトナム名を持つ元通信士官である。立花はフェの旧王宮で結成された「決死隊」で活躍、全国抗戦開始後はフンとともにベトミン正規軍の第 101 連隊第 319 大隊に配属され、数々の奇襲作戦で指導的役割を果たした。フンは副大隊長になった。この大隊の一個中隊は、日本、フランス、ドイツ、デンマークなどの外国人が加わっていたので「国際中隊」と呼ばれていた。立花とフンは独立戦争終結の 54 年までフェ周辺などベトナム中部で活躍し、のちにベトナム人の妻とともに帰国したという。

- * ベトミンには日本人以外の国籍者も少数ながら参加し、彼らも新ベトナム人と呼ばれていた。多くは元フランス外人部隊の兵士で、アルジェリア人やモロッコ人もいた。ドイツ人は 2 名で、2004 年にはドイツで彼らに関するドイツ政府機関主催のセミナーが開かれた。

連隊・師団級実戦部隊の作戦に関して司令官や参謀に助言したり、ときどき戦闘指揮にも従事した日本人は珍しくない。例えば、中原は 47 年、DRV のハノイ防衛軍が仏軍の包囲作戦で窮地に陥ったとき、夜間の渡河脱出をボー・グエン・ザップ総司令官に提案して成功させている。これに先立つ同年のナムディン攻囲戦では、連隊司令部に野砲直射を進言、みずからその作戦を指揮して仏軍を苦しめた。ボー・グエン・ザップ將軍の回想記には、ある旧日本軍情

報將校(中原と思われる)が仏軍の小陣地に対する攻撃方法(奇襲)について有益な助言を行ったとの記述がある。

人民軍総司令部ないし参謀本部に勤めた日本人は数名である。彼らのうち中原と中川武保(ラム・ソン)は、ザップ総司令官直属の軍事参議官に任命され、軍中枢の作戦会議にもしばしば出席した。ただし彼らは、軍中央の全体戦略には一切関与せず、もっぱら大小の作戦の戦術的側面についてのみ、それも求められた場合にのみ意見を具申ししていた。

1949年秋、人民軍総司令部は、仏軍の大規模攻勢から中央諸機関の集中するベトナム最北のベトバック根拠地を守り、やがて反攻に転ずるため、この地方にベトナム最大の兵力を持つ「ベトバック連区」を設定したが、その参謀部には駒屋俊夫ら3名の日本人スタッフがいた。元南洋学院生の駒屋(グエン・クアン・チュック)は作戦班に属して軍事地図作成を一手に引き受け、元山久三(ホアン・バン・ハック、旧第3飛行師団第5中隊下士官)はそれを地方諸部隊に配布しつつ作戦上のヒントを与える任務に就き、もう一人の藤本猛省(電信担当、元航空通信兵)とともに同連区に欠かせぬ存在となった。

旧日本軍人の軍事知識・技術は、その後も長くベトナム人民軍で用いられることになった。陸軍の「砂盤演習」(作戦地域の地形を砂で模造するもの)は、その代表格の一つであろう。対米戦争のとき北ベトナム爆撃中の米軍攻撃機をしばしば苦しめた「全力射撃」(低空飛行の敵機を複数の小銃や機関銃で斉射し、被害を最小限に抑える迎撃方法)も、実は独立戦争期に旧日本軍人の伝えた戦法である。

(ハ) 後方支援と非軍事部門

中央でも地方でも、武器・弾薬製造、橋梁架設、沈船引き揚げなどの後方支援任務に就いていた日本人は極めて多い。この分野では、工兵、砲兵、輸送兵などとしての旧日本軍での経験が大いに役立った。

医療・防疫・医薬品製造の部門では、DRV 財務省の病院に勤務しながらベトバック根拠地全体の防疫・医療活動を指導した高澤民也(カオ・タイン・フオン、石川県出身、元第21師団第62連隊軍医中尉)と、その下で働いていた宮崎勇雄(旧第21師団山砲部隊下士官、長野県出身)らの努力が際立っている。彼らは乏しい工業用原材料や野草および鉱石を用いて抗マラリア薬、麻酔剤、胃腸薬、カルシウムなどの製造に懸命に努力した。注射液・食塩水用の蒸留水製造装置の組み立ては、元ブリキ職人の真脇佳廣(ホー・タム)が一手に引き受けていた。

クアンガイから北上したのち中央軍事部門を経て DRV 国防省医療部のスタッフとなった前記

猪狩も、歯科医として多数の DRV 要人や軍事幹部にとって必要不可欠の人物であった。当時ベトバック根拠地でごく普通に用いられていた竹製の義歯は彼の考案したものである。彼は独立戦争後もしばらく妻の故郷ナムディンで歯科医を開業していたという。

非軍事部門では 2 名の民間人の仕事の特筆に値する。元横浜正金銀行ハノイ支店員の藤田勇(ホアン・タイン・ツン)は初代財務大臣レ・バン・ヒエンのもとで近代的財政・金融システム構築に努力し、ベトナム初の紙幣発行事業にも携わった。紙幣用の紙の製造も、主に日本人の仕事であった。また元大阪商船ハノイ駐在員の安藝昇一(早大出身)は、ベトバック根拠地の文化活動を指導した。2004 年に刊行されたヒエンの日記には、DRV 財務省の管轄下で働いていた藤田以外の日本人として、ディン(運転手)、タイン(無線技師)、ルオン(鉱山技師)、トゥアン(同)などの名が出ている。いずれも本名不詳である。

(二) 受勲者

「勝利」、「軍功」その他各種の勲章および徽章を授与された日本人は、これまでの我々の調査では 30 名を上回る。本報告書に氏名を明記した日本人の大半は受勲者である。戦闘、訓練、軍需品製造のほかには気象観測で諸部隊の作戦を助けた槌谷勇(グエン・バン・ドン、徳島県出身)に至っては、10 種の勲章、徽章、表彰状を授与されている。

(ホ) ベトナム独立への貢献度

上記すべての調査結果から判断できるのは、ベトミンに参加した多くの日本人が、独立戦争の前半期に、DRV の防衛と軍事機構形成のため農業における肥料のような役割を果たしたということ、また戦争の全期間を通じて見れば、ゴシック建築の交叉穹窿を固める漆喰のような役割を果たしたということである。

刑事犯罪、逃亡、自殺など日本人の起したネガティブな事件は確かにあったが、約 600 名という独立戦争参加者の総数に比べれば、それらの事件は奇跡的に少なかった。民間人殺害とレイプの責任を問われた者は皆無である。彼らの心身を痛めつけていたはずの、敗北した外国軍の脱走兵という立場や、しばしば飢餓に近い状態で火力・兵力ともに格段に優勢な敵を相手にしなければならなかったという環境条件の厳しさを考えれば、このモラルの高さは世界戦史に特筆されてよいかもしれない。

ベトナム軍事当局も 90 年代半ばから彼らの役割を高く評価し始めた。そのことは、加茂がかつて受けた勲章の再授与式(1996 年、ハノイ)に際し、人民軍の古参上級幹部グエン・テ・グエ

ン大佐が述べた次の言葉で推察できるであろう。

「飢えたときの(米飯の)一口は、満腹時の(食べ物)の一包みに勝る。我々の最も苦しかった時代の彼ら(日本人)の貢献は何よりも貴い。わが軍の現役・退役将官・佐官と退役上級幹部は、おおむね日本人から何らかの教えを受けている」

(へ) 最強の「溶媒」——ベトナムの妻たち

戦時に他国の植民地に駐屯していた軍隊の将兵数百人が、祖国の敗戦ののち、若干の民間同胞とともに、その植民地における独立戦争に個人として参加し、10年にもわたり困苦に耐えて戦い続けたというのは、近現代の世界史に類例を見ない現象である。ベトナム残留日本人のみそれが可能であった原因として、先に少々触れた「アジア諸民族解放」の理念や、苦闘する戦友(この場合はベトミン)を見捨てての戦線離脱を最大の恥辱と思うような当時の日本人に特有の意識形態のほか、彼らがベトナム社会に溶け込んでいた——文字通り「新ベトナム人」としてベトナム社会に受け入れられていた——ということが指摘できる。

この「ベトナム社会への同化」が比較的容易であったのは、当時のベトナム(特に北部と中部)が宗教、慣習、生活様式、社会構造など、あらゆる面で戦前・戦中の日本に最もよく似ていたからであろう。住民のメンタリティーや風景までが酷似していた。だが、これは同化を可能にした条件にすぎず、日本という祖国を持つ彼らを現実にベトナム社会に溶け込ませるには強力な溶媒が必要であった。最も効果的な溶媒となったのは、彼らと結婚したベトナム人女性である。

我々の推計によれば、ベトミンに加わった日本人(おおむね20代～30代前半)の80%以上が戦いの過程で結婚し、その半数以上が子供を得た。結婚した者の3割ほどは日本に妻子を持つ既婚者であった。恋愛を経て結婚した者よりも、所属機関・部隊の上官や駐留地の世話役の勧奨、斡旋、媒酌で結婚した者の方が断然多い。恐らくベトミンの各級指導機関には、彼らを独立戦争の戦列に繋ぎ止めるため、また性的問題の発生による戦列の乱れを避けるため、なるべく早く彼らを結婚させるとの方針ないし暗黙の合意があったのであろう。

結婚当時の彼女らの職業は、各級機関・部隊の事務要員や看護婦、民兵・ゲリラ部隊の女性戦士、駐屯地の村娘などと雑多である。仏軍支配下の都市部からベトミン支配地域に逃れ、何らかの兵站業務に就いていた知的女性も少なくない。彼女らは銃後でも前線でも夫の生活を懸命に支える一方、ベトナム語やベトナム社会への適応方法を教え、しばしば地形などに関する知識を生かして戦術についてまで助言した。彼女らはまた、日本人とベトナム人軍民との関係を調整する無二の潤滑油でもあった。ベトミン参加日本人のモラル水準が極めて高く、殺人・

レイブ事件に全く関与しなかったのは、彼女らの存在に負うところが大きい。

だが、1954年の独立戦争終結に伴って夫たちの帰国が始まったとき、彼女らの運命はさまざまに分かれた。

帰国の経緯については次項に記述するが、北緯 17 度線以北からの集団帰国第1陣の妻たちは同行を許されず、多くはそのままベトナムで生きるようになった。日本に妻子のいた帰国者の妻たちも同様である。北緯 17 度線以南にとどまった日本人の妻たちはすべて夫婦生活を継続、のちに夫や子供とともに日本へ移住した。17 度線以北からの帰国第 2～4 陣の妻たちも、おおむね夫に同行した。

17 度線以北(DRV＝北ベトナム)に残された妻たちの運命は苛酷であった。ベトナム戦争(対米戦争)に際し夫の祖国日本が米側に立って間接的に参戦したからである。彼女らは家族もろとも社会的差別に苦しみ、日本人の妻であることを隠すために夫の日記類を破棄したり、DRV への忠誠を証明するために子供を人民軍に入隊させたりした。入隊した子供の多くは、南で最も危険な任務を引き受けて戦死した。

日越関係はベトナム戦争後も長らく敵対的であった。その間、彼女らは日陰の身であることを強いられ続けた。事態は 1990 年代初頭ようやく好転したが、今度は日本で元から日本人女性と結婚していたり新たに結婚したりした夫の家族とのトラブルが待ち受けていた。その種のトラブルが解消し、夫本人がベトナムを訪問、日越双方の家族が相手の立場を思いやって交流するようになったのは、1990 年代も半ばを過ぎてからである。今やベトナム側の子供には、地方行政機関の幹部、教師、美術家などとして確実な地位を占めている者が少なくない。

独立戦争中に戦病死した日本人の妻たちのその後は不明である。多くは再婚したと思われるが、独身を通した未亡人もいたであろう。吉沢南は 1990 年代中ごろ、サイゴン近郊でベトナム参加日本人の墓を守って余生を過ごす独身の老女に出会ったという。

結婚に至らぬまま日系新ベトナム人の戦病死で終わりを告げた恋愛関係も多かつたらしい。南部の元ベトナム幹部で、ベトナム戦争の一大転機となった NFL のテット攻勢(1968 年)のときサイゴン・ザディン地区の責任者を勤めたチャン・バック・ダン(現在は歴史家)は、独立戦争期にメコン・デルタで戦死した旧日本軍将兵 2 名とベトナム人女性の悲恋を自作の映画シナリオに描いている。

任務の終了と帰国

ベトナム独立戦争で日本人が重要な役割を果たした期間は、この戦争の始動段階から DRV 側の反攻開始段階までであった。彼らの大半(主として訓練・戦闘指導部門の中・下級幹部)は、地域によっては49年、全国的には52年までに、DRV当局の退役勧告に応じて、もしくは自発的に民間生活に移っている。戦争終結まで退役しなかった日本人の多くは、中央諸機関と軍区で重要なポストに就いていた人々(例えば軍訓局スタッフや医療部門の上級スタッフ)とベトナム労働党(現共産党)の黨員となっていた人々である。その理由としては、DRVの軍事機構がベトナム人だけで仏軍に対抗できるほどに整備・強化されたこと、また1949年に中華人民共和国が成立し、50年からDRVに対し武器・弾薬など必要物資の大々的補給のみならず軍事顧問の派遣をも行うようになったことが挙げられよう。

DRVは日本人の知識と技術をさして必要としなくなったのである。その時期は、DRVが労働党の主導で社会革命を明確に志向し始めた時期と重なっていた。共産主義に理解を持たぬ者の多かった日本人集団は、その点ではDRVの重荷にすらなっていたと推測される。

DRVの勝利を決定的にしたディエンビエンフーの戦いには、日本人は直接には1名も参加していない。

インドシナ停戦協定(ジュネーブ協定)の締結が間近に迫り、ベトナムが一時的にせよ北緯17度線(暫定軍事境界線)で二分されることが明らかになったとき、DRV政府は遂に同境界線以北にいた日本人全員の送還を決定、日本平和委員会や両国赤十字社を介した対日交渉が合意に達したのち、彼らを終結地点に呼び寄せ、深い感謝の意を表しつつも終戦後の集団送還計画を通告した。単身帰国という条件を受け入れた第1次帰国グループ71名は、ジュネーブ協定締結後に中国を経て復員船興安丸で敦賀に帰った。それは興安丸の最後の航海であった。

61年までの第2～4次グループは家族同伴を認められていた。第1次から第4次までの帰国者は総計約150名である。これには前記大西貞男ら北緯17度線以南から北へ移った者も数名含まれている。彼らは帰国後、相互扶助・親睦団体「ベトナム友の会」(一種の戦友会)を結成した。

祖国は彼らに極めて冷淡であった。その原因は「共産主義国に奉仕した者たち」という一語に尽きよう。彼らの多くは就職の道を閉ざされ、一部はしばしば公安機関に要注意人物とみなされて極度に困窮したという。しかし彼らの多くは、帰国後もDRVへの協力姿勢を捨てなかった。

ベトナム戦争反対運動に参加した者は少なくない。中原、岩井らは友好商社などからなる日本ベトナム貿易会を組織し、藤田も日本ベトナム産業技術協力を組織して、ホンガイ炭の輸入などで対米戦時の DRV を支援、その後も日越経済交流に尽力した。加茂のようにベトナム民話の紹介などを通じて日越文化交流に努力した者もいる。

一方、北緯 17 度線以南にいた独立戦争参加日本人のうち、もともと南部にいた者の一部は各個ばらばらに日本へ帰り、また一部は現地に残留した。前記の松嶋元一等兵とは別にメコン・デルタにとどまり、そこで対米戦争後ほどなく死亡した者もいる。クアンガイなど 17 度線以南の中部にいた日本人大多数は、除隊(1950~52 年)ののちしばらく現地で商業、手工業、農業を営み、1954~60 年に南部へ移って日本企業関係や日本大使館関係の仕事に就き、南部に生き残っていた元ベトミン参加者の一部と相互扶助団体「寿会」を結成した。彼らは対米戦争終結・南北統一後もサイゴンなどで暮らしていたが、ベトナムがカンボジアとの戦争の激化や中国との関係の陰悪化で窮地に立った 1978 年、現地政府当局の要請で妻子とともに一斉に帰国した。

「寿会」会員の多くは、南ベトナム解放民族戦線(NFL)と密かに友好関係を保っていた。ある会員はその関係を生かして 1962 年にダニム・ダム建設中に NFL に捕えられた日本人技師らの解放交渉を成功させた。別の会員の妻は、サイゴンで NFL の地下活動に従事していた。サイゴン親米政権の機関に勤めた者は 1 名だけである(ダナン警察署の幹部となり、サイゴン陥落直後に日本人相手の売春斡旋容疑で逮捕され、半年後に日本へ強制送還)。

2005 年の今、日本敗戦時からベトナムに住み続けている独立戦争参加日本人は皆無である(1990 年代からサイゴンで日本企業に勤めている者が 1 名だけいる)。帰国した人々も次々に世を去り、健康な生存者は約 20 名にすぎない。クアンガイ陸軍中学の教官 4 名についていえば、まず猪狩がベトナム戦争終結以前に死去、次いで谷本が 1990 年代に死去、中原も 2003 年に死去し、生存者はもはや加茂だけである。

冒頭に述べたように、ベトナムでも関係者の死去が相次いでいるため、本調査は困難を極める。しかし、血で贖われた民族間の紐帯は何よりも強い。冷戦が終結し、ベトナムがドイモイの道を驀進し始めた 1990 年代以降、一貫して安定的に発展しつつある日越協力関係は、彼らベトナム独立戦争参加日本人の事跡を正確かつ総合的に掘り起こし、これを両国民に示すことによって磐石の基礎を得ることになろう。我々が調査を継続しようとする最大の理由はそこにある。

ベトナム独立戦争参加日本人に関する研究は、もう一つ、矛盾に満ちた近代日本精神史を解

明するための極めて重要な手掛かりになると考えられるが、そのような純学術的作業は事実調査の一応の終了を待って行うこととしたい。

[追記]

1. ベトナム人民軍の兵制は旧日本軍のそれに酷似しているが、陸軍各級部隊の呼称と兵員構成は異なっている。人民軍の師団(大団)、中団、小団、大隊、中隊、小隊は、兵力でそれぞれ旧日本軍の師団、連隊、大隊、中隊、小隊、分隊に相当する。本報告書では後者を用いた(例えば「大隊長」を「中隊長」と記述)。

2. 以下のリストの一部を完全な形で作成することは今のところ——あるいは永久に——不可能であるが、我々の予定している第2次調査によって、日越のいかなる国家機関のリストよりも正確かつ包括的なリストを作成したい。

(イ) 独立戦争参加者リスト(略歴を含む)

(ロ) 戦病死者・行方不明者リスト(自殺・処刑者を含む)

(ハ) 靖国合祀者リスト

(ニ) 帰国者・帰国後死没者・生存者リスト

(ホ) 現地家族・遺品リスト

(ヘ) 受勲者リスト

(ト) ベトナムにおける入党者リスト

(チ) 資料リスト

(リ) 両国関係機関リスト

(ヌ) この問題に関する各国研究者のリスト(業績を含む)

3. 情報の出所(日越両国の公式史料、公刊された独立戦争体験者の回想記および私的な日記・メモ類、関係者の談話など)は余りにも膨大なので、当面は省略せざるをえない。

4. 現存する独立戦争参加者の生活と意識に関する説明は別に行う。

ベトナム日本友好協会・日本人戦士調査班資料 (1995年作成)

1. アカギ・ケンセイ(赤城健生[たけお]?)

1916年(大正5年)大阪で生まれ、36年に日本陸軍に入隊、41年に所属部隊とともに来越した。日本降伏時にベトミンに参加、ベトナム民主共和国財務省に勤めた。ベトナム名はグエン・バン・ヒエン(Nguyen Van Hien)。

彼は極めて熱心に勤務し、発足したばかりの財務省の業務向上に大いに貢献した。彼は1947年、カオバン省外ケで生まれたテイ(Tay)族の女性ノン・ティ・チュンと結婚したが、子供は生まれなかった。50年7月14日、悪性マラリアによりテュエンクアン省チャンホア県トービン村で死去。

財務省は現地住民に彼の墓の管理と補修を委託した。墓の写真は日本へ送られた。ベトナム赤十字社宛のチュン未亡人の手紙によると、ヒエン氏が死去したとき、日本人トゥアン(Thuan)氏もその場にいた。彼女は日本の慣習に従って夫の髪を少し切り取り、夫の写真1葉および日本刀1本とともに、日本に住むヒエン氏の家族のための記念品としてトゥアン氏に託した。その後トゥアン氏が不運にもベトバック(越北)で病死したため、上記遺品は日本人フオン(Phuong)に託された。

[資料]

- ① 故ヒエン氏の墓と遺族に関するテュエンクアン省行政委員会宛の労働傷痍軍人省の55年6月23日付公文書2314-TB-TV。
- ② 上記文書に対するテュエンクアン省行政委の57年10月17日付回答書0561-TB-TQ。
- ③ 故ヒエン氏に関する資料調査を求めた財務省への労働傷痍軍人省の58年4月19日付公文書323-TB-LS2。
- ④ チュン未亡人への労働傷痍軍人省の書簡。
- ⑤ テュエンクアン省行政委宛の労働傷痍軍人省の57年6月25日付公文書631-TB-LS2。
- ⑥ ベトナム赤十字社宛の労働傷痍軍人省の58年9月2日付公文書889-TB-LS2。
- ⑦ ベトナム赤十字社(?)宛のチュン未亡人の59年3月15日付書簡。

[井川注]

この人物の姓名は第38軍離隊者名簿(昭和21年4月30日)にはなく、日本で作成されたベトナム参加日本人のいかなる名簿にもないが、ベトナム人研究者ホー・ブー(Ho Vu)氏の名簿には「アカギ・ヒロシ(Nguyen Van Hien)」がある。「日本刀」は恐らく軍刀である。旧日本陸軍では将校のみが軍刀所持を許されていたから、アカギは将校であったと思われる。

「日本人トゥアン」なる人物は、日越両国で作成・公表されたベトナム参加日本人のいかなる名簿にも記載されていない。

「日本人フオン」はDRV財務省の女性職員(Ba Loc)と結婚していた高澤民也軍医(Cao Thanh Phuong)かもしれないが、高澤が死去しているうえLoc未亡人がその事実を知らないため、今のところ確認不可能である。

2. ナガシマ・ヒロシ(長嶋廣)

1918年(大正7年)福井県大野郡下穴馬村で生まれ、41年に日本軍に入隊、44年2月に所属部隊とともにベトナムに来た。45年の日本降伏ののち逃亡、ベトナム人民軍に加わった。ベトナム名はグエン・バン・ナム(Nguyen Van Nam)。

彼は極めて勇敢に戦って負傷し、治癒ののち退役して、ベトナム女性グエン・ティ・ダック(Nguyen Thi Dac)と結婚、次の6人の子供が生まれた。

- ① グエン・バン・チン(Nguyen Van Trinh)。46年生(男)。
- ② グエン・バン・ドゥック(Nguyen Van Duc)。48年生(男)。
- ③ グエン・バン・ホア(Nguyen Van Hoa)。50年生(男)。
- ④ グエン・バン・ビン(Nguyen Van Binh)。53年生(男)。
- ⑤ グエン・ティ・ミン(Nguyen Thi Minh)。56年生(女)。
- ⑥ グエン・ティ・タイ(Nguyen Thi Tai)。58年生(女)。

1960年当時、彼の一家はクアンニン省クアンイエン町ケタイン(Khe Thanh)街64番地に住んでいた。

彼は59年7月23日にベトナム永住を申請したが、60年3月11日に家族全員が日本に移住したいむね申請した。日本に帰国したか否かは不明である。

[資料]

- ① 59年7月23日付永住申請書コピー。
- ② 59年(60年の間違いと思われる)3月11日付帰国申請書コピー。

[井川注]

第38軍離隊者名簿によれば、長嶋は旧第21師団山砲兵第51連隊の伍長で、46年4月13日に北風政市大尉ら4名とともに離隊している。この連隊の離隊者は、大尉1名、中尉1名、少尉2名、准尉1名、下士官7名、兵卒7名、計19名。このうち独立戦争に参加し54年までベトナムに残留していたことが確認できる人物は、松田恒吉准尉(帰国後死亡)、長尾貞俊伍長(1990年に日本で死亡)、宮崎勇雄上等兵、行田弘上等兵と長嶋伍長の5名である。北風大尉は駒屋俊夫の『ベトナム残留記』にベトミンに誤殺されたと記されている「K大尉」と思われる。

長嶋はベトナム友の会名簿には「長島宏」とある。彼と彼の一家は第3次または第4次の帰国グループに加わり、帰国後しばらく函館市五稜郭町に住んでいたが、長嶋の死亡後「ひさの郡」(北海道?)に移住した。井川のアンケートに答えた遺族の書簡によれば、未亡人の氏名は Nguyen Thi Dao (Dac ではない)。

3. マワキ・ヨシヒロ(真脇佳廣)

1916年(大正5年)函館市の貧家に生まれ、24~37年に小学校で学んだ。37~38年には日本軍兵士であった。38~43年、錫関係の工場で職工として働いた。43年に再び工兵部隊に召集され、45年3月にベトナムに来た。

46年6月にベトナム人民軍に加わり、第36中団第56小団の副中隊長としてベトバック戦役で勇敢に戦った。ベトナム名はホー・タム(Ho Tam)。

46年、ナムディン市で第56小団の調理婦ブー・ティ・タム(Vu Thi Tam)と結婚。47年10月に負傷して退役したのち、当時バクザン省にあった軍の兵器工場に勤めた。49~50年、同省で商業を営んだ。50年9月から財務省の薬剤関係機関で働いた。この機関が51年10月に解散したのち、彼はバクザン省イエンテー県ドンラック村で医療活動に従事した。

54年10月から、彼は妻とともにナムディン市マイトー(May To)街19番地に住み、アメリカ式のランプ製造業を営んだ。子供はホー・ティ・ハー(Ho Thi Ha)という娘だけである。彼女は

50年1月、バクザン省のドンラック村で生まれた。

彼は59年9月、妻子を連れて日本へ帰った。

[資料]

- ① ホー・タム氏の自筆履歴書。
- ② ハー夫人の自筆履歴書。
- ③ タム氏の58年2月17日付帰国申請書。
- ④ 同59年1月27日付。
- ⑤ 同59年2月18日付。
- ⑥ ホー・ティ・ハーの出生証明書。
- ⑦ タム夫妻の婚姻証明書コピー。
- ⑧ タム夫妻が日本帰国後にベトナム関係当局へ送った感謝の書簡。

[井川注]

真脇という名は第38軍離隊者名簿にはない。中国からベトナム経由で移動中の部隊から離脱？

真脇は戦勝第1級徽章、栄光家族表彰状、傷病兵徽章、傷病兵表彰状を授与されている。

ベトナム友の会会員。帰国後は神戸市垂水区に居住していたが、平成3～4年に病死したといわれる。晩年は友の会とはほとんど没交渉であったらしく、1995年現在の同会名簿には住所も電話番号も記載されていない。

4. ハリキ・ヤスミ(梁木康三)

1916年(大正5年)大阪市で生まれ、33年(昭和8年)日本軍に入隊、医療部門に所属した。41年、所属部隊とともにベトナムに来た。

日本降伏ののちハドン市でベトミンに参加、45年末に人民軍に入り、ある中団の医療部に属して、多くの傷病兵を熱心に治療した。

ベトナム名はグエン・ミン・タイ(Nguyen Minh Thai)。

51年、健康を害して退役し、ホアビン省で農園経営を始めた。彼はそれ以前にベトナム女性

グエン・ティ・ハオと結婚した。夫妻の4名の子供は次の通り。

- ① グエン・ミン・ティエン(Nguyen Minh Tien)。男。46年生。
- ② グエン・ティ・タイン(Nguyen Thi Thanh)。女。49年生。
- ③ グエン・ミン・タム(Nguyen Minh Tam)。男。52年生。
- ④ グエン・ティ・バン(Nguyen Thi Vang)。女。53年生。

ハオ夫人が病気で痴呆化したため、タイ氏は現地住民の勧告によりハオ夫人の妹で1934年生まれのグエン・ティ・ミイ(Nguyen Thi My)を第2夫人として娶った。ミイ第2夫人は56年に次の男女双生児を産んだ。

- ① グエン・ティ・フオン(Nguyen Thi Phuong)。女。
- ② グエン・ミン・ズン(Nguyen Minh Dung)。男。

タイ氏一家の最後の住所はハドン市ハーチ(Ha Tri)街である。彼はそこに西洋式の診療所を開いていた。

2名の夫人と6名の子供を持ったタイ氏は、わが国を第二の祖国と考え、その社会に十分溶け込んでいて、57年7月23日に永住許可を申請した。しかし59年9月18日、諸般の事情により、両夫人と6人の子を連れて帰国したいとの熱心な申請書を現地当局に提出した。いま日本にいるかどうかは不明である。

[資料]

- ① 57年7月23日付の定住申請書コピー。
- ② 59年9月18日付の帰国申請書コピー。

[井川注]

氏名の日本読みは「ハリキ・コウゾウ」が正しいようである。

梁木は家族とともに第4次帰国グループに加わって第一夫人とその子供たちとともに帰国した。

彼はベトナム友の会に加入していたが、昭和41年に病死した。旧日本軍における所属部隊や階級は不明。彼の名は第38軍離隊者名簿に記載されていない。

1995年現在の遺族の住所は大阪府堺市野尻町。

5. ホリ・イサオ(堀伊三男)

1919年(大正8年)12月22日、石川県能美郡川北村字ドド(日本字不明)で生まれた。父は堀又二、母は堀こと。

ベトナム名はホアン・チュン(Hoang Trung)。

彼は1959年9月現在、ハノイ市のグエン・ビン・ヒエン(Nguyen Binh Hien)街26に住んでいた。

1939年に日本軍に入隊、44年にベトナムに来た。日本軍では医療部門に所属していた。日本降伏ののちベトミンに加わって人民軍に入り、医療部門で活動した。東洋医学を専門とし、森の中で薬草を採集して加工、多くの将兵を見事に治療した。

54年の平和回復ののち、彼はハノイの東洋医学系診療院に勤め、研究・治療活動を続けた。1925年生まれのベトナム女性の妻ブイ・ティ・ホア(Bui Thi Hoa)との間に5人の子供がある。

- ① ホアン・チェウ・バオ(Hoang Chieu Bao)。男。48年生。
- ② ホアン・ビエット・トアン(Hoang Viet Toan)。男。50年生。
- ③ ホアン・ティ・ゴック・ミン(Hoang Thi Ngoc Minh)。女。53年生。
- ④ ホアン・ティ・ビエット・フオン(Hoang Thi Viet Phuong)。女。55年生。
- ⑤ ホアン・トン・フイ(Hoang Ton Huy)。男。57年生。

この子らはベトナム政府の世話でそれぞれ学校に進んだ。

一家は59年7月28日、ベトナム赤十字社に永住を申請したが、同年9月8日に全員で日本への帰国を申請した。

[資料]

- ① 上記永住申請書コピー。② 上記帰国申請書コピー。

[井川注]

第38軍離隊者名簿によれば、堀は旧陸軍第21師団第83連隊の曹長で、1945年9月28日に単身離隊した。この連隊からは、少尉1名(伊藤栄)、下士官15名、兵卒13名、計29名が離隊している。このうちベトミンに参加して54年までベトナムに残留していたことの明白な者は、堀、高橋信(上等兵、45年9月14日に単身離隊、1995年現在大阪府三島郡島本町在住)、森一夫(上等兵、45年9月10日に単身離隊、大阪府在住?)、平口宗太郎(軍曹、45年11

月 26 日離隊、95 年現在金沢市在住)の 4 名。いずれも 1995 年現在、ベトナム友の会会員として存命していた。

同連隊の離脱した下士官の一人は青山正義軍曹(45 年 9 月 13 日離隊)で、彼は旧厚生省の仏印未帰還者名簿(1955 年)に記載されているところから見て、クアンガイ陸軍中学の助教官で 52 年にハイズン省で戦死した青山浩(ベトナム名 **Trinh Quang**)と同一人物である可能性があるが、2005 年現在未確認。

堀は 2004 年秋に危篤状態に陥った。その後の病状は未確認。

堀の住所は金沢市有松。

堀の三男トン・フィはハノイで美術を学び、2005 年現在ハノイで彫刻家として活動している。

6. タカザワ・タミヤ(高澤民也)

1914 年(大正 3 年)2 月 7 日、金沢市シオカチ町 1-15 で生まれた。38 年、某大学医学部を卒業、同年日本軍に入隊して軍医となり、42 年にベトナムに来た。

45 年に人民軍に加わり、抗仏戦争の 9 年間を通じて多くの戦場を回り、専門の医術を活かして傷病兵多数を治療、人民軍医療部門の発展に大いに貢献した。

ベトナム名はカオ・タイン・フオン(**Cao Thanh Phuong**) = 高成方。

ベトナム女性ルオン・ティ・ロン(**Luong Thi Lon**)と結婚し、2 人の男児と 2 人の女児を得た。ロン夫人は 59 年まで財務省の職員であった。4 児は次の通り。

- ① カオ・ミイ・トゥイ(**Cao My Thuy**)。女。日本名ミズノ。4?年 9 月 5 日生。
- ② カオ・タイン・トゥオン(**Cao Thanh Tuong**)。男。同ヨシヤ。4?年 6 月 21 日生。
- ③ カオ・アイン・トゥアン(**Cao Anh Tuan**)。男。同トシヤ。5?年 1 月 1 日生。
- ④ カオ・ミイ・チュック(**Cao My Thuc**)。女。同トシミ。5?年 2 月 20 日生。

フオン氏は 54 年末、ロン夫人と 4 人の子を残して帰国した。59 年、ロン夫人はベトナム赤十字社への書簡を通じて、同氏に家族の件について三つの解決方法を提案した。

- ① 彼女と 4 児が夫とともに、夫の故郷に住む。
- ② フオン氏に別の妻があるなら、上から 3 児が日本へ行き、末娘をロン夫人が養う。
- ③ フオン氏がどの子も受け入れなければ、同氏が養育費を負担する(ロン夫人の収入が乏しいので)。

59年2月11日、フオン氏はベトナム赤十字社に回答の書簡を寄せ、4児のうち2名を引き取るとの意志を表明したが、その後のことは不明。

[資料]

- ① 59年2月11日付のベトナム赤十字社宛フオン氏書簡。
- ② 59年7月10日付(以下判読不能)。

[井川注]

第38軍離隊者名簿によると、高澤は第21師団第62連隊(日本敗戦前後にはラオカイに駐屯)の軍医中尉で、1946年3月10日に離脱した。同連隊の離隊者は、中尉4名、少尉1名、下士官4名、通訳1名、計14名。このうちベトミンに参加したことの確認されているのは、高澤、原定喜(兵長、45年10月1日離隊、サイゴン寿会会員、藤沢市在住)、矢澤鶴次(中尉、45年10月5日離隊、ベトナム友の会会員、富山県在住、2000年前後に病死)、青山幸治(中尉、46年3月16日離隊、長野県出身)の4名。青山は51年にDRV国防省軍訓局のスタッフとなり、52年12月に自殺。

高澤はベトバック根拠地におけるDRVの医療・防疫事業の中心人物であった。第1次帰国グループに加わって帰国し、1970年代に金沢で病死。日本に妻子がいた。ベトナムの妻子とは死没まで再会できなかった。ベトバック根拠地で高澤とロン夫人の結婚を仲介し媒酌したのは、ロン夫人の上司であったDRV初代財務相レ・バン・ヒエン(Le Van Hien)である。独立戦争期におけるDRVの医療・防疫事業は財務省の管轄とされ、高澤はその中央病院に籍を置いていた。

ロン夫人(通称ロック女史=Ba Loc)はハノイ出身で、2005年現在ハノイ都心に健在。ハノイに住んでいるベトミン参加日本人の現地妻たちの世話役。子供たちは対米戦争中、差別を免れるため兵役を志願し、南の最も危険な戦場で命懸けで戦ったという。高澤の残した軍刀はレ・バン・ヒエンに貸したが、ヒエン死後の2005年まで未返却(井川はヒエンの生前それを見たことがある)。

ロン夫人は1990年代初頭、井川に「財産などは欲しくない。夫の写真だけが欲しい」と語っていたが、この願いは後年、宮崎勇雄、杉原剛両氏の努力で果たされた。高澤の日本の遺族はおおむね金沢市在住。長男は医師。長女は1990年代末からロン夫人ら高澤のベトナム現地妻子と交流している。

7. イトウ(伊藤)・マサオ

1925 年(大正 14 年)に東京市文京区駒込片町に生まれた。ベトナム名はホアン・ア・リン(Hoang A Ling)。

1930 年に両親に連れられてベトナムに来た。父は歯科医で伊藤昇(いとう・のぼる)、母は伊藤みどり。彼らはハノイのマイ・ハック・デ(Mai Hac De)街に住んでいた。

1938 年、父はハノイで病死。46年に抗仏戦争が勃発したため、彼の一家はハドン省タインオアイ(Thanh Oai)県ホアンチュン(Hoang Trung)村バンクアン(Van Quan)部落へ疎開した。リン氏は 50 年、敵支配下のハノイに潜入し、積極的に革命活動を行った。

彼の母は 45 年末から人民軍に加わっていた日本人イトウ・シズコ(Ito Sizuco)と再婚した。この義父は 46 年末、ハドンでのフランス軍との戦闘で死んだ。そのためリン氏の一家は、烈士家族としてタインオアイ県委員会から生活上の援助を受けることができた。

リン氏は 59 年、弟の伊藤マサブル(Ito Masaburu)とともに帰国を申請した。もう一人の弟の伊藤シロー(Siro)と、義父シズコの娘も帰国を申請した。しかし彼らが無事に帰国したかどうかは不明。

[資料]

- ① リン氏の故郷の地名、父母の名などの記されている紙片。
- ② 46～50 年、リン氏の一家がハドン省タインオアイ県に疎開していたことを証明するドードン(Do Dong)村行政委員会の公文書。
- ③ 59 年 8 月 20 日付の帰国申請書 2 部。
- ④ 59 年 9 月 10 日付の帰国申請書 2 部。

[井川注]

イトウ・マサオ(政雄、政夫、正男、正夫?)に該当する人名は第 38 軍離隊者名簿にはなく、従ってこの人物は日本軍による現地召集の対象にはならなかったと推測される。この人名は旧厚生省の仏印未帰還者名簿(55 年)、ベトナム友の会名簿、寿会名簿のいずれにもないので、彼と彼の一家が帰国したか否かは不明。友の会会員の伊藤久雄(いとう・ひさお)とは明らかに

別人である。

イトウ・シズコ(シズオの誤記?)なる日本軍人に比定しうる人名は、旧厚生省の未帰還者名簿、ベトナム友の会名簿、寿会名簿のいずれにもない。第 38 軍離隊者名簿では、伊藤三夫(いとう・みつお)兵長(鉄道第 10 連隊)、伊藤薫雄(いとう・つたお)上等兵(第 21 師団衛生隊)、伊藤義雄(いとう・よしお)軍曹(第 21 師団特設自動車第 36 中隊)の 3 名で、3 名ともこれ以外の名簿にはなく、各方面に問い合わせてみたが 2005 年 3 月現在確認の手掛かりはない。

8. ウツミ・シズオ(内海静男)

1919 年(大正 8 年)宮城県 Mouo 郡 Kita 村で生まれ、1937 年に日本軍に入隊した。軍医士官であった。ベトナム名グエン・ドゥック・ホン(Nguyen Duc Hong)。

45 年の八月革命に際し革命の側に参加し、同年 10 月から 52 年まで南部のビエンホアやビンツー(Binh Thu)で軍事訓練と作戦計画立案の仕事を担当し、52 年 6 月～54 年 10 月には農村で民兵隊長を勤めた。

55 年初頭、北部へ転属。彼は責任感十分な人物で、積極的に任務を果たし、政治学とベトナム語を熱心に習得した。そのため何度も通信社関係の競争戦士という称号を得て首相府によって表彰され、第 2 級戦功勲章を授与された。

対仏抗戦中に彼はベトナム女性チャン・ティ・マイ(Tran Thi Mai)と結婚し、1 人の息子を得た。息子が 6 歳になったころ、ホン氏の一家は中部南半のビントアン省ハムトアン(Ham Thuan)県ホンリエン(Hong Lien)村に住んでいた。その子は同村に残留している。

彼については奇妙な事実がある。日本政府は日本に住むホン氏の家族に、彼が 1945 年以前にバリアでの戦闘で死んだと伝え、48 年 9 月 4 日に偽の遺骨を送った。家族は同年 9 月 20 日に彼の墓をつくった。

[資料]

- ① ホン氏の 58 年 11 月 18 日付の帰国申請書。
- ② ホン氏の帰国を認めるべきだとする通信社のベトナム赤十字社宛公文書。
- ③ ホン氏の 48 年(58 年?)12 月 4 日付の帰国申請書。

[井川注]

内海静男の名はベトナム友の会の名簿にあるが、連絡先は無記載で、1990年代に井川の調べた限りでは彼と言葉を交わした会員は皆無。しかし2005年3月、本人の弟の息子内海咲木(うつみ・さきき)(宮城県桃生[ものお]郡河南[かなん]町大字北村、朝日山計仙麻[あさひやまきしま]神社宮司)の話で彼が福島県郡山市に生存していることがわかった。内海咲木の談話は要旨次の通り。

計仙麻神社の宮司であった祖父(静男の父)は早逝した。伯父(静男)が後継宮司になるはずだったが、日本敗戦後も帰国せず、生死もわからなかったので、私の父(故人)が宮司を継いだ。その後、日本政府から伯父は戦死したとの通知があり、私が石巻市役所で遺骨なるものを受け取り、先祖代々の墓地に葬った。ところが伯父は1959年ごろ単身帰国、のちに郡山市に住むことになった。ベトナムの妻子を連れて帰らなかった事情はわからない。

『日本研究』誌96年第2号に掲載されたベトナムの研究者ホー・ブー(Ho Vu)の短文「ベトナムに勲章・徽章を預けた日本人戦士たち」によると、内海は第2級戦功勲章のほか抗戦徽章と抗戦記念バッジを授与されている。

9. モトヤマ・キュウゾウ(元山久三)

1921年(大正10年)福岡県京都郡荊田町与原に生まれた。

59年までのベトナムの住所は、タイグエン省ドンヒイ(Dong Hy)県ホアチュン(Hoa Trung)村ナーダイン(Na Danh)部落。

ベトナム名はホアン・バン・ハック(Hoang Van Hac)。

1939年に日本軍に入隊、43年に所属部隊とともにベトナムに来た。45年末にベトナム人民軍に加わった。所属部隊は第72中団であった。

47年3月18日、1928年生まれのファム・ティ・グエット(Pham Thi Nguyet)と結婚した。結婚式は第72中団によって厳粛かつ楽しく催された。

彼はベトナム軍人として勇敢に戦い、優秀な功績を残した。

夫妻の子供は次の4名である。

- ① ホアン・ティ・バン(Hoang Thi Van)。女。ドンヒイ村で51年10月27日生。
- ② ホアン・ゴック・タイン(Hoang Ngoc Thanh)。男。55年7月28日生。
- ③ ホアン・ティ・ビック(Hoang Thi Bich)。女。58年3月1日生。

- ④ ホアン・バン・フオン(Hoang Van Phuong)。男。60年1月13日生。
彼は59年9月10日と同15日に家族同伴の帰国を申請した。

[資料]

- ① 59年9月15日付帰国申請書。
② ベトナム赤十字社へ送った婚姻証明書と出生証明書。
③ 長女の出生証明書。④ 長男、同。⑤ 次女、同。
⑥ 婚姻証明書の紛失証明書。⑦ 次男の出生証明書。

[井川注]

第38軍離隊者名簿によると、元山は旧第21師団(本人によれば第3飛行師団)第5飛行場中隊の一等兵で、1945年8月18日に中川政人軍曹、永家義夫上等兵ら4名とハノイ近郊のザラム(Gia Lam)飛行場から離隊した。この中隊からは、下士官8名、兵卒7名、計15名が離脱している。このうちベトミンに参加したことの確実なのは、元山、中川(熊本県天草出身)、永家(95年に鹿児島市で死去)、小木曾房次郎(軍曹、45年8月20日離隊、54～60年のいずれかの時点で帰国し、ほどなく郷里の長野県で死亡)の4名で、いずれもベトナム友の会名簿に記載されている。

元山は60年の第3次帰国グループに加わって家族同伴で帰国し、出生地と同じところに妻子とともに住んだ。夫人の日本名は房子。長男だけは妻の母のためにドンヒイ村に残した。その長男(妻子あり)は95年、井川に訪日を希望しているむねの父親宛の手紙を託し、後年訪日した。

元山は54年に第3級戦功勲章を授与されている。

10. アマカワ・ケン(天川健)

1925年(大正14年)3月27日、栃木県芳賀郡大内村に生まれた。

1959年のベトナムの住所は、クアンビン省クアンチャック(Quang Trach)県クアントウン(Quang Tung)村ラムソン(Lam Son)部落。

ベトナム名はレ・トゥン(Le Tung)。

1945年、日本軍人としてベトナムに来た。(井川挿入:軍事行動中に)道に迷っていたとき八月革命が起きたため人民軍に参加した。中部各地で極めて勇敢に戦い、多くの軍功を挙げた。

51年、フランス軍との戦闘で負傷し、片腕を失った。その後、クアントウン村に定住し、妻と共に農業を営んだ。妻はチュオン・ティ・バン(Truong Thi Van)で、夫妻には3人の子がある。

彼は対仏抗戦における功績により、ベトナム国家から第2級戦功勲章と抗戦記念徽章を授けられた。また傷病兵救護制度により国家補償を得た。

彼は61年、家族と共に日本へ帰った。

[資料]

- ① ベトナム民主共和国政府に宛てた59年7月17日付定住申請書。
- ② 日僑レ・トゥン氏の帰国に関するクエンビン省行政委の45年(井川補注:明らかに59年の誤記)7月22日付公文書1045-TK-NC。
- ③ 同60年3月21日付公文書365。
- ④ レ・トゥン氏への第2級戦功章授与に関する内務省民事室ケ(Khe)氏の証明書。
- ⑤ 60年3月27日付帰国申請書。60年11月12日付、同。
- ⑥ 61年4月2日付、同。⑦ 日本からベトナム赤十字社に送られた本人の感謝書簡。

[井川注]

天川は旧第22師団歩兵第86連隊上等兵。95年に井川が会ったとき、天川夫妻は栃木県真岡市下籠谷に健在であった。本人によれば、人民軍退役後はクエンビン省内で銃猟の達人として知られていた。ベトナム友の会会員。

彼の家からさほど遠くない栃木県下都賀郡壬生町大字安塚には、同じく独立戦争で活躍した吉田勝太郎(ベトナム友の会会員)が住んでいたが、長らく心臓を病み、96年に死没した。吉田も受勲者である。

天川に限らず、少なからぬ日本人戦士が、定住申請から程遠からぬ時期に帰国を申請している。これは家族同伴という問題にからむもののように思える。

11. マツダ・ツネキチ(松田恒吉)

1912年(明治45年)2月1日、秋田県雄勝郡湯沢町字杉谷26番地に生まれた。

59年現在のベトナムの住所は、タイグエン市チエンタン(Chien Thang)街5番地。ベトナム名はブー・ディン・ズオン(Vu Dinh Duong)。

1941年に日本軍人としてベトナムに来て、日本降伏ののちベトナム人民軍に加わった。日本軍で医療関係の任務に就いていたため、45年末に某中団の軍医となった。

彼は人民軍の医療部門で積極的に働き、傷病兵の治療で多くの功績を収めた。

退役後は妻子とともにタイグエン市に住み、54年から民間人の医療に従事した。1920年生まれの妻グエン・ティ・ヒエン(Nguyen Thi Hien)との間に6人の子がある。

① ブー・ディン・ラン(Vu Dinh Lang)。男。46年9月21日生。

② ブー・ディン・ロン(Vu Dinh Rong)。男。49年7月3日生。

③ ブー・キム・ズン(Vu Kim Dung)。男。51年5月13日生。

④ ブー・ティ・ズック(Vu Thi Duc)。女。54年8月10日生。

⑤ ブー・ディン・ザップ(Vu Dinh Giap)。男。56年8月3日生。

⑥ ブー・ディン・ガオ(Vu Dinh Gao)。男。56年(?)8月28日生。

彼は60年3月12日、家族同伴の帰国を申請した。帰国したかどうかは不明。

[資料]

① 60年3月12日付帰国申請書。

② 60年3月12日付婚姻証明書コピー。

[井川注]

松田は旧第21師団山砲兵第51連隊の准尉で、1945年9月20日に離隊。この連隊からは、長嶋廣(ながしま・ひろし)の項に記したように、大尉1名(北風政市)、中尉1名、少尉2名、准尉1名(松田)、下士官7名、兵卒7名、計19名が離脱している。このうちベトナム友の会会員は、松田、宮崎勇雄(上等兵、45年10月18日単身離脱)、行田弘(上等兵、45年9月21日離脱)、長尾貞俊(伍長、46年1月19日離脱、帰国後の90年に死去)、長嶋廣(伍長、46年4月13日に北風大尉ら4名と離脱、帰国後死去)の5名。

松田は家族と共に60年の第3次帰国グループに加わって帰国し、埼玉県所沢市上安松に住んでいたが、ほどなく病死した。

息子の一人である松田一郎は、90年代前半に日商岩井ハノイ支店長を勤め、単身帰国した日系新ベトナム人の妻子の相談相手となっていた。一郎の住所は、友の会名簿によれば父の旧住所と同じ。

12. ダイサク・シンイチ(大作信一)

1917年(大正6年)千葉県葛飾群新川村北小屋844番地に生まれた。

1960年現在のベトナムの住所はハノイ市キンマー(KimMa)街の水利省機械工場寮。ベトナム名はグエン・バン・タイン(Nguyen Van Thanh)。

19??年、日本軍人(工兵)としてベトナムに来た。のちにベトミンに加わり、46年に人民軍に入った。多くの戦役で勇敢に戦い、多大の功績を残した。平和回復ののちハノイ市キンマー街の水利省機械工場に移った。そこでも熱心に働いたので、同僚に深く敬愛されていた。

1926年生まれの妻グエン・ティ・ハイ(Nguyen Thi Hai)との間に2人の子がある。

① グエン・バン・スアン(Nguyen Van Xuan)。男。ハナム省ズイティエン(Duy Thien)県ティエンフオン(Thien Phuong)村マン・ソン・ハー(Mang Son Ha)部落で1949年4月18日生。そのころタイン氏はバクザン省イエンテー県で活動していた。

② グエン・ティ・ツー(Nguyen Thi Thu)。女。タイグエン省ドンヒイ(Dong Hy)県クアンチュン(Quang Trung)村で53年5月9日生。

タイン氏は60年3月17日、家族同伴の帰国を申請した。その願いが叶ったか否かはわからない。

[資料]

- ① 60年3月17日付帰国申請書。
- ② 息子スアンの出生証明書コピー。
- ③ 娘ツーの出生証明書コピー。
- ④ タイン氏の婚姻証明書コピー。

[井川注]

大作は旧第59航空地区司令部の雇員(軍属の一種)で、1946年2月4日に単身離隊。この部隊からは、中尉2名、下士官2名、兵卒6名、雇員1名、傭人(軍属の一種)1名、計12名が脱走している。このうちベトミンに参加したことの確認できる人物は4名。この4名のうち、

ベトナム友の会会員は大作と藤本猛省(上等兵、46年3月19日離脱)の2名、サイゴン寿会会員は藤原貫一(上等兵、46年1月13日単身離脱)と山下和市(傭人、46年3月19日に藤本上等兵らと共に離脱)の2名。

大作は第3次または第4次の帰国グループに家族と共に加わって帰国した。1996年に病死。遺族連絡先は千葉県流山市加。

大作の息子スアン(娘ツウ?)は、大作と同時に家族とともに帰国した青森県出身の肥後寛作の娘(息子?)と結婚した。肥後は旧第21師団司令部の傭人で、45年8月21日に別の傭人1名と共に離隊してベトナムに参加、帰国後に死亡した。この司令部からは、少佐1名を含む12名が脱走している。このうちベトナム友の会会員は肥後と丹尾久二(兵長、45年10月1日離隊)の2名で、丹尾は1997年11月に死亡。肥後の遺族連絡先は流山市加。井川は95年に大作に電話でインタビューを求めた。彼はなぜか「ベトナムのことについては誰にも一切話したくない。問い合わせの電話も拒否する」と答えた。

13. クマガイ・ジロウ(熊谷次郎)

1919年(大正8年)宮城県気仙沼市東八幡前200番地に生まれた。

ベトナム名はグエン・バン・ナム(Nguyen Van Nam)。

59年末までのベトナムの住所は、タインホア省ヌイマツト(Nui Mat)の鉄道局資材部鋸工場。

1941年に日本軍に入隊、??年(判読不能)にベトナムに来た。日本降伏に際しベトナムに加わり、45年末にベトナム人民軍に入った。勇敢に戦い、多くの軍功を収めた。54年末、鉄道局資材部の鋸工場に移り、日本での職業技術を生かして修理課長となった。

1925年生まれの子チャン・ティ・フオン(Tran Thi Phuong)の故郷は、クアンナム省ホアバン(Hoa Vang)県ホアニャン(Hoa Nhan)村。夫妻には男3人、女2人、計5人の子がある。

① グエン・ティ・クック(Nguyen Thi Cuc)。女。クアンナム省ホアバン県ホアニャン村で47年生。

② グエン・バン・クー(Nguyen Van Cu)。男。同、52年3月15日生。

③ グエン・バン・カム(Nguyen Van Cam)。男。同、54年6月13日生。

④ グエン・バン・ホン(Nguyen Van Hong)。男。ハノイで57年10月26日生。

⑤ グエン・ティ・ハー(Nguyen Thi Ha)。女。タインホア省で60年1月1日生。

ナム氏は 59 年 12 月 24 日、家族同伴の帰国を申請した。

[資料]

- ① ナム氏の退職に関する鉄道局資材部の 60 年 3 月 24 日付決定文書 02404 号。
- ② ナム氏への補助金支払いに関する 60 年 3 月 29 日付公文書 025-NS-CVL。
- ③ 59 年 12 月 24 日付帰国申請書。④ 59 年 10 月 26 日付、同。
- ⑤ ナム夫妻の婚姻証明書コピー。⑥ 5 人の子の出生証明書。

[井川注]

第 5 飛行師団第 18 飛行場中隊の兵長。1945 年 9 月 19 日、タインホアで離隊。この中隊からは、下士官・兵計 6 名が離脱している。このうち渡辺鶴亀(兵長、高知県吾川郡西分村出身、1920 年生、45 年 10 月 8 日離隊、95 年現在の住所不明)、中野功(上等兵、岩手県宮古市出身、1921 年生、45 年 10 月 8 日離隊、95 年現在の住所は故郷と同じ宮古市、新氏名は立花功)、井村阿津麿(一等兵、45 年 9 月 25 日離隊、95 年現在佐世保市に健在)の 3 名はベトナム参加が確認されており、いずれもベトナム友の会会員である。

熊谷は 60 年に家族と共に帰国したが、97 年に病死した。生前の住所は、大阪府富田林市大伴府宮住宅→富田林市楠町)。遺族の住所もこれと同じと思われる。

14. ツチタニ・イサム(槌谷勇)

1921 年(大正 10 年)1 月 9 日、徳島県海部郡日和佐町に生まれた。ベトナム名はグエン・バン・ドン(Nguyen Van Dong)。

父は建築家のトミジ、母は専業主婦のコエツ(Koetsu)。

知識人の家庭に生まれたので、彼は大学に進学、気象水文科を卒業した。

1944 年に日本軍人としてベトナムに来た。45 年にベトナムに参加、人民軍に入り、勇敢に戦った。また新兵訓練にも尽力した。54 年に退役、気象水文局に勤め、天気予報部長になった。彼は気象水文の分野で大いに貢献し、ベトナム政府から労働功労勲章を贈られた。

妻は 1922 年生まれのキェウ・ティ・ラン(Kieu Thi Lang)で、彼女の故郷はビンディン省フーカット(Phu Cat)県カットソン(Cat Son)村タックバン(Thach Ban)部落である。夫妻の一人娘

グエン・ティ・スアン・ハー (Nguyen Thi Xuan Ha) は、56 年 10 月 11 日にハノイで生まれた。
彼は 58 年 5 月 8 日に帰国を申請した。

[資料]

- ① 58 年 5 月 8 日付帰国申請書。② 59 年 2 月 15 日付、同。
- ③ 婚姻証明書原本。④ スアン・ハーの出生証明書。

[井川注]

植谷は旧第 3 航空軍第 3 気連(司 11053 部隊、気象連隊?)の軍曹で、1945 年 8 月 31 日にサイゴン近郊で離隊した。出身地は徳島県海部郡日和佐町大字奥河内字本村 75。父はミジではなく富蔵(とみぞう)。

60 年前後に家族と共に帰国。90 年代の住所は東京都足立区島根。友好商社の睦(むつみ)商事に勤めたが、のちに独立し、サイゴンに滞在することが多かった。ベトナム友の会会員。

表彰歴: 第 2 級労働功労勲章、第 2 級労働功労表彰状、抗戦記念勲章、抗戦徽章、愛国競争徽章、レーニン徽章、第 3 級戦勝表彰状、労働総同盟表彰状、第 5 連区表彰状、气象台表彰状(証明書付)。

15. ナカムラ・イチタロウ(中村市太郎)

1921 年(大正 10 年)新潟県直江津市に生まれた。父は中村 Nigi。

45 年に日本軍に入隊、同 8 月にベトナムに来た。日本敗戦後、彼は進んでベトナム革命政府に身を投じ、抗仏戦争に一切の力を捧げた。戦友たちから贈られたベトナム名はチャン・ホア (Tran Hoa)。

彼は 52 年に健康を害し、ビンディン省で農業に転じ、同省フーミー (Phu My) 県ミロック (My Loc) 村で 1931 年生まれのスオン・ティ・タック (Duong Thi Thach) と結婚した。夫妻には男女 2 人の子がある。

54 年の人民軍北部集結に際し、彼も家族と共にハドン省ダンフオン (Dang Phuong) 県タンラップ (Tan Lap) 村ハーホイ (Ha Hoi) 部落に移住した。

2 人の子は次の通り。

① チャン・トアン(Tran Thuan)。男。54年3月10日生。彼は生年月日から推してビンディン省で生まれたと思われるが、父母が北部移住のとき出生証明書を紛失、新住所で出生証明書の再発行を請求したため、出生地はハドン省ドンフオン県タンラップ村となっている。

② チャン・ティ・フォン(Tran Thi Huong)。女。ハドン省タンラップ村で58年7月17日生。彼は58年4月26日、家族同伴の帰国を申請した。

[資料]

① ハドン省ダンフオン県行政委の57年5月2日付身分証明書。

② 58年4月26日付帰国申請書。③ 58年5月27日付、同。

④ 59年2月13日付、同。

⑤ ブー・ディン・トン(Vu Dinh Ton)医師宛の本人の手紙(日付不明)。

⑥ 婚姻証明書コピー。⑦ 2人の子の出生証明書コピー。

[井川注]

中村は中国からタイへ移動中に日本敗戦の日を迎えた旧第22師団歩兵第86連隊の上等兵で、46年8月21日にゲアン省都ビン(Vin)で離隊した。旧厚生省の未帰還者名簿(1955年)によれば、出身地は新潟県高田市。父は市司。

60年前後に家族と共に帰国。ベトナム友の会会員。90年代の住所は新潟県上越市五智。

54年の人民軍北部集結とは、同年のインドシナ停戦協定(ジュネーブ協定)によりフランス軍が北緯17度線(暫定軍事境界線)の南、ベトミン軍が同線の北へ集結したことをいう。

96年の井川の電話による問い合わせに回答を拒んだ。理由不明。

16. ナカノ・イサオ(中野功)

1921年(大正10年)岩手県宮古市Akiで生まれた。母は中野あきよ。

1944年にベトナムに来た。日本降伏に際し進んで革命政府に身を投じ、45年末に人民軍に参加、勇敢に戦い、多くの戦功を立てた。

ベトナム名はグエン・バン・ロイ(Nguyen Van Loi=阮文利)。

戦闘で重傷を負い、第2種傷兵としてバクニン省の傷病兵療養所(単位A12)に収容された。

彼は結婚せず、58年5月20日に帰国を申請した。

[資料]

傷病兵療養所長とバクニン省傷痍軍人局が証明した58年5月20日付帰国申請書。

[井川注]

中野は旧第21師団第18飛行場中隊の上等兵で、1945年10月8日(旧厚生省の未帰還者名簿によれば8月16日)に渡辺鶴亀兵長とともにタインホアで離隊。同じ中隊の熊谷次郎兵長は9月19日、井村阿津麿一等兵は9月29日に、それぞれ離隊している。渡辺の生死は不明。熊谷は97年に死去。98年現在、井村(佐世保市在住)は健在。

中野は帰国後、立花と改姓したらしく、ベトナム友の会名簿には立花功と記載されている。95年現在の住所は岩手県宮古市大通。

中野は第1級戦勝勲章、抗戦記念勲章、傷痍軍人徽章を授与されている。

17. Yoshi……(判読不能)＝武田与四郎(たけだ・としろう)

ベトナム名はグエン・バン・フオック(Nguyen Van Phuoc)。秋田県雄勝郡羽後町中村上仙道167番地。生年月日不詳。

両親は死没。兄2人、弟妹各1人。

1944年に日本軍に入隊、45年初めにベトナムに来た。日本降伏に際し進んでベトナム革命政府に協力、45年末に人民軍に参加した。勇敢に戦い、多くの戦功を立てた。ベトナム政府は次の勲章を与えた。

① 第3級戦勝勲章、② 第3級戦功勲章、③ 抗戦記念勲章

平和回復ののち、彼はハイフオンの水産物缶詰工場に勤め、革命戦士の精神で熱心に働いた。彼はベトナムを祖国と同様に考えていた。

57年9月16日、彼は帰国を申請した。

[資料]

帰国申請書。

[井川注]

Yoshi のつく姓名は、ベトナム友の会名簿によれば、真田義光、真脇佳廣、武田与四郎、田中吉太郎、小森由男、吉田勝太郎、永家義夫、清水義春、吉田民夫の9人。このうちハイフオンの缶詰工場で働いたとの記録のあるのは武田と吉田民夫の2名であるが、吉田民夫はこの越日友好協会の資料に別に記載されているので該当しない。ベトナム名や出身地から推して、この日本人戦士は武田であると断定してよい。

武田は「939 空」(第 939 空輸部隊?)インドシナ派遣支隊の二等整備曹長で、1945 年 9 月 10 日に離隊。第 38 軍離隊者名簿に彼の氏名がないのは、所属部隊が第 38 軍の隷下になかったためであろう。1922 年(大正 11 年)生まれ。実家は秋田県雄勝郡仙道村上仙道字中村 176。ハイフオンの缶詰工場に勤めた日本人には、54 年に南から北に集結したベトミン部隊の元隊員が多かったから、武田も南部(恐らくビエンホア)でベトミンに加わり、中部以南で戦っていたと思われる。

ベトナムにおける妻子の有無、帰国後の住所、職歴、生死は不詳。某氏によれば、榎谷勇が知っているかもしれない。

18. ヨシダ・タミオ(吉田民夫)

生年月日不詳。故郷は高知県高岡郡仁淀村川渡。

父は吉田昌幸、母は吉田コフジ。姉 1 人、妹 2 人、弟 2 人。

ベトナム名はファン・ティン・ボー(Phan Tinh Bo=潘進歩)。

1944 年にベトナムに来た。日本降伏に際し南部の革命政権に協力し、勇敢に戦って多くの戦功を立てた。ベトナム国家は第 3 級戦勝勲章と第 3 級戦功勲章を授与した。54 年の和平による軍の北部集結に伴って彼も北部へ移動し、ハイフオンの水産物缶詰工場に勤めた。彼はここでも積極的に働き、多くの功績を挙げたため、ベトナム国家は第 3 級労働功勲章を授与した。

彼は 57 年 9 月 16 日に帰国を申請した。

[資料]

57年9月16日付帰国申請書。

[井川注]

吉田は1919年(大正8年)11月18日生まれ。ビルマ戦線からカンボジアへ移駐した旧第55師団工兵第55連隊の兵長で、1945年8月30日にカンボジアのロメアス(クラチエ近傍?)で離隊し、その地域で活動していたベトミンに加わってベトナムに移ったと思われる。

ベトナム友の会の名簿によると、帰国後の住所は大阪府河内長野市汐の宮。

95年の井川のアンケート調査に無回答。ベトナムにおける妻子の有無、帰国後の職歴、生死などは不明。

19. テルヤ・マサイチ(照屋政一)

1921年(大正10年)沖縄県那覇市松山町120・2に生まれた。

ベトナム名はグエン・バン・チュン(Nguyen Van Trung)。

1944年にベトナムに来た。日本降伏ののち進んで革命に協力、45年末に人民軍に参加して勇敢に戦い、ベトナム人兵士とともに様々な困難に耐えた。

和平達成後のベトミン軍の北部集結により彼も北部へ移り、ハイフオンの水産物缶詰工場の漁業部に勤めた。彼はいつも積極的に働き、周辺の人々を助けて立派に任務を果たした。

1958年4月26日、彼は帰国を申請した。

[資料]

① 58年4月26日付帰国申請書。② 58年5月20日付帰国申請書。

[井川注]

照屋政一という氏名は、いかなる残留者・離隊者名簿にもないが、南方総軍、第2師団、第55師団、第22師団、第5飛行師団、第3船舶輸送部隊などベトナム南部・カンボジアに駐留もしくは通過中のいずれかの部隊にいたことは確実。日本政府機関の公式記録に出ていないのは、沖縄が敗戦直後から米軍の排他的統治下に置かれていたためと思われる。

ベトナムに参加していた石田松雄(故人)の回想記『ベトナム残留日本人』には、1948年または49年にベトナム中部のボンソンで起きた強盗事件に照屋という日本人が連座し、DRVの現地司法機関により禁固25年の判決を受けたむねの記述がある。ほかにも同様の証言があること、またベトナム残留日本人に関する証言には照屋なる人物が1名しか出てこないことから考えて、この照屋が照屋政一である可能性は極めて大きい。複数の証言者によると、彼は何らかの理由(共犯者ではなかった、首謀者に騙された等々)により短期間で釈放され、ベトナムの戦列に戻った。

彼は第3次または第4次帰国グループに加わり、ハイフォンで日本の貨物船に乗った。その船は台風を避けて那覇港外に仮泊したが、港には日章旗はなく、星条旗だけが翻っていた。照屋はその光景に非常なショックを受けた様子で、出港の翌夜、甲板で縊死した(別説では海中へ投身自殺した)という複数の証言がある。

20. ユミノ・トシオ

1924年(大正13年)福島県須賀川市和田道南37番地に生まれた。

43年、日本軍に入隊し、44年にベトナムに来た。45年にベトナム革命に共鳴、同年末に人民軍に加わった。勇敢に戦って多くの戦功を残した。

優しい性格で、それゆえ戦友たちは彼にグエン・バン・ヒエン(Nguyen Van Hien)というベトナム名を贈った。ヒエンは「優しい」という意味である。

1954年はじめ、彼はある戦闘で重傷を負い、平和回復後バクニンの傷病兵療養所に收容され、その後ソントイ省トンティエン(Tung Thien)県スアンソン(Xuan Son)村の東洋医学系病院で療養した。

ベトナム国家は彼に第3級戦勝勲章と抗戦記念勲章を贈った。

彼はハイフォンの水産物缶詰工場で働き、競争戦士名誉章を受けた。

彼は日本へ帰国した。

[資料]

58年5月27日付帰国申請書。

[井川注]

ユミノは郷里の地名などから推して、明らかに福島県須賀川市東3-2 出身の弓野利茂(としげ)である。彼は旧第3 航空軍第22 野戦航空修理廠(サイゴン駐留)の二等兵で、1945 年8 月21 日に離隊し、やがてベトナムに参加した。南部もしくは中部南半で戦ったのち、54 年初頭にディエンビエンフー決戦準備のため北部へ移ったか、もしくは停戦後にベトナム軍の北緯17 度線以北への集結に伴って所属部隊とともに北へ移動したと思われる。どこの戦闘で重傷を負ったかは不明。ディエンビエンフー決戦に関連した戦闘であるとするれば、この決戦に日本人が全く参加しなかったという定説には若干の修正が必要であろう。

ベトナムにおける妻子の有無、帰国後の住所、職歴、家族構成その他は一切不詳。

21. ヤマザキ・ゼンサク(山崎善作)

1923 年(大正12 年)静岡県富士郡Tayonou 村に生まれた。

家族の身分は労働者。教育水準は中卒。ベトナム名はチャン・ハー(Tran Ha)。父は鉄道員、母はミカン栽培農民であった。

6 歳から15 歳まで学校教育を受けた。15~18 歳のとき、東京の某機械工場の冶金部門で働きながら夜間学校で中卒資格を得た。18~20 歳のときは熊谷の空軍学校で学び、20~23 歳のとき日本軍人として東南アジアを転戦した。

46 年1 月1 日から2 月まで、ベトナム人民軍に属して南の第7 戦区で戦った。46 年3 月、南部から北部へ行く国会議員を護衛した。

46 年4 月~49 年11 月、人民軍の軍事訓練を担当しつつ、テュエンクアン省タイグエン市の某独立中団(E112)でフランス軍との戦闘に従事した。

50 年1 月~51 年6 月、人民軍空軍研究委員会の某班長。

51 年6 月~54 年2 月、参謀本部軍訓局スタッフ。

54 年3~11 月、西北軍区司令部所属第539 小団第359 大隊の副大隊長。

54 年11 月~55 年2 月、ベトナム平和防衛委員会に勤務。

55 年3~12 月、帰国のため待機。

56 年1 月~58 年5 月、交通局第31 工事に勤務。

彼は戦場では勇敢、労働では創意に富み、いずれの局面でも積極的に貢献した。それゆ

え何度も賞賛され、受章した。

47年のソンロー(Song Lo)戦役では2回も負傷しながら戦い続け、ベトナム国防省にその功績を認められて賞金を受けた。

52年、参謀本部で競争戦士の称号を得た。

57年、タイグエン省におけるザバイ(Gia Bay)橋の建設で多くの創意を示し、交通局によって表彰された。彼はフートー(Phu Tho)省ラムタオ(Lam Thao)県バンルン(Van Lung)村のグエン・ティ・マイ(Nguyen Thi Mai)と結婚、3人の子を得た。彼は58年4月26日に帰国を申請した。

[資料]

- ① 本人の履歴書。② 58年4月26日付帰国申請書。
- ③ 帰国に関する交通局工事部長宛の58年4月26日付申請書。
- ④ 交通局人事部宛58年5月20日付、同。
- ⑤ 交通局工事部の58年5月24日付公文書2644。

[井川注]

旧厚生省の未帰還者名簿によれば、山崎の出身地は静岡県庵原郡蒲原町蒲原 536。生年月日は1923年(大正12年)12月8日。彼は旧第5飛行師団第81戦隊の軍曹で、ビエンホアまたはサイゴンで離隊したらしい。

54年3～11月といえばディエンビエンフー決戦の時期である。その時期に西北軍区の野戦部隊で指揮官類似の地位にあったということは、彼が何らかの形でこの決戦に深く関与していたことを示唆するものかもしれない。

ベトナム友の会名簿には山崎善作という氏名はなく、大河善作という氏名がある。大河という人物の住所は「静岡県沼津市(移転)」とあるだけで、95年現在の住所は不明。山崎と同一人物と思われるが、軍訓局スタッフまで勤めた人物であるにもかかわらず、ほかの帰国者との間に交流がなく、帰国後のこと一切がわからないのは不思議である。2005年現在、生死不明。妻子同伴で帰国したか否かも不明。

[井川付記]

この越日友好協会の資料に記されている日本人戦士21名は、ベトナム独立戦争に加わった日本人数百人のごく一部にすぎず、しかもそのほとんど全員は1960年前後に帰国した人々である。それ以前の帰国者(第1次帰国グループ)、南部残留者(寿会会員など)、あるいは戦死者に関しては、このような詳細な記録はないが、これについては次のような事情が考えられよう。

1945～54年にはベトナム全土が戦乱状態にあり、南部ではフランス軍とサイゴン傀儡政権(ベトナム国政府)が軍事的に優勢を保っていたため、DRV政府とベトミン軍には個々の日本人戦士の活動を調査・記録するような余裕はなかった。それが可能になったのは54年の停戦後であり、しかもそれはDRV政府が排他的統治権を行使できるようになった北緯17度線以北に限られていた。

ベトミンが社会革命を明瞭に志向し始めたのは1950年代初頭であり、それは抗仏戦後の55年に本格化した。同年の土地改革(地主・富農一掃)やブルジョワ廃絶運動は、ただちに各地で住民の反発を受け、ホー・チ・ミン主席の自己批判やチュオン・チン労働党書記長の退任をもたらしたが、こういった混乱も独立戦争参加外国人の事跡に関する調査・記録事業を甚だしく妨げたとと思われる。

米国がフランスに続いてサイゴンに反共親米政権を擁立した北緯17度線以南では、停戦以降もDRV政府機関による調査・記録は不可能であった。50年代末からは同地域全体が騒乱状態に陥り、第2次インドシナ戦争(ベトナム戦争)につながっていった。

敗戦時の在仏領インドシナ日本軍諸部隊

1945年8月15日現在、①仏領インドシナ連邦のベトナム、カンボジア、ラオスに駐留していた諸部隊、②同地域に分遣されていた諸部隊、または③同地域を通過中であった諸部隊のうち、単数または複数の離隊者のいたことの確実とされる部隊。駐留部隊はダラット、ハノイ、サイゴン、フエ、プノンペンを司令部の最終所在地とする部隊で、その他は分遣もしくは通過中であった部隊である。確認根拠は1955年現在の『仏印未帰還者名簿』(旧厚生省作成)など。

南方軍(南方総軍)＝「威」部隊(東南アジア展開の全日本陸軍を統括、司令部最終所在地:ダラット)

- 司令部部隊(威 1160)
- 南方航空輸送部(威 9326)
- 南方通信司令部(威 10316)
- 独立自動車第21大隊(威 17656)

第38軍＝「信」兵团(仏印駐留の全陸軍部隊を統括、司令部所在地:ハノイ)司令部部隊(信 7950)

- 第1憲兵隊
- 第5通信隊(信 15923)
- 南方航空路部(信 15913)
- 第2陸軍病院(信 6092)
- 第4陸軍病院(信 10307)
- 独立自動車第281中隊(信 7108)
- 独立自動車第34中隊(信 10478)
- 特設自動車第36中隊(信 15805)
- 特設自動車第40中隊(信 15809)
- 第38軍野戦兵器廠(信 17012)
- 第38軍野戦自動車廠(信 17013)
- 第38軍野戦貨物廠(信 17014)

第 38 軍兵站病馬廠(信 17015)
第 66 碇泊場司令部(信 1977)
第 2 野戦船舶廠第 8 支廠(信 2949)
独立野戦高射砲第 62 中隊特設自動車第 39 中隊(信 15808)
鉄道第 7 連隊(信・義・森 2143)
第 221 野戦郵便所(信 7853)
第 149 兵站病院(信 17010)
患者輸送第 96 小隊(信 17021)

第 21 師団＝「討」兵団(ラオス北半を含む仏印北部を管轄、司令部所在地:ハノイ)

司令部部隊(討 4231)
歩兵第 62 連隊(討 4234)
歩兵第 82 連隊(討 4235)
歩兵第 83 連隊(討 4236)
山砲兵第 51 連隊(討 4237)
工兵第 21 連隊(討 4238)
第 21 師団通信隊(討 4239)
輜重兵第 21 連隊(討 4240)
+ 臨設第 19・20 自動車隊
+ 兵站自動車第 186 中隊
+ 海上輸送第 7 大隊第 1 中隊
兵器勤務隊(討 4241)
第 21 師団衛生隊(討 4242)
第 1 野戦病院(討 4243)
第 2 野戦病院(討 4244)
病馬廠(討 4245)
防疫給水部(討 4246)

第 34 独立混成旅団＝「育」兵団(ラオス南部を含む仏印中部を管轄、司令部所在地:フエ)

司令部部隊(育 7820)

歩兵第 189 大隊(育 7823)
歩兵第 190 大隊(育 7824)
歩兵第 672 大隊(育 17017)
歩兵第 673 大隊(育 17018)
旅団砲兵隊(育 7825)
旅団工兵隊(育 7826)
旅団通信隊(育 7827)
旅団患者療養班
第 1 憲兵隊分遣隊
第 229 野戦郵便所

第 2 師団＝「勇」兵団(カンボジアを含む仏印南部を管轄、司令部所在地:サイゴン)

司令部部隊(勇 1339)
独立歩兵大隊(勇 1300)
歩兵第 4 連隊(勇 1301)
歩兵第 16 連隊(勇 1302)
歩兵第 29 連隊(勇 1303)
搜索第 2 連隊(勇 1305)
野砲兵第 2 連隊(勇 1307)
工兵第 2 連隊(勇 1308)
通信隊(勇 1309)
輜重兵第 2 連隊(勇 1310)
兵器勤務隊(勇 1311)
衛生隊(勇 1312)
第 1 野戦病院(勇 1313)
第 2 野戦病院(勇 1314)
第 4 野戦病院(勇 1315)
病馬廠(勇 1317)
防疫給水部(勇 1318)

第55師団＝「壮」兵団（「明号作戦」のため1944～45年にビルマ戦線からカンボジアへ移駐、司令部所在地：プノンペン）

司令部部隊（壮 8400）

歩兵第143連隊（壮 8416）

山砲兵第55連隊（壮 8420）

工兵第55連隊（壮 8421）

第22師団＝「原」兵団（中国からタイへベトナム経由移動中に敗戦、司令部最終所在地：バンコク）

司令部部隊（原 7930）

山砲兵第52連隊（原 7932）

工兵第22連隊（原 7933）

歩兵第84連隊（原 7934）

歩兵第85連隊（原 7935）

歩兵第86連隊（原 7936）

通信隊（原 7937）

輜重兵第22連隊（原 7938）

野戦病院（原 7939）

病馬廠（原 7940）

兵器勤務隊（原 7941）

第37師団＝「冬」兵団（同上）

司令部部隊（冬 3541）

歩兵第225連隊（冬 3543）

歩兵第226連隊（冬 3544）

歩兵第227連隊（冬 3545）

山砲兵第37連隊（冬 3546）

第5飛行師団＝「高」兵団（司令部最終所在地：タイ）

司令部部隊（高 9638）

第81戦隊（高 2380）

第 20 高射砲連隊第 23 飛行場大隊(高 3505)

同第 15 飛行場大隊(高 9921)

同第 52 飛行場大隊(高 9614)

同第 81 飛行場大隊(高 9646)

同第 94 飛行場大隊(高 9130)

第 18 飛行場中隊(高 9337)

陸上勤務第 68 中隊(高 3306)

陸上勤務第 80 中隊(高 3030)

第 2 航空情報隊(高 9617)

独立自動車第 280 中隊

第 3 航空軍＝「司」兵団(司令部最終所在地:シンガポール)

司令部部隊(司 9313)

第 25 地区部隊(司 11079)

第 59 地区部隊(司 11100)

第 19 野戦航空修理廠(司 9324)

第 22 野戦航空修理廠(司 11073)

第 13 野戦航空修理廠(司 11075)

第 179 飛行場大隊(司 16648)

第 5 飛行場中隊(司 9931)

第 3 気象連隊(司 11053)

第 4 師団＝「淀」兵団(司令部最終所在地:タイ)

工兵第 4 連隊(淀 4079)

第 3 船舶輸送部隊＝「暁」部隊(司令部所在地:呉)

司令部仏印支部(暁 2944)

第 66 碇泊場司令部(暁 19778)

第 2 野戦船舶廠(暁 2949)

司令部ジャワ支部分遣隊(仏印支部隷下)

昭南運輸部分遣隊

昭南船舶救難本部分遣隊

その他の陸軍部隊

第7方面軍野戦高射砲第94大隊(岡 1957)

第7方面軍野戦貨物廠(岡 10356)

ビルマ方面軍鉄道第9連隊(森 5805)

ビルマ方面軍野戦兵器廠(森 10357)

ビルマ方面軍第2通信隊(森 15918)

南方軍野戦鉄道隊司令部(義 15801)

同鉄道第10連隊(義 2145)

第25軍憲兵隊

第45教育飛行隊(昭 11082、司令部所在地:シンガポール)

海軍

第10艦隊第11特別根拠地隊

第1特別陸戦隊(司令部所在地:舞鶴)

グエン・テ・グエン(Nguyen The Nguyen)人民軍陸軍大佐のスピーチ原稿

抗仏戦争における日本人朋友

ベトナムの歴史はわが民族に対する日本帝国主義の犯罪を記録していますが、同時に我々人民はベトナム民族の友としてフランス植民地(であったベトナムの独立)の戦争に貴い貢献をした日本人たちのことを忘れはしません。

1945年の八月革命以前、(すでに)ベトミンと連絡を取っていた進歩的日本人が数人いました。

日本が連合軍への無条件降伏を宣言したのち、ベトミン指導部は全国民に政権獲得のための総決起を呼びかけました。

ベトミンは、日本軍がもはや傀儡政権[注 1]の維持を必要としなくなったことを知っていたので、日本軍を攻撃しないで、ベトナム人民の政権獲得闘争に干渉しないよう、彼らと交渉すべきであると主張しました。決起した全国民の総力を前にして、日本軍司令部は譲歩せざるをえませんでした。交渉は好結果をもたらし、(ベトミンの)政権獲得は大きな流血事件もなくスムーズに進行しました。

注 1: 日本軍が 1945 年 3 月の「明号作戦」ののち擁立したチャン・チョン・キム内閣。

八月革命成功の約 1 カ月後から、ベトナム民族は自国を統治する権利を奪還すべく、フランス植民地主義者の侵略に対する抗戦を続けるほかはありませんでした。

我々は幾千万の困難に直面しました。武装勢力は極めて勇敢でしたが、(その軍事能力は)まだ幼稚で、武器も幹部も経験も足りませんでした。バック・ホー[注 2]が語ったように、すべてが不足していたのです。

注 2: ホー・チ・ミン主席。「我々は帝国主義と資本主義による包囲の中で戦う」

そのような状況の中で、多くの日本人がベトナム革命に参加しました。その参加は1名ずつ、あ

るいは 2～3 名ずつというもので、部隊丸ごとの参加はありませんでしたが、(彼らの姿は)ほとんどすべての省のあらゆる場所で見られました。

かつてのフランス軍の武器[注 3]を提供してくれた人もいたし、海南島から銃を運んできてくれた人もいました。

注 3: 日本日本軍が「明号作戦」で仏印軍から押収した武器。

日本帝国主義に対するベトナムの闘争を支援するために最初にベトバック(越北)にパラシュートで武器を投下してくれたのはアメリカ人ですが、フランス植民地主義侵略者たちを打ち破るためのベトナム革命において最初に武器を提供してくれたのは日本人でした。それは極めて貴重なことでした。ことわざに「飢えたときの(食物の)一口は満腹したときの一包みに勝る」とあるように、ずっと貴かったのは軍事幹部養成・戦闘技術普及という我々の事業を助けてくれた数々の日本人です。

我々は、日本という国が、明治維新から独自の軍事思想体系を築き、独自の軍事技術を蓄積していた国であると認識しています。

日本人は人海戦術を使わず、(かといって)完全に武器に依存するわけでもありませんでした。日本人は計略の使い方や(戦場において)精神をいかに有効に発揮させるかを心得ていて、効率的に勝利する方法を知っていました。Doi Ma 海峡での海戦、Nam Tham Duong(Phung Thien)戦、Lu Thuan(Po-Ac tuya)戦、Tran Chau 港戦などがそれを証明しています[注 4]。日本人が 1945 年 3 月 9 日、一夜にしてインドシナにおけるフランスの全植民地統治機構を転覆させたことを、我々は直接見証しています。

注 4: 日露戦争における日本海海戦、奉天会戦、旅順攻略戦と、日本の対米英戦争における開戦劈頭の真珠湾攻撃のことと思われる。

ベトナム革命に参加した多くの日本人は、あまたのベトナム人教官のかたわらで軍事学校での教育に携わりました。彼らは日本の戦闘経験(で得た教訓)を(ベトナムに)普及させ、カリキュラムやプログラムの作成、教育方法の構築などに一定の貢献をし、いいかえれば革命初期の数年間においてベトナムの軍事幹部集団の育成に一定の貢献を果たしたのです。現在の(わが国の)佐官・将官級の現役・退役軍事幹部は日本人教官たちから何らかの教えを受けていま

す。

抗仏戦争中のベトナム(人民軍)の参謀本部には、日本人の軍事参議官グループがありました。参謀本部はこのグループに、武装勢力建設や作戦の問題に関する研究を委任しました。このグループが毎月、研究テーマそれぞれについて定期的に発表するのを、参謀総長のみならず総司令官も一緒に聴いていました。

我々はフランス、日本、中国、ロシアなどの軍事経験を適宜選択的に摂取しましたが、日本の経験の多くは我々(の必要)と噛み合うものでした。フランスや日本のもののみならず、ソ連や中国のものでも、ベトナムに適応しないものならば、今後も摂取することはありません。なぜなら戦場は(軍事)理論の実験場であると同時に、幹部と一般兵士の骨肉(を形成する場)であって、(理論の)機械的適用は避けなければならないのです[注5]。

注 5: 少なくとも抗仏戦争前半期には日本軍の組織、知識、技術がベトミン武装勢力にとって最も有効であったこと、また人民軍が後年、中ソ両国軍のそれらを受入れなかったのではないことを示唆しようとした発言と思われる。

中部、南部、北部の全地方で戦闘に参加した日本人の中には、中隊長を勤めた人もいるし、大隊幹部や小団幹部、また偵察大隊長を勤めた人もいました[注 6]。彼らは勇敢に戦いました。敵基地の突破や野戦で指揮をとった人もいました。野戦で犠牲になった人もいて、ベトナム軍民は彼らを自国の烈士と同様に丁重に葬りました。

注 6: 旧日本軍の部隊編成に当てはめれば、中隊長は小隊長、大隊幹部と小団幹部は中隊幹部と大隊幹部。

このほか、医療や文化の分野での活動に参加した日本人もいます。

とりわけ印象的だったのは、ベトナム革命に参加した日本人がベトナムの軍民と同じ困苦に耐え、民衆に溶け込み、ベトナム語に熟達し、ベトナム名を持ち、ベトナム女性と結婚し、日越混血児をもうけていたということです。ここで、抗仏戦争参加日本人のうち、私の最もよく知っている友人2名のことをお話したいと思います。それは中原光信氏と岩井古四郎氏です。

中原光信氏のベトナム名はグエン・ミン・ゴック(Nguyen Minh Ngoc)です。ベトミンは1945年7月から彼と連絡を取っていました。八月革命ののち、彼は第5戦区(ベトナム南中部)にい

て、南部抗戦委員会主席グエン・ソン(Nguyen Son)将軍に大変敬愛されていました。グエン・ソン将軍は1946年、南中部の前線における作戦指導に行くとき中原氏を同行させました。(このとき彼は攻撃方法に関して、いくつかの意見を(将軍に)具申しました。このときの作戦は勝利を収め、(わが部隊は)2千人近くの敵を殲滅し、何千挺もの銃を入手しました。続いてグエン・ソン将軍は、彼にクエンガイ陸軍士官学校の設立と、そこでの教育に関する意見提供を求めました。それは短期(6カ月)の士官養成学校の一つで、参謀本部は第1期生の成績を高く評価しました。生徒たちは(修了後)ただちに戦闘指揮に立つ任務を与えられました。彼らの多くは手柄を立て、今は大多数が大佐級です、将官級になった人もいます。

1946年末、中原氏はグエン・ソンに従って北へ行き、ナムディンの前線に派遣されました。私はそこで初めて彼に会い、親友になりました。(ナムディンで)敵の小団を攻撃した私たちの中団は、ナムディン紡績工場と敵キャンプの間に挟まれていました。

私たちの方が兵力も大きく、部隊も勇敢でしたが、訓練は不十分、装備は劣っていたし、都市攻撃の経験もありませんでした。私たちは二度にわたって突入を試みましたが、西南部外郭線の一部しか占領することができず、そこからさえ後刻退却を余儀なくされ、多くの死傷者を出しました。問題は、工場を囲む分厚い壁が破壊できないことでした。中原氏は大砲の直射で壁を破壊する(ことによって突破口を開く)ことを提案しました。(一方)現在の党書記長、当時のナムディン省党書記ド・ムオイ同志は、秘密裡に地下水路を通して工場内部へ侵攻するという意見を持ち出しました。軍区参謀長、ナムディン駐屯の中団長、そして中原氏と私は、敵の司令部から(わずか)200メートルの大砲設置予定地点まで直接偵察に行きました。(しかし、この)3回目の攻撃も成功しませんでした。敵の地下水路(の門)は(通常の方法では突破できないように)溶接されていたし、また大砲には通常弾[注7]しかなかったために、(壁には人間の)鼻よりちょっと大きいほどの穴しか開かず、人間がくぐることはできませんでした。でも、銃撃戦と同じように大砲を(水平に)直射するという方法は面白いと思いました。

注7: 徹甲・貫通弾ではなかったということ。

中原氏と私たちは、何度も敵陣の偵察に行きました。敵の機関銃弾が中原氏と私の脚に命中しそうになったこともあります。

私たちの軍隊は、当時まだ敵を消滅させ、都市を解放するほどの力量を持ち合わせていませんでした。(そこで)総司令部は、(とりあえず)敵を消耗させ意気沮喪させる戦略、つまり敵を

できるだけ長く都市に囲み込んで(その行動を)阻み、その間に(わが方は)戦時体制へ移行し、そのうえで長期抗戦に耐えられるよう都市を取り戻してゆくという方法を採用しました。フエには 50 昼夜、ハノイには 60 昼夜、ナムディンには最も長く 87 昼夜、敵部隊を(いわば)監禁しました。それはわが軍民の努力の賜物でした。

ナムディンでの戦闘のあと、中原氏はベトバックに配属されました。(総司令官の)ポー・グエン・ザップ大將は、彼に軍事参議グループへの参加と、10 区[注 8]への直接支援という任務を与えました。

注 8: 第 1 戦区第 10 分区?

47 年の秋から冬にかけて、敵は 4 号道路とロー川を經由してベトバックに挟撃的に侵攻し、わが根拠地を徹底的に破壊して(DRV 政府・軍の)中枢機関を捕捉し、わが軍主力部隊を消滅させ、急速に戦争を終わらせようとしてきました。私たちはこれに打ち勝つための最重要策として、広範囲にわたって遊撃戦を展開すると同時に、挟撃を阻止する(反撃)作戦に力を集中しましたが、中でも 10 区のロー川の岸に大砲を据えて敵船を直撃したことは敵部隊を打ち破るうえで重要な成果をもたらし、私たちは中枢機関の防衛、軍主力の保全と、敵軍撃退に成功しました。

48、49、50 の各年、中原氏と数人の日本人は、レ・ティエット・フン(Le Thiet Hung)が校長を務めるチャン・クォック・トアン陸軍士官学校の教官として働きました。これはベトナムの主要な士官養成学校であって、彼はその養成事業に貢献しました。

51 年から 54 年にかけて、参議グループの日本人数人と中原氏は、ともに参謀本部軍事訓練局で活動し、(抗戦の)その段階において前線で用いなければならなかった戦術の問題として、(仏軍の)飛行機に対する射撃方法や軍事拠点の確実な攻め方について、ベトナム人幹部たちとともに研究を続けました[注 9]。

注 9: 軍用機に対する射撃方法というのは、旧日本軍の用いた多数の小銃と機関銃による一斉「全力射撃」と思われる。

中原氏はベトナム民主共和国政府により上級勲章を授与されています。第 1 級戦勝勲章と第 3 級軍功勲章です。

クアンガイ陸軍中学の彼の生徒たちは、彼に「師友之情」という(漢字)4文字の入った幕を贈りました。

岩井古四郎氏はベトナム名をグエン・バン・サウ(Nguyen Van Sau)といいます。彼は(所属していた)第174中団の戦友たちからは、「日本サウ兄貴」(Anh Sau Nhat)や「日本サウ同志」(dong chi Sau Nhat)の愛称で呼ばれていました。

第174カオ・バック・ラン(Cao Bac Lang)中団は、第28ランソン(Lang Son)中団を後年再編成したもので、岩井氏は第28ランソン中団の偵察幹部として長年を過ごしました。岩井氏の功績は4号道路での戦闘、中でもこの道路における伏兵戦に密接に関連しています。

4号道路は(トンキン湾の)海岸のチュア(Chua)岬すなわちティエンイエン(Tien Yen)からランソンを経てカオバンに抜ける戦略道路です。47年のベトバック戦役では、敵はわが革命勢力のベトバック根拠地を包囲するため、この道路を占領しました。敵は(この道路を使って)増援軍を送ったり、部隊を交代させたり、各部隊に武器弾薬その他の物資を補給したりするために、常に多くのトラック輸送部隊を組織しました。それ(の通路を確保すること)は敵部隊の死活にかかわる問題でした。

(そういった)敵部隊を撃滅し、4号道路や(中越間の)国境地帯を解放する条件は、まだ私たちにはありませんでしたが、48年、49年、50年には4号道路上で敵のトラック輸送部隊に待ち伏せ攻撃をかけて(輸送路を)遮断することが第174中団の任務(の一つ)となりました。

しかし、伏撃に有利な形状を持つ4号道路一帯の地点は限られていたので、それを成功させるには、敵と物凄く知恵比べをしなければなりませんでした。私たちが一度伏撃をやると、敵は(輸送部隊の)通過方法を変えるので、次には別の攻撃方法を考案しなければ不意打ちをすることはできなかつたのです。

例えば、ボンラウ(Bong Lau)での初めての攻撃では、(道路に接する)山林の地形が余りにも狭隘なので、道路ぎりぎりに部隊を配置して敵部隊の来るのを待ち、二番目の車を地雷で破壊すると、敵のトラック部隊は停止しました。私たちは(車列の)先頭と後尾を遮断して突撃し、30台以上の車と数個小団を撃滅しました。逃走できたのは1台だけです。

ところが次回(に同じことをやろうとしても)、敵は航空機で偵察したうえ、bec-gie 犬という耳のピンと立ったヨーロッパ産の大型犬に道路両側を探索させたので、わが方は道路沿いで待ち伏せすることはできなくなりました。で、私たちは、敵に発見されないよう、道路から300~500メートル離れた場所で待ち伏せするという移動伏撃方法をとらざるをえなくなつたのです。すると敵は、それまでのようには行動せず、さらに深く探索するようになり、私たちもさらに遠く離れ

た場所で待ち伏せしなければならなくなりました。遂には、敵は(道路上を)前進する前に、歩兵部隊に高地を占拠させ、危険と見た地点に装甲車を配置し、1日、2日とぶっ続けに爆撃を行ったりするようになりました。(そうやって)通行の安全を確保してから動き始めたわけですが、それも200～300メートルという車間距離をとるので、数百台からなるトラック輸送部隊の車列は20～30キロという長さになったのです。(これでは)私たちが伏撃しても、破壊できるのは多くて10台です。私たちは心配ではありましたが、それでも多くの攻撃を成功させ、100台近くの車を破壊したこともあります。ポーグン(Bo Cung)戦、ルンバイ(Lung Vai)戦、バンナム(Ban Nam)戦、グオンキム(Nguon Kim)戦、チュックガー(Chuc Nga)戦、ナーファー(Na Pha)戦、ブンラン～ルンファイ(Bung Lan-Lung Phay)第1・2戦、ポーグン～ルンバイ第1・2・3戦、ブンラン～ルンファイ第3・4戦、グオンキム第2戦、チュックガー第2戦などです。

そのころフランス人は4号道路を血まみれの道、死の道と呼び、我々は第174中団長を「第4国路大王」と呼びました。

私が4号道路での伏撃戦について(こんなに詳しく)お話したのは、第174中団の偵察大隊長、親愛な「日本サウ兄貴」岩井古四郎氏の役割を明らかにしようと思ったからです。このような勝利を収めるには、的確な敵情把握が必要です。孫武いわく「おのれを知り敵を知れば百戦殆からず」。

岩井氏は監視所を設け、敵兵を捕え、(民間に)スパイ網をつくり、敵のラジオを聴くなどして確実に敵情を把握し、持ち前の分析・判断力で(敵の行動を予測して)適時に上部に報告していました。彼は敵部隊の出発点、進路、停止地点などについても、周到かつ細密な偵察行動を組織しました。この周到な偵察こそが、勝利に向けての「第4国路大王」の指揮を可能にする条件をつくったわけで、「日本サウ兄貴」岩井氏は「第4国路偵察大伯」と呼べるかもしれません。「王あれば必ず伯あり、伯なければ王成らず」です[注10]。

注10:「伯」は王を補佐する有力者(中国古典)。

岩井古四郎氏は多くの敵拠点(に対する攻略戦)でわが方の勝利をもたらす(効果的な)偵察活動を行いました。その中には、1950年の歴史的な国境解放戦役の序章となったドンケ(Dong Khe)拠点攻略戦、1951年に4号道路解放戦役を基礎的に完了させたホアインモー(Hoanh Mo)拠点攻略戦などがあります。岩井氏はベトナム語を見事にこなしましたし、敵情把握には人民に頼らなければならないということで民衆との協同作業にも巧みでした。

彼はベトナム政府から2種の勲章を授与されています。第1級戦功勲章と第1級戦勝勲章です。

本日、ほかの日本人の功績についてお話する(時間を持つ)ことができないのは大変残念です。

この機会に、ベトナム独立のために戦ってくれたすべての日本の友人に謹んで挨拶の言葉を贈り、日越両民族の友好関係の確かな基礎を築いた皆様、そしてその方々を生んだ日本国民の皆様に深い感謝の意を表します。

グエン・テ・グエン大佐

住所: so 10 Khu 38B Tran Phu-Ha Noi

[井川付記]

これは1996年、ハノイの陸軍ホテルで開かれた加茂徳治氏への勲章再授与祝賀会における祝辞の草稿である。人民軍上級幹部が公開の席でこれほど明確に独立戦争参加日本人の功績を語ったのは初めてである。祝賀会にはクエンガイ陸軍中学の卒業生ホー・デー中將、ファン・タイン少將ら陸軍上級幹部多数のほか、同中学で加茂氏の同僚教官であった中原光信氏と谷本喜久男氏が列席した(井川も同席)。括弧内は文意明確化のための井川の挿入(注も井川)。

ある在越遺児の手紙

拝啓、駐ハノイ日本国大使様

伏して申し上げます。私は 1945 年 6 月 21 日生まれのゴー・ザ・カイン(Ngo Gia Khanh)と申す者です。私の父はユカワ・カツオという日本人で、その住所は下記の通りです。

横浜市中区海岸通り団地 203-9。

私の母はゴー・ティ・ツー(Ngo Thi Thu)という名のベトナム人です。ベトナムで 3 人の子供を産みました。私は長男で、下には 2 人の妹がいます。私たち(3 人)はいずれも結婚し、ベトナムで家庭を営んでいます。私と私の 3 人の子供は、日本民族(に属するベトナム国民)として出生届をし、(所属民族を日本人とする)戸籍謄本を所持しています。

私の父がいつベトナムに来たのかは知らされていませんが、父は母と結婚し、ベトナム人民軍に参加しました。1954 年、ベトナム政府は父を日本へ帰国させました。数年後、父はカナメさんという女性と(日本で)結婚し、ハゲミ君という男の子をもうけました。1981 年、父は私たち家族をたずねてベトナムに来ました。1990 年、父は(日本で)病死しました。

日本人の父親を持ち、ベトナム人の母親とともにベトナムで生活している人は私以外にもいて、その数は決して少なくありません。実は父親(とベトナム人の母親)に連れられて日本へ行き、好ましい条件のもとで両親とともに暮らしている人もいます。(ベトナム人の妻との間に生まれた)子供をあえて認知しようとしな(日本人の)父親の背景に、日本の家族関係にからむ何らかの理由があるだろうことは私にもわかることです。私の父親と似た背景を持つ日本人から、こんな話を聞いたことがあります。

「君たちの父親は(日本で)婚姻届をせずにベトナムで家庭を築いた。だから君たちが父親のいる日本へ帰ることは公認されないのだ。このことには政治などの側面もある」

日本国大使様、私自身は以上のような事情をある程度理解しています。しかし、次のことを(あえて)申し上げたいと思います。

私の父親のような日本人のことを過去にさかのぼって申しますと、(母親と結婚した)あの時代は戦争(の時代)でした。戦争はあらゆる人の心に入り込み、個人個人にこういう(現地女性と結婚する)形で種族保存を図るほかはない運命を強いました。戦争が終わり、何十年という歳月が過ぎ、私の父親のような人々は老齢に達し、その中には私の父親と同じく亡くなった方々も

いらっしやいます。

日本国大使様に申し上げます。たとい政治的事情があるとしても、私は日本国に頭を下げて(私たちの存在を認めて下さるよう)願い出ることを恥辱とは思いません。私の父やその他の人々の過去における一切の政治的過誤を取り消していただきたいのです。私はこのような理由で、日本国と日本政府が私たちのことを理解して下さいよう、伏してお願い致します。

日本人の父親とベトナム人の母親を持つ私たちに罪はなく、私たちは戦争の被害者であるにすぎず、体中には日本(人として)の根があり、日本(民族)の血が流れています。日本は私たちの先祖伝来の故郷です。でも——私たちは(事情を)了解してはいますが——(その)日本という故郷へ帰って生活することができません。私たちはこの悲しみに耐えています、だからといって(日本人としての血の)ルーツを捨て去ることもできません。

日本人の父とベトナム人の母の間に生まれてベトナムで暮らしている人々が、もし私のように日本国籍の取得を希望するなら、新聞やテレビで私たちが知るようになった日本政府の人道主義をもって、またあらゆる国際的(に認められている)措置によって、(その人々の)ベトナム在住日本国籍を特別に認可して下さいよう、日本政府にお願い申し上げます。

日本国大使様に申し上げます。ベトナムとアメリカの戦争のとき、アメリカが限りなく卑劣なやり方でベトナムの土地にどれだけの混血児を残したかは歴史の教えるところです。しかし、アメリカは今日、その(多数の混血児という)残された存在を見直しています。ましてや、戦時に日本政府の許可の有無にかかわらず自分の意志により(種族の)存続のために結婚して子供をつくった私たちの日本人の父親たちの場合は、なおさらのこと(に見直されるのは当然のこと)です。とは申しませんが、私たちは(父親不明ということで戸籍上の位置を認められていない多くの米越混血児とは違って日越混血ベトナム人としての)ベトナム政府の認可を得ており、過去にベトナムに住んでいた日本人(の父親)に関する明確な記載のある戸籍謄本が発給されています。(それは)日本人(である私たち)が、どのような機構に属しようとするかという名誉とモラルを失っていないという証明(であって、そのこと)はとても大切だと思います。

日本国大使様、私はここであえてほかのことには触れず、人道上の問題に限って申し上げます。大使様の人道のお取り計らいにより、私のこの陳述の書簡が日本政府に提出されることを願ってやみません。

今回、私が向こう見ずにもこのような書簡を書きましたのは、「いま私の行くことは現在のためではなく未来のためである」と堅く信ずるからです。

大使様の御健康と御幸福をお祈り申し上げます。

敬具

ゴー・ザ・カイン(署名)

1992年3月15日、ハノイ、ベトナム

[井川付記]

この書簡は、ベトナム独立戦争における日本人の功績が、日越関係の好転に伴ってベトナム社会で多少とも認められ、彼らのベトナム人妻子がようやく差別的視線を免れるようになったところに日本大使館に提出されたものである。当時の彼らの心情を代表する一例として紹介する。

本書簡の筆者の父親は故湯川克夫氏(ベトナム名 Ngo Tu Cau、兵庫県出身)で、ベトナム独立戦争では中隊級野戦部隊の指揮官としての数々の戦功により受勲、帰国後は「ベトナム友の会」(1954～60年ベトナム北半から年に帰国した日本人の親睦・相互扶助団体)の幹事として尽力した。戦傷のため死去に至るまで片脚が不自由であった。

本書簡の筆者は2005年3月母親(本名 Nguyen Thi Tu)や妹たちとともにベトナムに健在。故湯川氏の日本人家族とも友好的関係を築いているが、ほかの独立戦争参加日本人の混血子女と同じく日本国籍は取得していない。

文中「政治的過誤」とあるのは、日本政府・軍の許可なく離隊してベトナムに残留したことを指すと思われる。括弧内は文意を明確にするための井川の挿入である。

ベトナム独立戦争の初期段階における「新ベトナム人」

チャン・ディン・マイ

元ベトナム国防省参謀部第1部長（陸軍大佐）

2005年2月15日

1. 第2次世界大戦と民族独立の好機（略）
2. 八月革命防衛のレジスタンスと新ベトナム人の形成（略）
3. 皇軍兵士から新ベトナム人へ

（1）クアンガイ軍学校[注1]

史料によれば、クアンガイは日本軍と早い時期に衝突のあった省の一つであり、同時に（第2次大戦直後にベトナム独立同盟が）日本軍将兵を大胆に活用した地域でもある。それは南部抗戦委員会主席でクアンガイ軍学校長を兼務していたグエン・ソン将軍の決定によるもので、彼は多数の日本軍将兵を軍事教練に当たらせ、大きな成果を収めた。

1946年5月から、日本軍の士官と兵士が次々に中南部抗戦委員会[注2]の大隊[注3]幹部補充学級で軍事教練を開始した。6月からは11名がクアンガイ軍学校の軍事教官を勤めた。

第1大隊[注4]：加茂（ベトナム名ドン・フン）[注5]および助教官1名。

第2大隊：中原光信（ミン・ゴック）および助教官1名。

第3大隊：猪狩（ファン・ライ）および助教官1名。

第4大隊：加茂徳治（ファン・フエ）および助教官1名。

石井卓（グエン・バン・トン）：軍事教官班長[注6]。

佐藤（ミン・タム）：軍事教官班員。

4名の助教官は日本陸軍の元下士官で、ベトナム名しかわからない（ズン、バン、チャイン、フォン）。

以上10名の教官と助教官のほかに、(日本軍の) 軍医が1名いた(レ・チュン)。彼は教官や生徒の健康管理に当たった。

これら日本人教官は6ヶ月にわたって約500名の生徒を指導した。その内容は、5項目の基本技術(射撃、手榴弾投擲、銃剣術、匍匐前進、偽装)、部隊指揮官としての10項目の基本指針(3種の動作と4種の号令を含む)、および戦術であった。戦術指導には、白兵戦および接近戦の技術と、必勝の信念が含まれていた。

この学校で習得した基本動作や戦闘技術は、高い革命精神と結合し、実際の戦場でわが軍の戦闘力を高めることに貢献した。

卒業生はこの学校で学んだ(日本伝統の)尚武精神の影響を受け、(卒業後も)頭を丸坊主にして勇敢に戦い、同僚から「日本人の弟子」というニックネームで呼ばれていた。フランス軍とフランス傀儡政権の軍隊は、その名を耳にただけで(彼らの指揮する部隊を)恐れ、戦闘を避けた。

注1：正式にはクアンガイ陸軍中学。報告書本文参照。

注2：ベトミンは45年の日本敗戦直後、北緯16度以南のベトナム全域の抗仏闘争を統括する南部抗戦委員会を設けたが、46年春、戦況の推移に応じてこれをサイゴンからメコン・デルタに至る南部、フエから中部高原やファンティエットに至る中部南半の両軍区に分けた。中南部抗戦委員会は後者を統括していた。

注3：ベトナムの大隊は旧日本軍の中隊に相当。

注4：クアンガイ陸軍中学の生徒は約100名ずつ4学級に編成され、これを「大隊」と呼んだ。旧日本軍の編成では「中隊」。

注5：これは筆者マイ氏の誤り。正しくは谷本喜久男。

注6：石井少佐はクアンガイ陸軍中学の教官ではなく、正式にはグエン・ソン将軍の軍政顧問で、次項の第5軍区軍政学校教官を兼ねていた。

(2) 第5軍区軍政学校

1947～48年、クアンガイに設立され、その後クアンナム、ビンディン両省にも設置された。そこで軍事教育を担当した日本人には、次の2名がいる。

ホー・チ・タン（日本名不明）。

ホー・チ・クアン（日本名不明）。

（3）フーカイン省配属第365連隊[注7]

この部隊にいた日本人2名は、部隊とともに実戦に従事した。道路脇に機関銃を持って伏せ、しばしば敵の前衛部隊を阻止した。兩人ともカインホア省ニンマーの戦闘で犠牲になった。氏名はわからない。

注7：ベトナム軍の編成では「中団」。

（4）クアンガイ省配属第68連隊

機関銃小隊長は日本人で、ベトナム名はチャイン・ニャット。クアンガイ軍学校助教官チャインと同一人物の可能性はある。

（5）砲兵部隊

ここには多くの元日本軍人がいた。

タイン・ソンという名の新ベトナム人は戦術指導に当たった。

砲の操作を指導した日本人は9名。マイン・チュン、ミン・ピエット、トン・ピエット、バオ、ゴック、ホー・チ・ティエットの6名と氏名不詳3名である。ホー・チ・ティエットは第754中隊の副隊長であった。

タイン・ソンは至近距離からの砲撃を教えた。砲を分解し、ひそかに敵部隊の近くまで運び、（そこで組み立てて）攻撃目標への百発百中をめざすのである。

彼らはベトナムの勝利のために誠心誠意で教練を行った。当時、ベトナム軍は（仏軍に対し）劣勢にあり、砲兵は常に歩兵と行動を共にせざるをえなかった。（兵力でも武器でもはるかに優勢な）敵に大きな損害を与えるには、（必中を期して）至近距離から狙いを定める必要があった。（それは極めて危険な行動であったから）砲兵は自分の任務のみならず、いつでも死傷した戦友の任務を代替すべく、砲のあらゆる操作に精通していなければならない。彼らは（日本人の指導により）暗闇でも砲が操作できるよう、手首を10度ないし11度の角度に折り曲げる訓練を反復しなければならなかった。砲を分解して運搬し、暗闇で組み立て、秘密裡に敵に接近しなければならなかった。彼らは常に（歩兵の）戦闘部隊と行動を共にし、その勇気によって（戦友たちに）慕われていた。

ホー・チ・ティエットが故郷を偲ぶときや休憩中にベトナム人の戦友たちによく教えていた歌がある[注8]。

喜びあふれる歌声
輝け 荒れ野に歌声……
春の野に 風は木々の枝を揺らす
柳は静かに身を動かす
庭の桃の花は 心をゆさぶり うっとりさせ
過ぎ去った春は 桃の花のよう
君を連れて 橋のたもとで花を愛でる
また その川の岸で
二人の心が結ばれる 蘇州の歌とともに

これは砲兵部隊幹部のチュオン・クワン・キンが、新ベトナム人の教官について、愛惜の情をこめて語ったときに歌ってみせたものである。

日本人教官たちはまた、日本軍砲兵の鉄の規律も教えた。彼らは戦闘に際して、自分の脚を砲身に縛りつけ、決してその場を離れないようにしたという。しかしベトナムの将兵は本来厳しい規律を身につけていたので、そこまでする必要はなかった。

注8：内容から推して、元歌は第2次大戦初期の日本のヒット歌謡曲『蘇州夜曲』であろう。

(6) フエと第4軍区の各省

フエは日本軍が進駐したとき、バオ・ダイ皇帝とチャン・チョン・キム首相の傀儡政権を擁立した場所である[注9]。フエには第38軍隷下の第34独立混成旅団司令部が置かれていた。第38軍は仏印全土を統括していた部隊で、司令官は土橋少将であった。司令部は最初サイゴンに置かれていたが、のちにハノイに移った。

フエには(独立闘争の)優秀な指導者が多かったためベトミンの活動が盛んで、そのシンパはバオ・ダイ＝チャン・チョン・キム政権の周辺にもいた。彼らを通じて、(第34旅団参謀の)井川省少佐やその部下たち、またそれ以外の将兵がベトミンに参加し、大きな功績を残した。

興味深いいくつかの人間関係の物語も伝えられている。井川少佐はベトミン現地組織の提供したアジトで身辺世話役を勤めていた女性ハイ・ドゥオンとその妹に深く信頼され、（1946年初頭に）姉妹に別れを告げてフエを去るとき、ベトナム国旗、日本の着物、それから写真を託したという。彼は（第五軍区司令官の）グエン・ソン将軍に信頼されていたが、（同軍区司令部のあったピンディンから中部高原のプレイクの前線へ）視察に赴く途中、クアン・チュン将軍[注10]の実兄ダム・ミン・ヒエンとともに戦死した。

史料によれば、井川少佐はフエの武器庫の鍵を、（ベトミンのシンパであった）チャン・チョン・キム政権治安部隊司令官ファン・トゥ・ランに手渡した[注11]。（当時ベトミン現地組織の幹部であった）カオ・バン・カイン将軍の後年の証言によると、その鍵のおかげで入手することのできた武器の一部は、南部での抗仏闘争を支援するために南下する多くのベトミン軍事単位に分配された。

新ベトナム人となった第34旅団将兵の多くは、クアンガイ軍学校や中南部抗戦委員会幹部補充学校の教官になった。

注9：日本が仏印3ヶ国を形式的にせよ独立させ、グエン朝最後のベトナム皇帝バオ・ダイを王とし、チャン・チョン・キムを首相とするベトナム王国政府を擁立したのは、正しくは1940～41年の日本軍の仏印進駐のときではなく、45年3月にフランスのインドシナ統治機構を武力で解体した「明号作戦」の直後である。

注10：正しくはファン・タイン陸軍少将（退役）。少数民族ムオンの出身で、当時はベトミン初年兵。のちにクアンガイ陸軍中学の生徒になり、卒業後も教官の中原光信氏（2003年、日本で死去）と行動を共にし続けた。

注11：故中原氏によると、事情はやや違う。日本軍が「明号作戦」で仏印軍から奪った武器数千点（小型火砲を含む）は、1個小隊ほどの保安部隊つきでフエの旧王宮に厳重に保管されていた。井川少佐は日本敗戦直前から接触していたフエ地方のベトミン指導者グエン・ゴックらの要請に応じ、敗戦直後の某夜、直属の中原少尉（情報担当）に「緊急事態が生じたということで、武器庫に施錠せずに至急撤収せよという旅団司令部命令を伝えろ」と命じた。中原少尉はベトミンへの譲渡という井川少佐の意図を察知して武器庫へ走った。保安部隊はただちに撤収し、武器

庫は無人・無施錠となり、武器はすべて翌朝にベトミンのものとなった。第34旅団が中国国民党軍による武装解除（45年9月）以前に自前の武器をベトミンに大量に譲渡したという事実はない。

（7）トアティエン省配属第101連隊

二人の日本人が知られている。グエン・チ・ティンとグエン・チ・フン。これらの名前は初期のベトミン軍事指導者の一人グエン・チ・タイン将軍にあやかったものである。

二人は勇敢で軍事技術に長け、いかなる困難にも屈せず、常にベトナム人部隊と行動を共にした。ティンは日本軍入隊前に東洋と西洋の医学を学んだという。（第4）軍区では軍医を兼務し、地元女性の出産にも立ち会った。ベトナムの薬草を使って多くの戦友を治療した。もと日本海軍に所属していたティンは、1948年ゲアン省クアロの海軍部隊に移り、哨戒艇（日本海軍から捕獲）を指揮することになった。中国人海賊との戦闘中に頬を負傷した。治癒後、ゲアン省西部の（ラオス国境の）前線に派遣された。連隊幹部の会議中に敵に包囲されたが、ティンは機敏に機関銃を連射し、フランス兵とラオス兵を殺傷して、会議参加者たちを無事に脱出させた。この功績により、彼は入党を認められた。

（8）第4軍区軍政学校

（教官として）キエン、チュン、ラム・ソン大佐【注12】（の3日本人がいた）。

注12：中川武保氏。「大佐」は自称。正しくは大尉。のちに中原光信氏とともにポー・グエン・ザップ総司令官直属の軍事参議官となった。日本で死去。

（9）第57連隊（第4軍区所属時代：1946～50年）

グエン・バン・バウ、グエン・バン・ティンの2名と氏名不詳の2名、計4名が軍事教練を担当した。また大隊単位の戦闘行動や村レベルの民兵訓練にも従事した。

氏名不詳の2名は、病気で入院したのち（退役して）農場に派遣され、そこでベトナム女性と結婚し、のちに帰国した。

（10）ハティン省第103連隊（第4軍区）

この連隊の軍政学校に2名の日本人がいた。一人は中尉、もう一人は上等兵であった。二人は戦闘技術を指導した。この学校が所期の目的を達して閉鎖されたのち、二人は農場で働き、後年帰国した。氏名はわからない。

(11) 第174連隊

この連隊の偵察中隊長は岩井古四郎（サウ・ニャット）であった。

1950年12月14日、この連隊が仏軍のビンリュー駐屯地を攻撃したとき、敵は堡塁の主要銃眼から猛烈な機銃射撃を反復したため、一昼夜の戦闘にもかかわらず攻略は不可能であった。（わが軍の）山砲の砲弾もわずか2発のみとなり、しかもその1発は不発弾とわかっていて、そこで岩井は砲を分解して敵陣地に近いバラックへ運び、その壁に砲撃用の穴を開け、そこから敵の銃眼を狙うようダン・バン・ピエット連隊長に進言した。進言は容れられ、砲弾命中に続いて歩兵部隊が突入、敵駐屯地を陥落させることができた。岩井はこの功績で勲章を授与された。独立戦争終結後に帰国した彼は、日本ベトナム友好協会の会長に選ばれ[注13]、しばしばベトナムを訪問して支援の手を差し延べた。

この連隊には、一時第12区に配属されていたミンという日本人もいた。彼はトマトが好物で、「トマトのミン」というニックネームで呼ばれていた。（越北山岳地帯の根拠地から戦闘任務を帯びて）平野部へ行く機会があると、彼はいつも真っ先にトマトを買って、旨そうに食っていたという。

注13：岩井氏は愛媛県の水産都市八幡浜の出身。北ベトナム随一の国際港湾都市ハイフォンで日本人相手の小料亭の板前を勤め、1945年に陸軍に召集され、日本敗戦後に離隊してベトミンに参加した。北部からの集団帰国第1陣に加わって1954年に帰国し、同県出身の中原光信氏らとともに日本ベトナム貿易会に属してホンガイ炭の輸入などに尽力、1990年に中原氏に続いて同会会長となり、1990年に死去した。日本ベトナム友好協会の指導的メンバーではあったが、同協会会長になったことはない。ベトナム名は正しくはグエン・バン・サウで、「サウ・ニャット」は「日本人サウ」というほどの意味。

(12) ハノイ戦線

対仏抗戦開始ののち、（1945年末に仏軍主力の攻撃を受けた）ハノイでは、60日

間に及ぶ攻防戦が展開された【注14】が、この戦いにも数人の元日本軍人がベトナム人部隊や市民とともに参加した。全貌は不明であるが、ハノイ南部地区では次の2例が判明している。

吉田（ベトナム名ピエット）はバズーカ砲の射手で、砲を大切に取り扱い、所属分隊【注15】の全員にその使用法を教えた。その分隊は、敵に捕獲されぬよう砲身を背中に縛りつけること、また戦車攻撃中の射手が負傷すれば背後の兵士が射撃を引き受けることを申し合わせていた。46年12月、（旧タンロン城）カウゼン門【注16】の戦闘では、わが軍の堡壘が敵のハプチャク型戦車【注16】の攻撃を受け、負傷者が続出したが、ピエットはその戦車に砲弾を命中させ、これを破壊した。そのため敵部隊は撤退し、わが軍は防衛線を（しばらく）維持することができた。

松（ベトナム名タム）という元日本軍人は、1946年初頭、（ハノイにあった）国防省の軍政学校で教官を勤めていた。この学校の生徒には、チャン・タインやハノイ育ちの青年たちがいた。全国抗戦に備えて、松は戦闘部隊に移され、実戦に加わりながら訓練も行った。（彼の所属していた歩兵）小隊【注17】の隊長はチャン・タインで、松は副隊長であった。二人は師弟でもあって、極めて強い同志愛で結ばれていた。

1946年12月23日、彼らの部隊は当時グエンズー街にあった国防省本部を防衛する任務に就いた。同本部は負傷兵収容・緊急治療所を兼ねていた。敵は戦車や装甲車を含む大部隊を配置し、激しい砲撃ののち四方から攻め込んできた。チャン・タインは対戦車地雷で敵の戦車1台を破壊し、負傷しながらも指揮を続け、敵の波状攻撃を何度も阻んだが、やがて（力尽きて）倒れた。松はただちにチャン・タインに代わって防衛指揮に当たり、まだ自力で動くことのできる負傷兵の離脱を助けた。しかし最後には松も（致命傷を負って）銃砲弾の葉莢の散乱する掩蔽壕に覆い被さるようになり倒れた。

注14：ベトナム南部を制圧した仏軍は、海路北上して1946年11月ハイフォンに上陸、前年9月に独立を宣言したベトナム民主共和国（DRV）の首都ハノイをめざした。ホー・チ・ミンDRV主席は「全国抗戦」を指令したが、まだ戦備の整っていなかったベトナム軍は、勇敢に戦ったにもかかわらず仏軍の圧倒的な火力に抗しえず、激しい市街戦のすえ深夜に市境の紅河を徒渉するという方法で仏軍の包囲網を突破し、DRV中央諸機関とともにベトバック（越北）山岳地帯へ逃れた。ザップ將軍の側近者であった某氏（故人）によると、この脱出方法は中原光信氏が

ポー・グエン・ザップ総司令官に進言したものらしい。

注15：ベトナム軍の編成では「小隊」。

注16：ハノイ中心部を占める広大な王城は、11世紀のリ（李）朝の時代から近世までタンロン（昇龍）城と呼ばれていた。カウゼン門はその城門の一つ。現在、城壁の大部分は撤去され、旧城内には官公庁や人民軍中枢施設が散在している。

注17：ベトナム軍の編成では「中隊」。

（13）第66連隊（通称キコン）とハノイ周辺の部隊

ヨシコ梁木（ベトナム名グエン・ミン・タイ）【注18】：日本の工業専門学校を出たのち日本軍に入隊。彼は（自分の所属していたベトミン軍部隊の）軍事訓練のみならず、農機具や家庭用品の製造と修理を得意とし、自分で工夫して稲の脱穀機をつくったりポンプの修理をしたりした。また自分の妻と一緒に（仏軍支配地域から）疎開した隣人たちに稲作や家畜飼育法を教え、病人や病畜の治療まで引き受けたので、疎開先の住民を含むみんなに敬愛された。彼はまた、前線に派遣された兵士の母親や妻たちの面倒もみた。彼はある姉妹のそれぞれと家庭を持ち、睦まじく暮らした。日本へは姉の方の家族と一緒に帰国し、妹の方の家族はハノイに残った。

チャン・ドック・チュン：某連隊の軍政学校に所属。国道6号沿線で1952年に行われたホアビン戦役で負傷した。

バック・ビエット・トン：某連隊の中隊に所属。

ホアン・バン・ティ：中隊長、のち副大隊長【注19】。勇猛果敢であった。

タン・ビエット：副中隊長。戦闘や軍事教練で功績を残した。

ホー・マイ・タイン：勇猛果敢で知られた。仲間と偵察に出たとき敵に包囲され、バンディン地区の川を泳いで逃亡中に戦死。

アン：某連隊の支援部隊に所属。

フン：戦闘と軍事教練の双方に秀でていた。ベトナムの妻子と共に帰国。日本で死亡する前に、遺灰の半分をベトナムに残した子供に送るよう遺言した。

注18：日本名は正しくは梁木康三。

注19：旧日本軍の大隊はベトナム軍の編成では「小団」。

(14) 第36連隊

カオ、チュン、ファン、カウ、ソンの5名が記憶されている。ベトナムの妻子を同伴することが許されなかったため、それぞれ単身で帰国したグループである[注20]。

注20：北緯17度以北（のちの北ベトナム）で戦っていた日本人約70名は、1954年の独立戦争終結直後に中国経由で帰国したが、この第1次帰国団は妻子同伴を許されなかった。第2次からは妻子同伴が可能となった。

(15) 第35連隊

ミン・ピエット、トン・ピエットの2名が記憶されている。

(16) 国防省付属軍政学校

初期に軍事教練に秀でた新ベトナム人3名がこの学校の教官を勤めた。バオ、タイン、ソン[注21]。

注21：ソンは青山幸治（ベトナム名タイン・ソン）と思われる。のちにDRV中央軍訓練局のスタッフとなったが自殺。

4. 情報の出所について

米国の歴史家セシル・B・カリーの『あらゆる犠牲を惜しまず、まず勝利を——ベトナムの天才ボー・グエン・ザップ』（1997年、プラッシー出版社、ワシントンおよびロンドン）によれば、（全インドシナを統括していた旧日本軍の）第38軍の参謀ムカヤマ大佐の指揮する1500人の日本人将兵が、ザップを支援して白人と戦った。彼らは連合諸国軍によって戦争犯罪人として追及された。ムカヤマ大佐は1947年12月、フランス軍との戦闘で死亡した[注22]。この書物には多くの事実誤認があり、あくまで参考資料である。

（この私の記録のもとになった）情報は、すべて（旧ベトミン軍の）諸部隊の生き残り隊員たちの提供したものである。それら以外にも、まだ情報収集に至っていない多くの部隊がある。

旧日本軍将兵の一部は、さまざまな理由から（日本敗戦後も）降伏を拒否し、

ベトナムの八月革命とその後の正義の戦いに共感を示した。彼らは「不干渉・非行動」を主張し、我々が（仏印軍や日本軍の）武器を略奪したり独自に武装したりするのを助けてくれた。これは革命の極めて困難な時期においては実に貴重な行動であった。ベトナム人と行動を共にした人々は、わが身の危険を顧みずに勇敢に戦い、戦死する人々もいた。一部の人々は、まさに国際戦士の名に恥じぬ功績を上げ、入党を認められた人々もいた。彼らの軍事教練や実戦指導のおかげで、ベトナムの軍隊は短期間に軍事技術や兵員訓練の面で飛躍的な成長を遂げた。中でも特筆すべきは、銃剣や（銃剣以外の）刀を用いて敵を撃滅する接近戦や白兵戦、また戦車、装甲車や重火器（を多用する敵部隊）に対する攻撃方法（の指導）である。当時、フランス軍は、わが方の部隊に日本人がいるとか、その部隊が日本人の訓練を受けたとか聞くと、たちまち恐怖感に襲われたという。

注22：井川の調査範囲には、ムカヤマ大佐なる人物は存在せず、ベトミンに大佐以上の階級の日本人が参加したとの情報もない。第38軍隷下にあった第34独立混成旅団参謀井川少佐の誤伝かもしれない。

5. ベトナム当局の新ベトナム人＝日本人処遇政策

1948～49年、戦争は新たな段階に入った。戦況は依然として厳しかったが、わが軍はすでに（現代的な）戦闘技術を習得し、戦場の条件や自己の力量に見合った作戦ができるまでになった。新ベトナム人もその大半が家庭を持ち、家族を養う必要があった。そこで我々は彼らを家族のもとへ送り返したり、家族と共に農場へ派遣したりした。また独身者には、新たな結婚ができるよう配慮した。さらに、周辺の人々に慕われている優秀な人物については、あくまで本人の意志を尊重しつつ幹部に登用した。1954年に平和が到来すると、日本政府とのパイプができたので、両政府の合意のもとに彼らの帰国の便宜を図った[注23]。日本政府の都合でベトナム人妻子を（ベトナムに）残さざるをえない時もあったし、妻子を同伴（して帰国）できる時もあった[注24]。これは厳然たる歴史的事実であるが、この問題については今後きちんと検証しなければならない。

注23：日本とDRVの間には国交がなかったため、北緯17度以北

からの集団帰国第1陣については、日本政府の了解のもとに、日本共産党下部機関の日本平和委員会が第三国を介してDRV当局との交渉に当たった。その後の帰国には日本赤十字社も関係した。

注24：集団帰国第1陣が妻子同伴を許されなかったことについては、敗戦後まもない日本社会にベトナム人妻子を受け入れる物心両面の条件がなく、また新ベトナム人には日本人妻子のいる者（重婚者）も少なくないというような事情を考慮したDRV当局の決定、またはDRV当局と日本側交渉当事者の合意によるという見方がある。井川らは今のところ、日越両国でこれに関する公的史料を入手していない。

6. ベトナムに駐留した日本軍と、その後の引揚者数

1945年の八月革命の時点で、（仏印駐留の）日本軍の兵力は約10万であった。主力は第38軍で、仏印派遣軍総司令官土橋少将の指揮下にあった。この軍団は2個師団、1独立混成旅団からなる南方総軍の精鋭部隊であった。具体的には、北部の第21師団、中部の第34独立混成旅団、南部の第2師団である。（日本軍がフランスの統治機構を解体した明号作戦前日の）45年3月9日の時点では、第38軍は3個師団と2個独立混成旅団に増強され[注25]、さらにビルマから第55師団が増派されていた。

フランシニによれば（総兵力は）およそ13万。

レ・キムによれば82260人。

ジャン・マリク・デ・バウコプスによれば80270人。

武装解除に当たった連合諸国軍（の記録）によると、北部では1946年3月に3万人が帰国し、189人が戦争犯罪容疑で拘束された。348人は逃亡し、帰国しなかった。南部では46年4月、タイやビルマからの移駐者を含めて7万人が帰国し、728人が逃亡、600人が戦争犯罪容疑をかけられた。民間人は、北部から46年4月に1400人、南部からは（サイゴンの）チーホア監獄に収容されたのち46年5月に5500人が帰国した。

注25：独立混成旅団は最後まで中部管轄の第34旅団のみであった。

7. ベトナム人と行動を共にした日本人

多くの理由が考えられる。日本本土が米軍の爆撃で焦土と化したことによる絶望、戦争犯罪で訴追され虐待されるという恐怖、頼るべき家族の喪失……。またベトナム独立の志士を助けた経歴や、(民間人の場合)長年にわたるビジネス関係のよしみなどから、ベトナムに好感を抱き、(ベトナム人と)一緒に白人と戦おうと決めた者もいた。さらにベトナムには、グエン・アイ・クオック【注26】という世界的に名声のある革命家がいた。

こういったさまざまな理由から、(日本敗戦以後の)5～7ヶ月の間に、日本軍の「不干渉・非行動」方針もあって、多くの将兵がベトナム独立革命を支援するに至った。ホー・チ・ミンの博愛的革命思想によって生まれた「新ベトナム人」という名称は、彼らを鼓舞激励し、誠心誠意われわれと行動を共にする契機となった。

注26：ホー・チ・ミンの別名。

8. いくつかの提言

- ①ベトナム政府はすべての新ベトナム人に、これまでに授与した勲章のほかに、「ベトナム独立貢献」勲章を授与すべく検討する。
- ②革命に貢献した期間に応じて補助金を支給する。
- ③ベトナムで死亡した人々を顕彰する追悼碑を建立する。
- ④ベトナムに残された家族で、日本(の夫やその親族)との連絡のとれない人々から要望があれば、(その要望に沿って)彼らを支援する。

補注

1. 筆者のチャン・ディン・マイ氏はベトナム中部の出身で、ベトナム戦争では米軍の爆撃に対する北ベトナム全域の防空責任者を勤めた。クアンガイ陸軍中学卒業の元陸軍大佐で、今は同中学同窓会の幹事役。日本人教官たちに寄せる思慕の念は今なお極めて強い。
2. 翻訳は加藤則夫。
3. 注はすべて井川。() 内も日本名を記す場合のほかは井川の補筆。

東京財団研究報告書 2005-14

ベトナム独立戦争参加日本人の事跡に基づく日越のあり方に関する研究
2005年10月

著者：
井川 一久

発行者：
東京財団 研究推進部
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3階
TEL:03-6229-5502 FAX:03-6229-5506
URL:<http://www.tkfd.or.jp>

無断転載、複製および転載を禁止します。引用の際は、本報告書が出典であることを必ず明示して下さい。
報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。

東京財団は日本財団等競艇の収益金から出捐を得て活動を行っている財団法人です。



TKFD
THE TOKYO FOUNDATION
東京財団